

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成17年度(2005年度)

平成18年(2006年)3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 17 年度 (2005 年度)

平成 18 年 (2006 年) 3 月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市では、太古から人びとの生活の場が育まれ、数多くの歴史的遺産が現在に受け継がれてきました。それは市域の西部を流れる猪名川や南部の神崎川などを通じて瀬戸内海、大阪湾からもたらされる水産資源と、市域北部の千里丘陵に広がる森林資源など、生活の土台となる豊かな環境が整っていたことの証しでもあります。しかし時代が下り、比較的早くから大阪市内などとの交通路が整備されるにつれて、都市近郊のベッドタウンとしての開発が急激に進んだ結果、埋蔵文化財の保護についても早急に対処する必要に迫られるようになりました。現在では、大規模開発こそ減少しましたが、逆に個人住宅の建築など小規模開発が急増し、埋蔵文化財の保護について従来とは異なる意味で、より迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書は、平成16年度後期に調査を実施した桜塚古墳群、穂積遺跡および各遺跡における確認調査に加え、平成17年度に調査を実施した穂積遺跡、曾根遺跡、本町遺跡、野畠春日町古墳群および各遺跡における確認調査の成果の一部も合わせて掲載しました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成18年(2006年)3月31日

豊中市教育委員会

例　　言

- 本書は、平成17年度国庫補助事業（総額7,000,000円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。
また、平成16年度国庫補助事業として実施した桜塚古墳群第8次調査、穂積遺跡第32次調査の成果を併せて収録するものである。
- 平成17年度事業として、平成17年4月1日から平成18年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
- 発掘調査は、本市教育委員会地域教育振興課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げるとおりである。
- 本書の作成にあたり、各章は各調査担当者が執筆した。また、第IX章は各調査担当者の見解をもとに、浅田尚子が執筆した。なお、全体の編集を橋田が行なった。
- 各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、座標北を示す。
- 挿図・本文中の土色表記の基準は、「新版標準土色帖 1994年版」に基づく。
- 挿図に掲載した出土遺物の縮尺は、原則的に1:4とする。
- 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成16年度（平成16年10月以降）発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
桜塚古墳群	第8次	中桜塚3丁目72	185.1m ²	陣内高志	2004年11月15日 ～11月26日
穂積遺跡	第32次	服部南町1丁目67-1	9.0m ²	清水 篤	2005年3月17日 ～3月30日

平成17年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
穂積遺跡	第33次	服部西町2丁目55-2	81.7m ²	橋田正徳	2005年5月9日 ～6月15日
穂積遺跡	第34次	服部西町2丁目837の一部	55.4m ²	陣内高志	2005年6月6日 ～6月30日
曾根遺跡	第10次	曾根西町3丁目21-9・10 の各一部	24.0m ²	橋田正徳	2004年7月4日 ～7月15日
本町遺跡	第32次	本町2丁目3・4の一部	168.0m ²	橋田正徳	2004年8月12日 ～9月22日
野畠春日町古墳群	第1次	春日町4丁目17-3	50.0m ²	服部聰志	2004年8月29日 ～9月16日

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	
1. 地理的環境 (清水) 1
2. 歴史的環境 (橋田) 1
第Ⅱ章 桜塚古墳群第8次調査	(陣内)
1. 調査の経緯 5
2. 調査の成果	
(1) 基本層序 7
(2) 検出した遺構と遺物 7
3. まとめ 7
第Ⅲ章 穂積遺跡第32次調査	(清水)
1. 調査の経緯 9
2. 調査の成果	
(1) 基本層序 9
(2) 検出した遺構 10
(3) 出土遺物 10
3. まとめ 11
第Ⅳ章 穂積遺跡第33次調査	(橋田)
1. 調査の経緯 13
2. 調査の成果	
(1) 基本層序 14
(2) 検出した遺構と出土遺物 14
3. まとめ 25
第Ⅴ章 穂積遺跡第34次調査	(陣内)
1. 調査の経緯 27
2. 調査の成果	
(1) 基本層序 28
(2) 検出した遺構 29
(3) 出土遺物 31
3. まとめ 33
第VI章 曾根遺跡第10次調査	(橋田)
1. 調査の経緯 35
2. 調査の成果	
(1) 基本層序 35

(2) 検出した遺構と出土遺物	36
3.まとめ	37
第Ⅵ章 本町遺跡第32次調査	(橋田)
1. 調査の経緯	39
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	39
(2) 古墳時代の遺構と遺物	42
(3) 奈良・平安時代の遺構と遺物	55
3.まとめ	56
第Ⅶ章 野畠春日町古墳群第1次調査	(服部)
1. 調査の経緯	59
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	59
(2) 検出した遺構と遺物	60
3.まとめ	61
第Ⅷ章 確認調査の成果	(浅田)

挿 図 ・ 表 目 次

(第Ⅰ章)	
第1図 市内道路分布図	2
第2図 調査地点と周辺の地形	4
(第Ⅱ章)	
第3図 調査範囲図	5
第4図 調査位置図	5
第5図 調査区平面・断面図	6
(第Ⅲ章)	
第6図 調査範囲図	9
第7図 調査位置図	9
第8図 調査区平面・断面図	10
第9図 出土遺物	11
(第Ⅳ章)	
第10図 調査範囲図	13
第11図 調査位置図	13
第12図 1区平面図	14
第13図 調査区平面・断面図	15
第14図 土坑1上層遺物出土状況	16
第15図 土坑1上層出土遺物	16
第16図 河川第26・33・34・37層出土遺物	18
第17図 河川東岸遺物出土状況	19
第18図 河川第35層出土遺物	20
第19図 河川第38・39層出土遺物1	21
第20図 河川第38・39層出土遺物2	23
第21図 河川第42~44層出土遺物	24
(第Ⅴ章)	
第22図 調査範囲図	27
第23図 調査位置図	27
第24図 調査区平面・断面図	28
第25図 井戸1平面・断面図	29
第26図 井戸2平面・断面図	30
第27図 出土遺物(その1)	31
第28図 出土遺物(その2)	32
(第Ⅵ章)	
第29図 調査範囲図	35
第30図 調査位置図	35
第31図 調査区平面・断面図	36
第32図 清1断面図	37
第33図 清1出土遺物	37
(第Ⅶ章)	
第34図 調査範囲図	39
第35図 調査位置図	39

第36図	調査区平面・断面図	40	第74図	トレーンチ掘削状況	66
第37図	建物1～8平面図	41	第75図	トレーンチ断面図	66
第38図	建物出土遺物	42	第76図	トレーンチ掘削状況	66
第39図	土坑1遺物出土状況	44	第77図	トレーンチ断面図	66
第40図	土坑1出土遺物	44	第78図	トレーンチ掘削状況	67
第41図	溝4・5内不整形土坑群断面図	45	第79図	トレーンチ断面図	67
第42図	土坑2遺物出土状況	45	第80図	トレーンチ掘削状況	67
第43図	土坑2～4・6出土遺物	46	第81図	トレーンチ断面図	67
第44図	土坑3平面図・遺物出土状況	47	第82図	トレーンチ掘削状況	67
第45図	土坑4遺物出土状況	48	第83図	トレーンチ平面・断面図	67
第46図	土坑6・7遺物出土状況	49	第84図	トレーンチ掘削状況	67
第47図	土坑6～8、 溝4・5内不整形土坑出土遺物	50	第85図	トレーンチ平面・断面図	67
第48図	土坑9・10出土遺物	52	第86図	トレーンチ掘削状況	68
第49図	溝3出土遺物	52	第87図	トレーンチ断面図	68
第50図	溝4西遺物出土状況	53	第88図	トレーンチ掘削状況	68
第51図	溝4・5・溝4西出土遺物	54	第89図	トレーンチ平面・断面図	68
第52図	土坑14平面・断面図	55	第90図	トレーンチ掘削状況	68
第53図	溝1・土坑14出土遺物	56	第91図	トレーンチ断面図	68
第54図	溝1内標出土状況(部分)	56	第92図	トレーンチ掘削状況	68
第55図	第30・32次調査区平面図	57	第93図	トレーンチ断面図	68
(第Ⅷ章)			第94図	トレーンチ掘削状況	69
第56図	調査範囲図	59	第95図	トレーンチ断面図	69
第57図	調査位置図	59	第96図	トレーンチ掘削状況	69
第58図	調査区平面・断面図	60	第97図	トレーンチ断面図	69
第59図	土坑1平面・断面図	61	第98図	トレーンチ掘削状況	69
第60図	土坑2平面・断面図	62	第99図	トレーンチ断面図	69
(第Ⅸ章)			第100図	トレーンチ掘削状況	69
第1表	確認調査一覧表	63	第101図	トレーンチ断面図	69
第61図	確認調査地点位置図	64	第102図	トレーンチ掘削状況	70
第62図	トレーンチ掘削状況	65	第103図	トレーンチ平面・断面図	70
第63図	トレーンチ断面図	65	第104図	トレーンチ掘削状況	70
第64図	トレーンチ掘削状況	65	第105図	トレーンチ断面図	70
第65図	トレーンチ断面図	65	第106図	トレーンチ配置図	70
第66図	トレーンチ掘削状況	65	第107図	トレーンチ断面図	70
第67図	トレーンチ断面図	65	第108図	トレーンチ掘削状況	70
第68図	トレーンチ掘削状況	65	第109図	トレーンチ断面図	70
第69図	トレーンチ平面・断面図	65	第110図	トレーンチ掘削状況	71
第70図	トレーンチ掘削状況	66	第111図	トレーンチ断面図	71
第71図	トレーンチ断面図	66	第112図	トレーンチ掘削状況	71
第72図	トレーンチ掘削状況	66	第113図	トレーンチ断面図	71
第73図	トレーンチ断面図	66	第114図	トレーンチ掘削状況	71
			第115図	トレーンチ断面図	71

第116図	トレンチ掘削状況	71	第125図	トレンチ断面図	72
第117図	トレンチ断面図	71	第126図	トレンチ掘削状況	73
第118図	トレンチ掘削状況	72	第127図	トレンチ断面図	73
第119図	トレンチ断面図	72	第128図	トレンチ掘削状況	73
第120図	トレンチ掘削状況	72	第129図	トレンチ断面図	73
第121図	トレンチ平面・断面図	72	第130図	トレンチ掘削状況	73
第122図	トレンチ掘削状況	72	第131図	トレンチ断面図	73
第123図	トレンチ断面図	72	第132図	トレンチ掘削状況	73
第124図	トレンチ掘削状況	72	第133図	トレンチ断面図	73

図 版 目 次

- 図版1 桜塚古墳群第8次調査**
 (1) 調査区全景 (2) 溝1掘削状況
- 図版2 穂積遺跡第32次調査**
 (1) 調査区全景
 (2) 落ち込み状遺構出土物出土状況
- 図版3 穂積遺跡第33次調査**
 (1) 1区全景 (2) 2区全景
- 図版4 穂積遺跡第33次調査**
 (1) 3区全景 (2) 基本十層(3区南壁面)
- 図版5 穂積遺跡第33次調査**
 (1) 1区十坑1上層遺物出土状況
 (2) 河川東岸遺物出土状況
- 図版6 穂積遺跡第33次調査 出土遺物**
 (1) 第16図11 (2) 第16図14 (3) 第16図12
 (4) 第19図2 (5) 上:第16図18 下:第15図1
- 図版7 穂積遺跡第33次調査 出土遺物**
 (1) 第16図23 (2) 第16図22 (3) 第15図6
 (4) 第16図1 (5) 第19図12
- 図版8 穂積遺跡第33次調査 出土遺物**
 (1) 第19図19 (2) 第19図25 (3) 第20図30
 (4) 第16図2 (5) 第19図20 (6) 第20図34
 (7) 第21図4
- 図版9 穂積遺跡第34次調査**
 (1) 調査区全景(東半部)
 (2) 井戸1種群検出状況
- 図版10 穂積遺跡第34次調査**
 (1) 井戸1断面 (2) 調査区全景(西半部)
- 図版11 穂積遺跡第34次調査**
 (1) 井戸2断面 (2) 溝1断面
- 図版12 曾根遺跡第10次調査**
 (1) 調査区全景 (2) 溝1断面
- 図版13 本町遺跡第32次調査**
 (1) 1区企景(黒褐色執綱粒砂層上面)
 (2) 1区全景(基盤層上面)

- 図版14 本町遺跡第32次調査**
 (1) 2区全景 (2) 2区近景
- 図版15 本町遺跡第32次調査**
 (1) 土坑6・8遺物出土状況
 (2) 溝4・5、土坑6・7土層断面
- 図版16 本町遺跡第32次調査**
 (1) 土坑6遺物出土状況
 (2) 土坑1土層断面・遺物出土状況
- 図版17 本町遺跡第32次調査**
 (1) 土坑2遺物出土状況
 (2) 土坑3遺物出土状況
- 図版18 本町遺跡第32次調査**
 (1) 土坑4遺物出土状況
 (2) 土坑7遺物出土状況 (3) 土坑14上層断面
 (4) 溝1標出土状況1 (5) 溝1標出土状況2
- 図版19 本町遺跡第32次調査 出土遺物**
 (1) 第43図1 (2) 第43図7 (3) 第43図1
 (4) 第43図3 (5) 第43図4 (6) 第43図8
- 図版20 本町遺跡第32次調査 出土遺物**
 (1) 第43図10 (2) 第43図14 (3) 第43図15
 (4) 第47図1 (5) 第43図11 (6) 第43図21
- 図版21 本町遺跡第32次調査 出土遺物**
 (1) 第43図9 (2) 第43図18 (3) 第47図3
 (4) 第47図13 (5) 第47図4 (6) 第47図5
 (7) 第47図6 (8) 第47図7
- 図版22 本町遺跡第32次調査 出土遺物**
 (1) 第43図20 (2) 第47図10 (3) 第47図15
 (4) 第47図8 (5) 第47図14 (6) 第47図19
 (7) 第53図1
- 図版23 野畠春日町古墳群第1次調査**
 (1) 調査区北半部の状況 (2) 土坑1検出状況
- 図版24 野畠春日町古墳群第1次調査**
 (1) 調査区南半部の状況 (2) 土坑2検出状況
- 図版25 野畠春日町古墳群第1次調査**
 (1) 土坑1土層断面 (2) 土坑2上層断面

第Ⅰ章 位置と環境

1. 地理的環境

豊中市は明治43年の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に、大都市近郊の農村から典型的な衛星住宅都市へと発展し、現在では約37㎢の市域に約38万人もの市民が生活を営むベッドタウンとなっている。市域は地理的に大阪から西国・北国への玄関口として交通の要衝を占める位置にあり、古くは猪名川や千里川、天竺川など市域を南北に流れる河川や、南部の神崎川が瀬戸内海や淀川河口からの主たる交通路として利用されてきた。また、大坂天神橋を起点として市域を南北に貫く能勢街道（吉野嶺道）など、幹線道路としての陸路も縦横に配され、大阪国際空港や名神高速道路をはじめとする様々な交通機関が整備された現在の豊中の原型をここに見出すことができる。

一方、都市化が進む過程で、鉄道や道路、河川に沿って開発が先行した結果、そうした場所から徐々に旧地形が損なわれ、最終的には市域全体に及ぶ開削と埋立によって外見上の地形変化が均されていった。しかしながら、市域で最も標高の高い島熊山付近は海拔100m以上を測り、最も低い大島町付近では海拔1m以下となっていることからもわかるように、北から南へあるいは東から西へと傾斜する地形変化を現在でもよく観察することができる。このような地形変化は、巨視的に見れば、箕面以北の丹波山地から断層帯による地溝状の低地をはさみ、その間に広がる千里・刀根山などの丘陵地帯（高～中位段丘）、丘陵に連なる平坦な台地と斜面（中～低位段丘）、そして猪名川の氾濫原、大阪平野へと続く沖積低地に区分される。千里丘陵は大阪層群の模式地として詳細な地質調査がなされ、層群中のMa8（海成粘土層）直下からマチカネワニの全身骨格が出土したことでも著名である。

人類の生活痕跡が見出されるのは主として段丘堆積層上であり、千里川上流域の中～低位段丘、台地上に多くの遺跡が分布している。乾燥した台地上から湿潤な沖積低地に本格的に進出するのは弥生終末期以降で、猪名川や天竺川などによって形成された自然堤防上をその生活域とし、河川の堆積作用によって海岸線が後退するにつれてその活動領域を南方へ拡大させていった。やがて古大阪湾が完全に陸化すると、猪名川河口の発達したデルタや複雑に流路が交錯した神崎川河口付近は、中・近世段階の水上交通の要衝として盛んに利用されるようになる。

2. 歴史的環境

今回、第Ⅲ～V章で報告する堆積遺跡は、猪名川・天竺川・伊安川の沖積作用で形成された平野部に立地するが、それぞれの調査区でその環境は微妙に異なる。第Ⅱ章の桜塚古墳群、第Ⅵ章の曾根遺跡、第Ⅷ章の本町遺跡は、千里川左岸の中～低位段丘上に、また第Ⅸ章の野畠春日町古墳群は、千里川右岸の中位段丘上に立地する。以下、調査区に関する環境・時期に限

2. 历史的环境



第1図 市内遺跡分布図（1：50,000）

定して、遺跡の動向を中心に述べていく。

桜塚古墳群 桃津最大の中期古墳群である桜塚古墳群は、大塚古墳・御獅子塚古墳などの東群と大石塚古墳・小石塚古墳などの西群からなる。また近年の調査により、中央部と南部に新たな群の存在が推定されるようになった。調査区は東群内に位置するが、明治期の絵図には当地点付近に古墳の存在は示されていない。

穂積遺跡 弥生終末期における穂積遺跡は、連続式銅鏡未製品などに示される銅製品生産を中心に展開する集落として周知されている。この段階の集落は、遺跡中央付近に位置し、河川両岸に分かれて展開する。河川右岸側の集落では、大型掘立柱建物が確認される一方、左岸側は銅製品生産の集落と推定されている。しかし、古墳時代前期の段階で集落は南の微高地にその中心を移動し、やがて分散するかのように可視的な集落は解体する。なお、第Ⅳ章で報告される第33次調査区は、集落と東西に分断した河川と右岸の集落の一角を調査したものである。

その後、11世紀前半になり、服部村旧集落中央付近で建物群が散在的に出現し、11世紀中頃から明確な集落を形成はじめる。文献にみる垂水西牧の初見と期を同じくしており、壯園の立券に連動した地域再編が想定される。このような状況は、仮設地図に見える市場といった小集落でも追認されるが、穂積村旧集落や少路では確認できていない。なお、市場は、その字のとおり、垂水西牧坂郷の流通拠点である住吉（穂積）市庭に比定される。第Ⅲ章で報告する第32次調査区は、その市庭推定地西方に位置する建物群の一角を調査したものである。また、第V章で報告する第34次調査は、実態が明確ではない字「少路」の旧集落部ではじめて行われた調査である。

曾根遺跡 弥生時代後期に明確な集落として展開する曾根遺跡は、終末期にその盛期を迎える。この時期、集落の範囲は丘陵平坦部のみならず、小解析谷斜面にまで拡大することが推定されている。また、集落中心部付近では掘立柱建物が多く建てられ、密集する状況がうかがえるが、古墳時代前期には集落の規模は縮小し、過疎化が進む。第VI章で報告する第10次調査区は、そうした集落域の北方、解析谷への傾斜変換点付近に位置する。

本町遺跡 当遺跡は桜井谷窯跡群で生産された須恵器の集散地として、古くから周知してきた。近年、遺跡中心部で6世紀後半代に出現する豪族居館が確認され、またその北方50mの地点では、池状の大型土坑から7世紀の遺物とともに寺院の存在を示す瓦が若干出土するなど、新たな知見が蓄積されている。そして、これらの成果と既往の調査で確認されている多数の掘立柱建物群の存在をもとに、都市的景観を呈する集落の可能性も想定されはじめている。なお、第VII章で報告する第32次調査区は、そうした集落中心部から約150mほど西南に位置する。

野畑春日町古墳群 横穴式石室を伴う大小6基の古墳からなる古墳群とされる。その時期は中期末～後期に推定されるものの、出土遺物がないため、具体的な時期は不明である。宅地造成によって消滅し、その位置についても特定されていない。ところで、今回確認された遺構は古墳周濠ではなく、野畑春日町遺跡との関連が想定されるものである。

2. 歴史的環境



第2図 調査地点と周辺の地形 (1 : 50,000)

第Ⅱ章 桜塚古墳群第8次調査

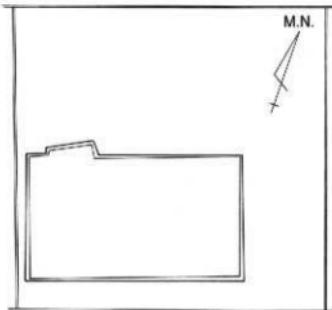
1. 調査の経緯

当調査地は、農中市中桜塚3丁目72に所在する。当地が桜塚古墳群の包蔵地内に該当することから、平成16年10月12日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて確認調査を行ったところ、地表下70cmで遺構面を確認し、その上面において溝状遺構の一部を検出した。

申請地では共同住宅の建設が予定されており、それに伴う基礎掘削深度が遺構の破壊を免れない程度にまで及ぶことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。

本調査は、平成16年11月15日から平成16年11月26日にかけて実施し、調査対象面積は、申請地のうち建築面積である185m²に設定された。

次節以下、今回の調査成果について述べていく。

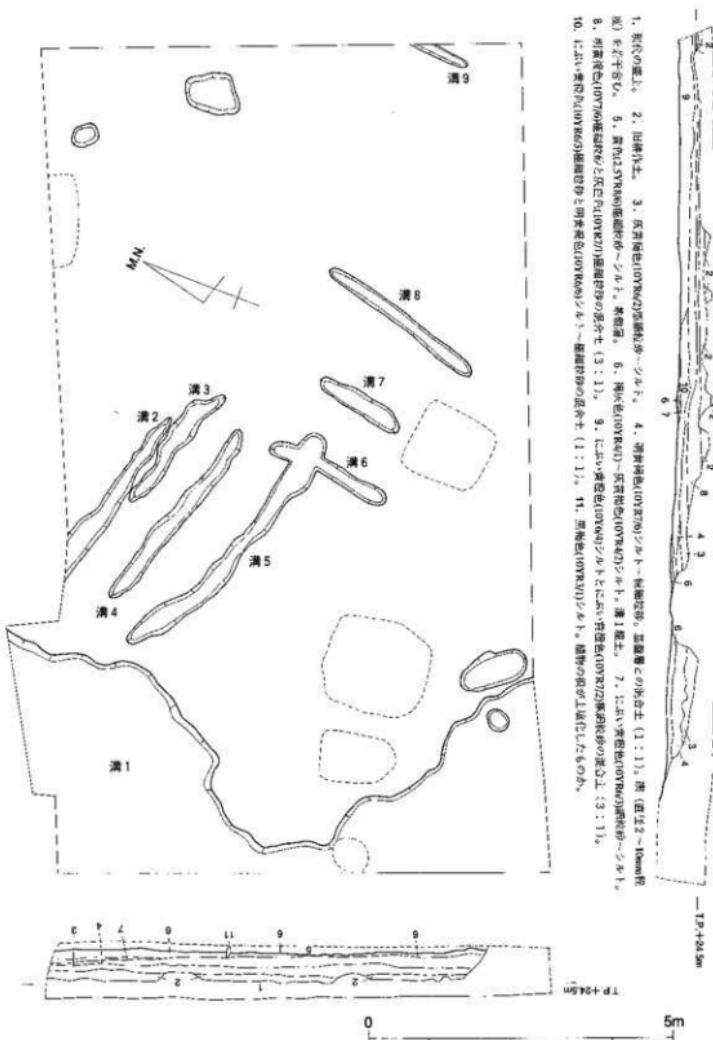


第3図 調査範囲図 (1:300)



第4図 調査位置図 (1:5000)

2. 調査の成果



第5図 調査区平面・断面図 (1:80)

2. 調査の成果

(1) 基本層序

今回の調査地の基本層序は概ね5層からなる。第1層は現代の盛土であり、統いて第2層は旧耕作土に相当する。第3層は灰黄褐色極細粒砂～シルトであり、東に向かって層厚が薄くなりやがて消滅する。第4層は明黄褐色シルト～極細粒砂であり、後述の第5層（基盤層）と似るがしまりが弱く微細ながらブロック状も含まれることから、盛土または整地を目的とした上層の可能性が考えられる。第5層は黄色シルト～極細粒砂であり、当該調査区における基盤層に相当する。西側にむかって粘性が次第に強くなる。

今日は第5層上面において遺構を検出し調査を実施した。

(2) 検出した遺構と遺物

以下では、今回の調査で検出した遺構と遺物について記していく。

溝1 調査区西側において検出した。遺構全体の形状は不明だが、少なくとも検出部分からは西壁中央付近で大きく屈曲し、それぞれ調査区外へ伸びていくものとみられる。溝の検出幅は最大で2.5m以上をはかるが、深度は10cm程度と浅い。検出面から基底面までは非常に緩やかな傾斜である。埋土は粘性の強い黒褐色シルト（～極細粒砂）の單一層であり、遺物は土師器碎片が微量出土している程度であり、明確に時期が特定できるものは出土していない。よって溝1の掘削時期は土師器碎片を手がかりにするならば、古墳時代以降に削削されたものとみられる。

溝群（溝2～9） 主に調査区中央部において検出した小規模な溝群である。これらの溝は走る方向から溝2～5（東西方向）と溝6～9（南北方向）に分類されるが、機能上の差はないものと考えられる。各溝の幅は10～20cm、深さは3cm程度であり、平行する溝同士は0.8～1.2mに収まっており概ね一定の間隔であることがうかがえる。埋土は褐灰色シルト中に基盤層ブロックを若干含んだものであった。以上の特徴からこれらの溝群は築溝であった可能性が高い。なお、埋土からは遺物は出土していないため溝群の正確な掘削時期は不明であるが、少なくとも中世以降の所産であろう。

その他の遺構と遺物 その他に土坑状遺構2基とピット2基を検出している。いずれも深度は3～5cm程度と浅く、埋土の特徴は溝群とはほぼ同様の傾向を示すことから、これらの掘削時期は溝群とはほぼ同時期であった可能性が高い。埋土からは遺物は出土していない。

遺構出土遺物は上述の通りだが、その他に基盤層直上において須恵器大甕・須恵器こね鉢・土師器小皿などの碎片遺物を確認しているが、いずれも遺構に伴うものではない。

3. まとめ

今回の調査地は桜塚古墳群の一角に相当し、付近には大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚古墳など当該古墳群を代表する古墳が所在する。明治の絵図では桜塚一帯に36基の古墳が描かれており、さらに最近になって絵図が描かれる以前に消滅した古墳の存在も明らかになるなどして、現在のところ、桜塚古墳群は40基以上の古墳からなっていたことが考えられるようになっている。以下では、溝1が絵図に描かれていない古墳の一部である可能性について検討したい。

まず、溝1がほぼ直角に屈曲していることから想定される墳形は、方墳または前方後円墳など前方部を有する形態が挙げられ、墳丘規模は一辺6m以上になってこよう。ただし、調査区内で溝1に相対し得るような溝状遺構が未確認であったことから、方墳の場合で一辺が14m以上の墳丘規模を想定する必要がある。出土遺物は土師器碎片に限られ、須恵器、埴輪片は出土していない。埋土は均質なシルト層のみで構成され自然堆積の様相を示す。溝1は近世以降の開墾によってかなり削平を受けて

3.まとめ

いる可能性が高いため、仮に溝1が古墳周溝であった場合、本来の規模・深度はもう一回りが大きかったであろう。

一方で問題点も見出せる。一つは溝1が溝2～5あるいは溝6～9とそれぞれほぼ平行に走っていることである。自然地形の制約による偶然の所産である可能性も考えられるが、鍛溝と平行している事実は溝1が耕作閑地の溝であった可能性も全く否定できない。次に溝1の明確な掘削時期が不明であることが挙げられよう。調査区内で土師器・須恵器片が出土したことで、付近に古墳時代後期頃の遺構の存在は推察されるものの、今回の調査で溝1が当該時期の造構に該当することが裏付けられたわけではない。桜塚古墳群第1次調査では南西から北東方向に走る近世～近代の溝（検出幅4m、深度10cm程度）が検出されている。当該溝と今回の溝1はそれぞれ機能は不明であるが形態、規模などが比較的共通していることから、溝1の掘削時期が大幅にくだる可能性も考えられる。

以上溝1の評価を行ってきたが、いずれにせよ溝1が古墳周溝であるかについては、部分的な検出と出土遺物に恵まれなかつたことから積極的な評価は行えず可能性の指摘にとどまらざるを得なかつた。今後は隣接地、あるいは同様の調査事例の増加を待って再検討していく必要があろう。

第Ⅲ章 穂積遺跡第32次調査

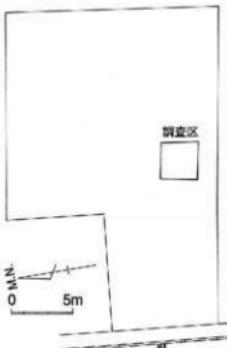
1. 調査の経緯

当該調査地は服部西町1丁目67-1に所在する。建築工事に伴って2005年1月25日に確認調査を実施し、現地表面下約1.2mで遺物包含層、約1.4mにおいて遺構面が遺存していることを確認した。協議の結果、遺構の損壊が避けられない部分の9m²について発掘調査を行なうこととし、2005年3月17日から同年3月30日までの日程で実施した。

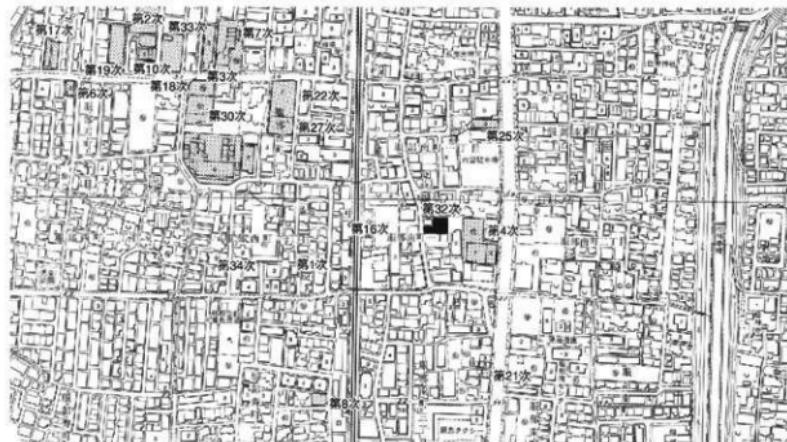
2. 調査の成果

(1) 基本層序

当該調査では調査範囲が狹小な範囲に限定されていたこともあり、周辺全体の基本層序を反映していない可能性もあるが、現代の盛土を除いた層序は概ね以下に示すような堆積状況を示す。2層に見られるような黒灰色系の堆積層は、周辺でも必ず存在し、近世から現代までの耕作土と考えられる。また、3層は天竺川水系の洪水作用による粗粒砂中心の堆積層で、中世以降の堆積物であろうと考えられる。当該層は国道東側では層厚を増し、氾濫原へと連続していく。10層は若干の遺物片を含みながらも穗積遺跡東半部の古代から中世の遺構面を形成する基盤層となっている。この基盤層は当該調査でも溝等の検出面となつており、比較的堅緻である。遺跡西半部に見られるような弥生あるいは縄文時代の包含層は周辺では確認されていない。



第6図 調査範囲図 (1:400)

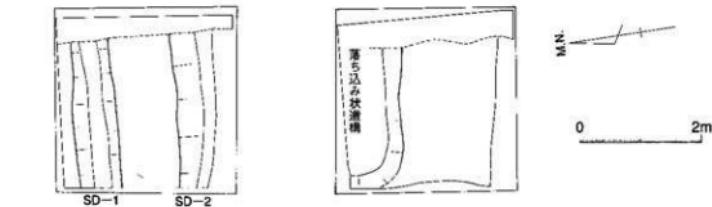


第7図 調査地位置図 (1:5000)

1. 墓上・墓地土。2. 黒色 (N2/0) シルト (～植物物質)。 ϕ 1cm以下の礫を若干含む。下半部には中粒砂 (～植物物質) を夾層状に含む。近・現代の耕作土。3. 黄灰色 (SB6/1) シルト混じり中粒砂 (～細砂)。 ϕ 5mm程度の礫を多く含む。淘汰多く、軟弱。底水堆積帶。

【4～7 SD-1土】4. 黄色 (N6/0～N5/0) シルト混じり中粒砂 (～細砂)。 ϕ 5mm程度の礫を多く含む。炭化物を若干含む。青灰色 (SB6/1) シルトの小ブロックを夾平和す。5. 黄灰色 (N3/0) シルト (～粘土)。炭化物を多く含む。 ϕ 30mm以下の礫を若干含む。上段はグリーン化し、オリ・ブ灰土 (2.5GY6/1) を呈する。7. 黄灰色 (SGV8/1) シルトと灰土 (N4/0) シルト (～植物物質) がロック状に混在。

【8～9 SD-2土】8. 灰色 (N6/0) 中粒砂 (～植物物質)。 ϕ 10mm以下の中粒砂を多く含む。炭化物を多く含む。9. 白色 (N7/0) シルト (～粘土)。下半部には灰色 (N6/0) 混じ砂を多く含む。10. 同オリーブ灰土 (SGV7/1) シルト混じり白砂 (～植物物質)。上部には遺物の跡跡を留め含む。地表下約200cm附近に第二級化成の泥炭が頗る。それ以下は灰色 (N5/0)、最下部附近は灰白色 (N7/0) を呈する。淘汰がよく、台原斜面地の基盤をなす。



第8図 調査区平面・断面図 (1:80) ※左は上面、右は下面の遺構

(2) 検出した遺構

今回、検出した遺構は、上面の遺構として溝が2条、下面の遺構として落ち込みあるいは区画溝の一部と考えられるものである。

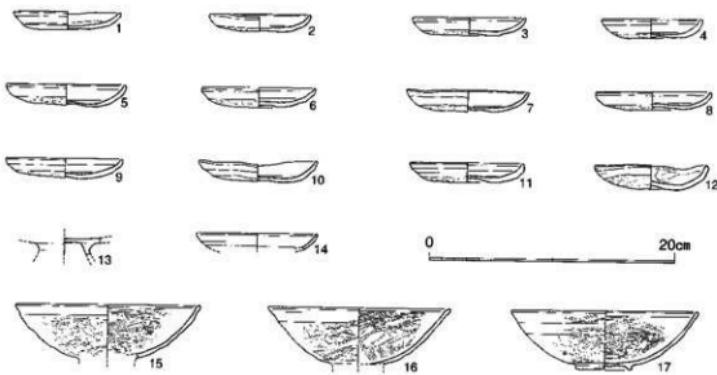
上面で検出した溝2条は、幅約90cm、深さ約20～40cmを測り、浅いり鉢状の形状を持つ。両者は約80cmの間隔をおいて東西方向に直線的に配置されていた。埋土や検出状況から勘案して耕作に伴う溝であることが容易に推測されるが、極端に検出範囲が限定されていることから、条里等の区画上の位置を明確にすることは現時点では困難である。出土遺物からみて概ね13世紀前半代の耕作面に伴うものと考えられる。

下面で検出された落ち込み状の遺構は北側のSD-1直下で検出されたが、埋土（第8図7層）は黒灰色系で粘性が強く、炭化物の塊をかなり多く含んでいた。遺構の南側肩部は垂直に近い形状をしており、上面の溝とは明らかに異なる。西端部ではほぼ直角に掘削が終えられていてそのまま調査区外西へは続かない。ここではこの遺構が土坑なのか、直角に屈曲する溝なのかという判断をくだすことはできないが、土器の皿が重複して出土した状況などから、耕作に伴うものではなく、屋敷地に関連する遺構であることが推定される。出土遺物からみて概ね12世紀前半にかけて使用、廃絶した可能性が高い。

(3) 出土遺物

1～3は包含層及び遺構上面で、4はSD-1から出土した土師器皿で、淡い褐色を呈し、口径は8cm後半から9cmを測り、口縁端部は丸味を帯びる粗雑なつくりである。13世紀前半頃に製作されたものと考えられる。

5～12はSD-1下層の落ち込み状遺構から出土した土師器皿、13は土師器皿の高台部分、14は磁器の小皿である。土師器皿は上面のものと比較して口径がやや大きく、2段ナデを施し、端部側面を面



第9図 出土遺物 (1:4)

取りするものが多い。15~17は和泉型の瓦器碗である。口径は概ね15cm程度を測る。口縁付近はやや外反気味に仕上げられ、2段ナデになっている。体部外面には若干のヘラミガキが認められ、見込みの曲線ミガキはやや間隔をあけて施されている。時期的にはII-2~3期にあたり、土師器皿等とも併行関係にあるものと考えられる。概ね12世紀前半の所産であろう。

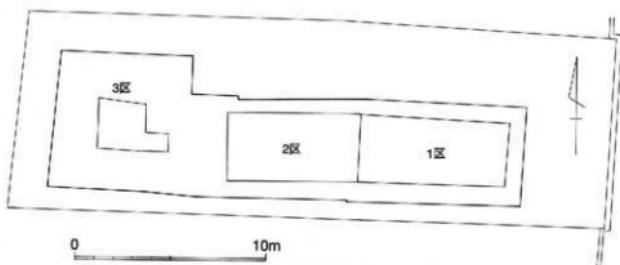
3.まとめ

今回の調査では、13世紀前半頃の耕作関連遺構と、それに遡る時期の屋敷地に關係すると考えられる落ち込み状遺構を確認した。これらのうち、特に下面で確認された落ち込み状の遺構は、西南方向に位置する第4次調査地で検出された屋敷地との関連、巨視的には垂水西牧内での屋敷地の分布に関して注目すべき遺構であると言えよう。この遺構は調査区北側への屋敷の展開を示唆しており、今後、周辺での調査によって、その詳細が明らかにされるものと考えられる。

第IV章 穂積遺跡第33次調査

1. 調査の経緯

当調査区は、服部西町2丁目55-2に所在する。個人による共同住宅新築に伴い、平成17年（2005年）3月15日に埋蔵文化財発掘の届け出が提出された。これをうけて、4月8日に確認調査を行ったところ、現地表下2.6mのところで河川埋土および遺物包含層などが確認された。一方、計画中の建物は杭地盤を伴うもので、計画変更によって遺構の破壊は避けられないことが、建築業者から伝えられた。この結果をうけて、記録保存にかかる発掘調査の必要が生じたことから、5月9日～6月15日にかけて発掘調査を行うことになった。



第10図 調査範囲図（1:250）



第11図 調査地位置図（1:5000）

2. 調査の成果

(1) 基本層序

当調査区の基本層は、周辺の調査区と大きく変わることはないので、ここでは旧耕作土以下の大別層にかかる概要を述べるだけにとどめる。

第Ⅰ層 旧耕作土直下に堆積する。南壁面土層4~7が、この層にあたる。主に灰色細粒砂で構成される水成層で、各層の上面は耕作面となる可能性が高い。このうち土層6・7の上面は、第18次調査区で建物の可能性が考えられる柱穴を検出していることから、11世紀以前の堆積時期が考えられる。

第Ⅱ層 南壁面土層8~11・16が、この層にあたる。主に粘土で構成される。河川上面では河川埋土との識別は困難であった。上下層間において搅拌が著しく、細分層も區別にしにくい。

同層から出土した遺物は、摩滅した土器細片に限られ、その堆積時期は不明である。ただし、第27次調査区で確認された対応層の堆積時期は7世紀に下るものではなく、当調査区の灰色粘土層も6世紀前後となる可能性が考えられる。

第Ⅲ層 第IV層上面に堆積する黒褐色粘質土で、弥生終末期~古墳中期頃の集落に伴う遺物包含層である。しかし、遺物の出土状況から、厳密には土坑1・2の上層埋土とした方が妥当であり、出土した遺物についても土坑に帰属するものとして扱った。

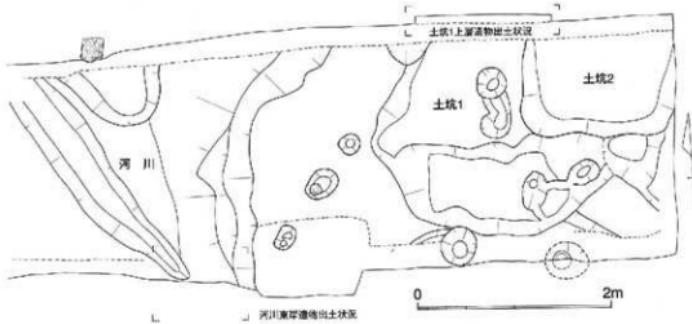
第Ⅳ層 明青灰色中粒砂（シルトを多く含む）からなる柔弱な水成層で、同層上面において弥生終末期以降の集落が展開する。第IV層の検出高は、T.P.+1.2mである。

なお、第IV層以下は掘削していないため、その状況は明確ではない。しかし、隣接する第19次調査区でも縄文海成層が確認されていることから、当調査区も同じ状況が予想される。

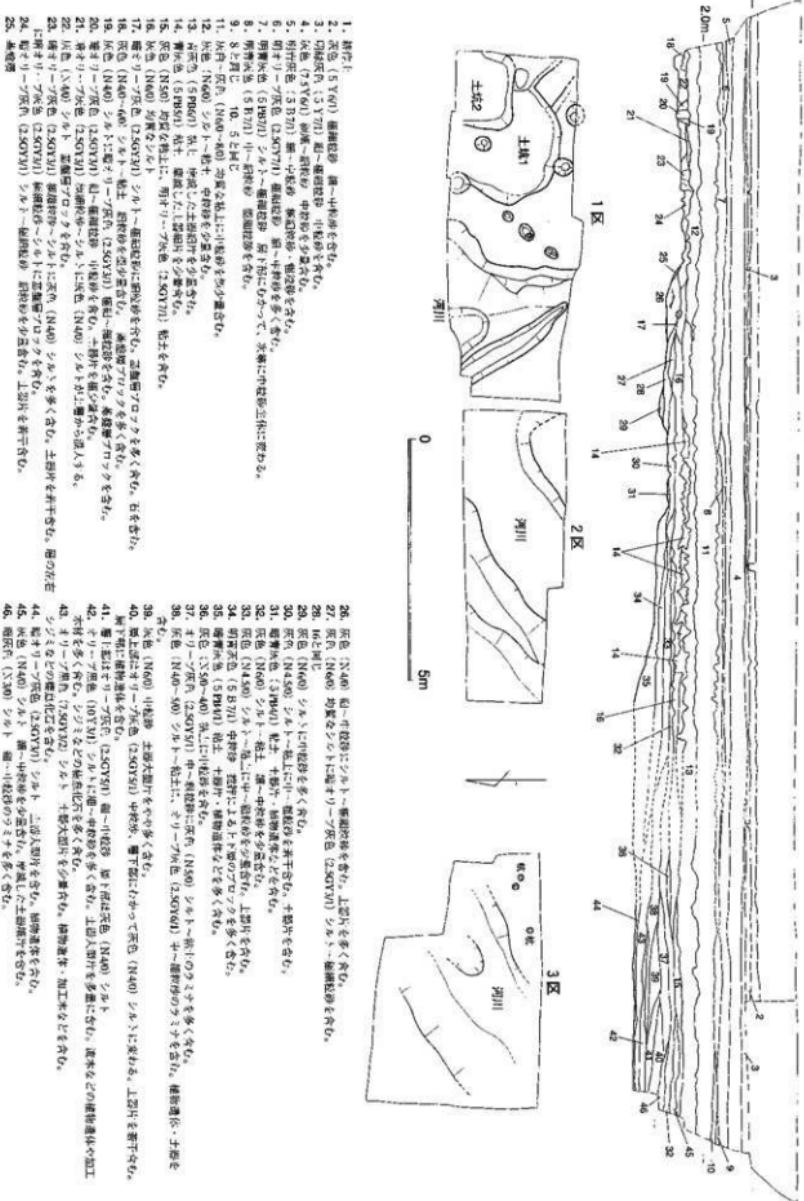
(2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区において、堅穴住居の可能性が考えられる土坑2基と若干の柱穴、そして河川を確認した。以下、各遺構について、述べることにする。

土坑1 調査区東部で検出した平面不整橢円形を呈する落ち込み状の土坑である。検出部分で、南北2.0m、東西2.5mをはかることから、これ以上の規模となる。埋土は2層に大別でき、上層は黒褐色極細粒砂で土器を多く含む。第15図に挙げた遺物をはじめ、多数の遺物が出土したが、その多くは破片であった。基本層序で指摘したとおり、当調査区で包含層としたものは、土坑1の上層部にあたることから、その層厚は約20cm程度をはかることになる。下層は、基盤層ブロックに黒褐色極細粒砂を

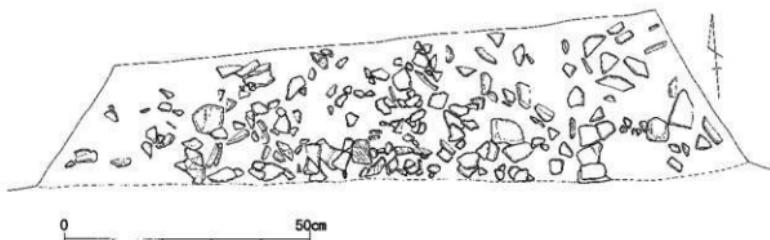


第12図 1区平面図 (1 : 50)



第13図 調査区平面・断面図 (1 : 100)

2. 調査の成果



第14図 土坑1上層遺物出土状況 (1 : 10)

含む。下層は竪穴住居の貼床となる可能性が考えられる。しかし、土坑1外周で壁溝の痕跡は十分確認できず、明確な主柱穴も確認されなかつたことから、その可能性を指摘するだけにとどまる。

土坑1出土遺物 1は広口壺の口縁端部、2は直口壺の一種と考えられるが、あまりみられない器形である。1の口径は、41.6cmに復元され、端部の上下幅は3.0cmをやや越える程度と推定できる。端部側面には、ハケで下地を整えたあと、円形浮文を貼り付け、櫛状工具で1条の沈線を施す。さらに沈線の下に沿って、半截竹管文を加える。内面は、押圧を施すだけにとどまる。なお、このような施文は当地域の在地土器では見られず、また胎土に金雲母が含まれていることから、輸入品と判断する。なお、河川最下層(第44層)から同一個体が出土した。2の口径は、12.0cmに復元できる。残存高は5.4cmである。口縁部は屈曲して、短く外方へ開く。口縁部はナデを、頸部内面はヘラミガキを施すが、外面は風化により不明である。

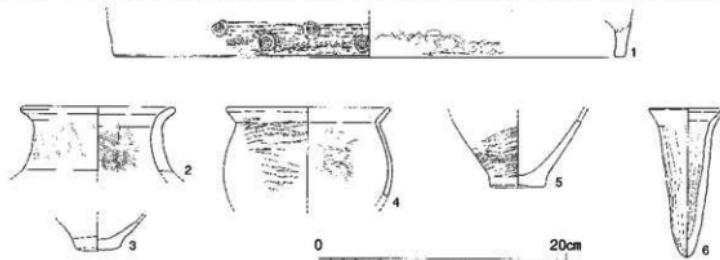
3は、鉢または小型壺の底部である。底部径3.6cm、残存高1.4cmをはかる。内外面ともに風化が著しく、調整は不明である。

4は、やや小型の壺である。口径は13.2cmに復元できる。残存高は7.5cmである。体部と口縁部の境界に、接合痕が残る。口縁部はナデを、体部外面はタタキ、内面はハケを施す。

5は小型鉢か、壺の底部である。底部径4.5cm、残存高5.5cmをはかる。外面はタタキ痕、内面は風化により、調整は不明である。6は鉢の1種と考えられるが、角杯状の器形を呈する。口径6.2cm、器高7.2cmをはかる。口縁部はナデを、体部外面は継方向のナデ、内面は未調整である。同様の器形を呈する遺物は、第18次調査区でも出土している。これらの遺物は、弥生終末期の前半期の所産と考える。

土坑2 土坑1とほぼ同じ特徴を有するが、上層部からは少量の遺物が出土したにとどまる。検出部分で南北1.2m、東西1.6mをはかる。土坑2においても、壁溝などの痕跡は不明瞭であり、竪穴住居の可能性を指摘するだけにとどまる。

柱穴 調査区東部において、若干の柱穴を検出したが、掘立柱建物に復元できるものはなかった。しかし、いずれも柱穴の明確な柱痕を伴うものであり、周辺の調査区の状況からも付近に建物が存在



第15図 土坑1上層出土遺物 (1 : 4)

したことは確実である。

河川 調査区中央以西で検出した旧河川である。当河川は、第19次調査区でその西岸を確認しており、当調査区内を流れることが推定されていた。今回の調査では東岸から河川流路中央付近までの約17m分を確認することができた。調査区および第19次調査区の位置関係から、この河川の幅は約25m、深さは1.3mと推定される。

また、河川中央付近で、直径15~20cm程度の杭が2本ほど打ち込まれた状態で検出された。同じような杭は第19次調査区でも確認されているが、周辺に対応する杭列がないため、積極的に橋脚とは想定できない。ただし、調査区が狭小であるため、その可能性は残しておきたい。

河川埋土上は、第19次調査区と大きく変わるところがなく、上層は灰色粘土あるいは粘性の強いシルト、中層は黒灰色~黒褐色シルト、灰色細~中粒砂およびその交互層からなり、下層は均質な小粒砂、最下層に灰色粘土が堆積する。河川埋土のうち、下層以下は特徴的に大きな変化はみられず、基本的に植物遺体や土器片を多く含む。また、シジミなどの棲息状態にある貝化石が出土することから、これらの埋土は止水に近い環境のもとで堆積したと考えられる。なお、第19次調査区では、ある時期に陸化した可能性を想定しているが、当調査区ではこうした状況が想定できるような土層は、積極的に見出すことはできなかった。

なお、河川からは先に述べたとおり、植物遺体や貝化石とともに大量の土器片が出土している。このうち、上層部のものはほとんど細片に近いもので、実測できるものはなかったが、布留式の可能性が考えられる甌の口縁部などが含まれていた。一方、中層、下層~最下層にかけては多量の土器片が出土したが、完形品になるものは全くなかった。以下、出土した遺物について、各土層毎に述べる。

土層26・33・34・37出土遺物は第16図、**土層35出土遺物**は第18図、**土層38・39出土遺物**は第19・20図に、**土層42~44出土遺物**は第21図に掲載した。

土層26出土遺物 1・2は広口壺の口頭部である。1の口径は、16.5cmに復元できる。残存高は7.6cmである。口縁端部は上方に拡張され、側面を形成する。側面には、工具で刻み日が施されるが、その間隔は不規則である。頭部外側のうち、上半部は板ナデ、下半部は縱方向のハケの後にヘラミガキを施す。内面はヘラミガキを施す。2の口径は、15.6cmに復元できる。残存高は4.2cmをはかる。口縁端部を上下に拡張し、軸2.7cm程度の側面を形成する。側面には焼成工具で、7条の沈線を施す。内面にはヘラミガキが確認できるものの、外側は風化により調整は不明である。石英などを母材とする粗粒砂を多く含む灰白色のきめ細かい粘土を用いている。なお、2は胎土や器形上の特徴から、中国地方（日本海側）からの搬入品の可能性が考えられる。

3は、小型高杯の瓶部である。瓶部径は15.7cmに復元される。残存高は1.1cmである。端部上面に、ヘラ状工具による2条の沈線が施される。

4は、小型の鉢と考えられる。底部径4.8cm、残存高4.6cmをはかる。外側はタタキ、内面は板ナデを施す。

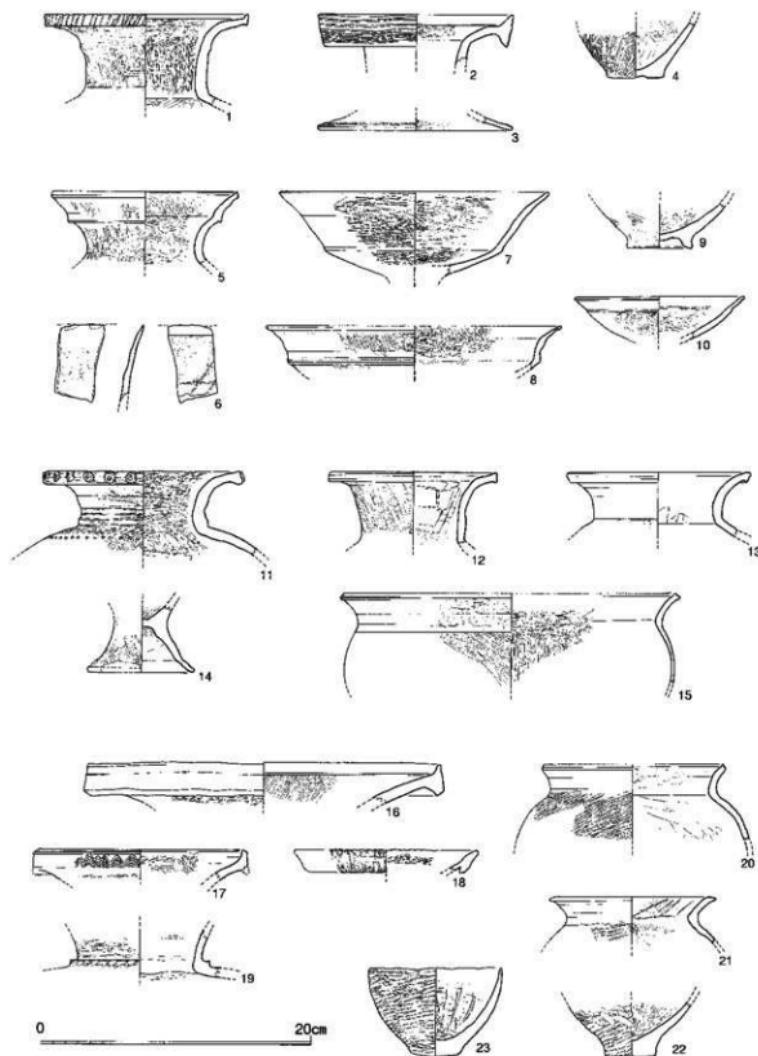
土層33出土遺物 5は二重口縁蓋、6は長頭壺である。5の口径は15.1cmに復元できる。残存高は6.1cmである。内外面ともに、ヘラミガキを施す。6は残存部が少なく、口径は復元できなかった。頭部にヘラ状工具による施文がみられるが、意匠は不明である。

7・8・10は、高杯瓶部である。このうち、10は小型のものになる。7の口径は、21.5cmに復元できる。残存高は7.0cmである。体部は内外面ともにヘラミガキを、見込みには放射状にヘラミガキを施す。8の口径は、24.2cmに復元できる。外側は縱方向のヘラミガキ、内面のうち、口縁部付近は縱方向、下部は横方向のヘラミガキを施す。10の口径は、11.6cmに復元できる。残存高は3.5cmである。口縁部は内外面ともにナデを、体部外側はハケを、内面にはヘラミガキを施す。

9は、脚付の鉢である。脚部は短く、また断面台形状を呈する。脚部径は5.2cmに復元できる。残存高は、3.8cmである。底部内面はヘラミガキを、脚部付近は押圧・ナデを施す。

土層34出土遺物 11~13は、広口壺である。11の口径は、15.4cmに復元される。残存高は10.0cmである。口縁端部側面に、1.5cm前後の間隔で円形浮文を貼付する。頭部下端部には粘土帯を貼り付けよ

2. 調査の成果



第16図 河川第26・33・34・37層出土遺物 (1 : 4)

第26層：1～4 第33層：5～10 第34層：11～15 第37層：16～23

うとしたのか、強いナデで段が作られる。肩部には列点文3条と、半裁竹管文で加飾される。12の口径は13.4cmに復元できる。残存高は6.0cmである。口縁端部はやや肥厚し、その側面はナデにより凹線状にくぼむ。頭部外面は、縱方向のハケの後に粗いナデを施す。頭部内面は、横方向の板ナデを施す。12は、頭部が長いため、長頸壺になる可能性もある。13の口径は、14.7cmに復元できる。残存高は5.4cmである。口縁端部が肥厚し、端部には面が形成される。風化しているため、内外面の調整は不明瞭である。

14の器種は明確にできないが、脚付の鉢になる可能性が考えられる。裾部径8.5cm、残存高5.5cmをはかる。脚部外面は、縱方向のヘラミガキ、内面のうち裾部付近は横ナデを施す。

15の鉢は、口径27.2cm、残存高7.4cmをはかる。口縁部はナデを、体部にはヘラミガキを施す。

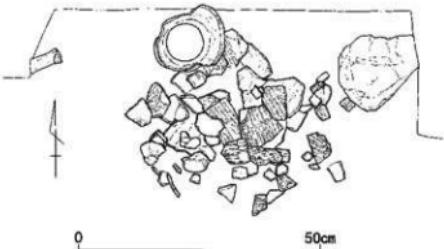
土層37出土遺物 16～19は広口壺であるが、18については搬入品の可能性が高く、壺ではない不可能性もある。16は口径28.6cm、残存高3.3cmをはかる。口縁端部は上下に拡張され、端面を形成するが、加飾されていない。口縁端部はナデ、口縁部から頸部にかけてはヘラミガキが施される。17の口径は、16.3cmに復元できる。口縁端部は上下に拡張され、側面には5条を単位とする櫛状T工具で波状文が加飾される。内面はヘラミガキが施される。18の口径は、14.6cmに復元できる。口縁部は粘土紐を折り込むようにして、側面を形成する。側面には、縱方向の刻み目が加飾されるが、その間隔は不規則である。口縁部内面には、ヘラミガキを施す。18の口縁形状は、在地のものではみられず、胎上も異なることから、搬入品と考えられる。19の頭部径は、10.2cmに復元できる。頭部と体部の境界に粘土帯を貼付し、刻み目を加飾する。頭部外面は、ハケの後に横方向のヘラミガキを施す。

20・21は窓である。20の口径は、14.6cmに復元できる。残存高6.2cmをはかる。口縁部内外面はナデ、体部外面はタタキ、内面は板ナデを施す。21の口径は、13.7cmに復元できる。残存高は4.0cmである。口縁部内面にヘラミガキによる線刻がみられるが、意匠は不明である。体部外面はタタキの後に粗いハケを、内面には横方向のハケを施す。

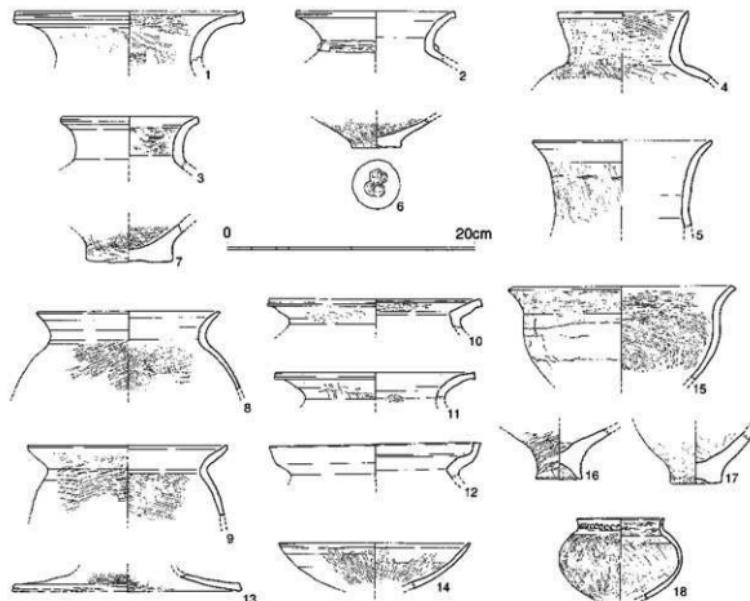
22・23は、小形の鉢である。22は底部径4.0cm、残存高4.5cmをはかる。外面はタタキの後に粗雑なヘラミガキを、内面には放射状にヘラミガキを施す。23は口径10.6cm、器高7.3cmをはかる。体部外面はタタキを、内面は押圧の後に板ナデを施す。

土層35出土遺物 1～3は広口壺・頭部、4は直口壺、5は長頸壺である。6・7は底部であるため詳細は明確ではない。1の口径は、18.6cmに復元できる。端部側面には、ナデにより沈線2条が施される。頸部外面にはハケを施すが、一部にヘラミガキが確認できる。口縁部内面は横方向のヘラミガキ、頭部内面は板ナデを施す。2は口径12.7cm、残存高4.2cmをはかる。頭部下端部に突帯が貼付される。口頭部は、内外面ともにナデを施す。3の口径は、11.0cmに復元できる。口縁端部は拡張されず、丸みを帯びる。口縁部内外面はナデを、頸部外面はナデ、外面はハケを施す。4の口径は、10.5cmに復元できる。残存高は5.9cmである。口縁端部はナデ、頭部はハケ、体部外面はヘラミガキ、内面は板ナデを施す。5の口径は14.4cmに復元できる。残存高は7.3cmである。口縁部は、内外面ともにナデを、頸部外面は縦方向のヘラミガキを施す。内面は風化により、不明である。6は、底部径3.9cm、残存高3.4cmをはかる。底部外面には、工具で押圧痕の凹みを1つほど作る。底部内外面は、ともにヘラミガキを施す。なお、6の胎土には金糸母などを含み、在地のものと異なることから、搬入品と考える。7は底部径6.9cm、残存高3.2cmをはかる。内外面は、ともにヘラミガキを施す。

8～12は、壺である。8の口径は、14.6cmに復元できる。残存高は6.5cmである。口縁部内外面はナ



第17図 河川東岸遺物出土状況 (1 : 10)



第18図 河川第35層出土遺物（1：4）

デを、体部外表面はタタキ、内面は横方向のハケを施す。9の口径は、16.2cmに復元できる。残存高は6.0cmをはかる。口縁部内外面はナデ、体部外表面はタタキ、内面はハケを施す。10の口径は、17.0cmに復元できる。口縁部内面はハケを、外表面はナデを施す。11の口径は、16.1cmに復元できる。残存高は2.3cmである。内外面ともナデを施すが、外周には接合痕が残る。12の口径は、17cm程度に復元できる。受口状口縁を呈し、内外面はともにナデを施す。

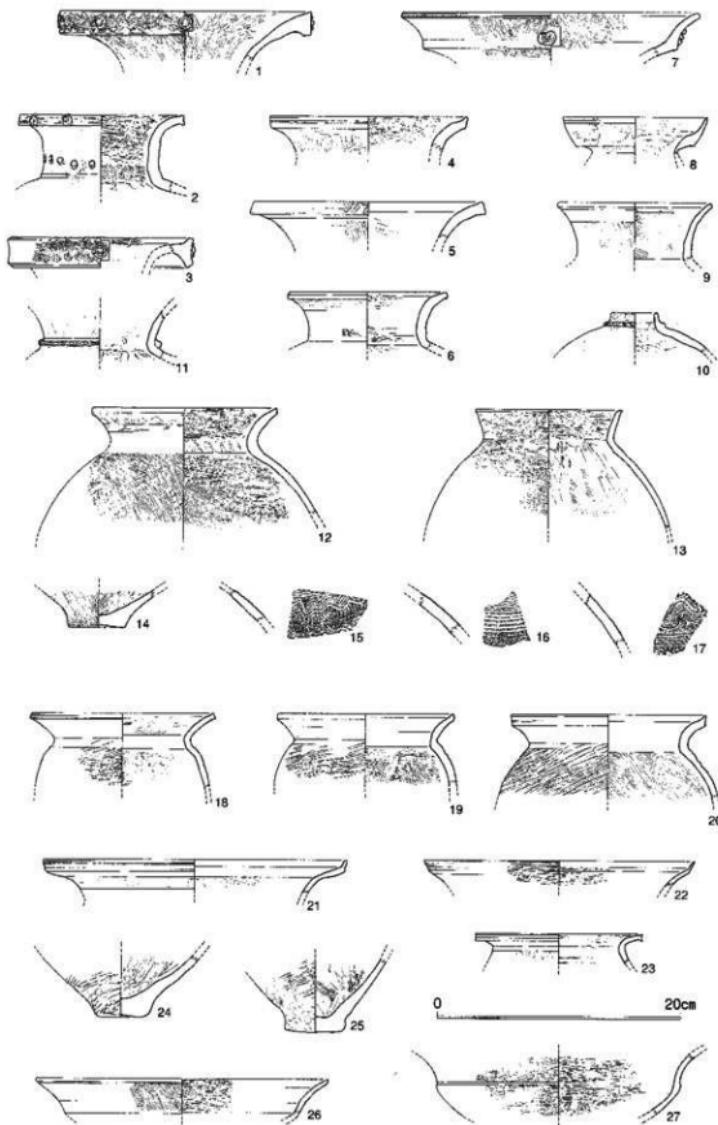
13は高杯断部、14は小形高杯の杯部である。13の据部径は、18.7cmに復元される。残存高は1.4cmである。14の口径は15.5cmに復元できる。残存高は3.8cmである。内外面ともナデの後にヘラミガキを施す。

15～17は鉢である。15の口径は17.6cmに復元できる。残存高は7.7cmである。口縁部外表面と内面上半部はナデ、体部外表面は無調整、内面のうち口縁下部および体部上半部は横方向のヘラミガキ、体部下半部は縦方向のヘラミガキを施す。16・17は鉢である。16の底部径は、3.7cmに復元できる。残存高は4.2cmをはかる。底部外周を拡張し、脚部を形成する。外表面はタタキを施す。それ以外の調整は、風化により不明である。17は小型鉢と考えられるが、器壁が厚く、蓋などの器種になる可能性もある。底面径4.1cm、残存高4.3cmをはかる。外表面は押圧、内面は板ナデを施す。

18は、短頸の小型壺である。口径は7.0cm、残存高は6.7cmをはかる。口縁部外表面に半截竹管文を加飾し、内面にはヘラミガキが施される。体部外表面はヘラミガキ、内面は指ナデを施す。

土層38・39出土遺物 第19図1～6、9は広口壺、7・8は二重口縁壺、10は小型の短頸壺、11は広口壺あるいは直口壺と考えられ、12は広口の短頸壺、13は短頸壺、14は壺底部、15～17は壺体部片である。

1の口径は、20.6cmに復元できる。残存高は4.1cmである。口縁端部を下方に拡張し、側面を形成する。側面には構造的工具で波状文を描き、その上に円形浮文を貼付する。内外面ともに、やや粗雑な



第19図 河川第38・39層出土遺物1 (1:4)

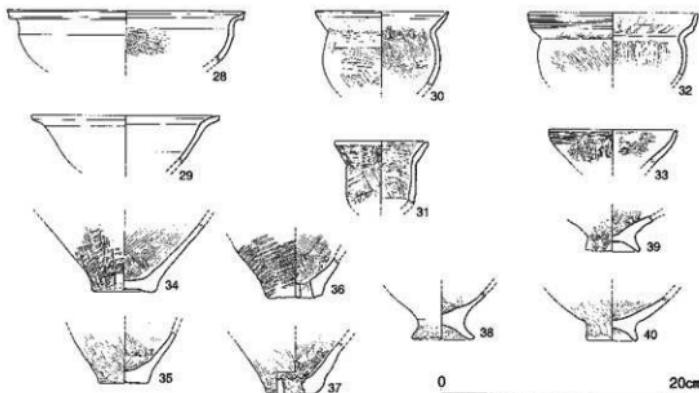
ヘラミガキを施す。2は口径13.4cm、残存高6.3cmをはかる。口縁端部側面には、2条の凹線を施した後に、円形浮文を貼付する。また、頸部に竹管文を加飾する。なお、口縁部から頸部外面はナデ、内面はハケの後に粗雑なヘラミガキを施す。3の口径は、14.7cmに復元できる。口縁部は上下に拡張され、幅2.5cmをはかる。側面に櫛書きで波状文を描き、その上に円形浮文を貼付する。また上面には櫛状工具で刺突文を施す。4の口径は、16.2cmに復元できる。残存高は2.9cmをはかる。口縁端部は、ナデによりやや拡張され、側面に沈線が1条施される。頸部外面はハケの後にナデを、内面はヘラミガキを施す。5の口径は、18.9cmに復元できる。残存高は3.1cmである。口縁端部側面に斜線状の刻み目を加飾する。口縁部内外面はナデ、頸部外面はヘラミガキ、内面はハケを施す。6の口径は、12.9cmに復元できる。残存高は4.7cmである。内外面ともに横ナデを施すが、内面下部にはハケの痕跡が残る。7の口径は、24.4cmに復元できる。残存高は3.6cmである。口縁部内外面に縦方向のヘラミガキを施し、円形浮文を貼付する。8の口径は、11.9cmに復元できる。残存高は、3.1cmである。口縁部は、ハケを施すものの、内面には押圧痕が残る。9は口径12.6cm、残存高4.8cmをはかる。口縁部はナデを、頸部外面には縦方向のハケを、内面には横方向のハケを施す。10の口径は3.8cmに復元できる。残存高は3.3cmである。口縁部と体部の境界に粘土帯を貼付し、それにV字状の刻み目を加飾する。口縁部内外面はナデを、体部外面はヘラミガキ、内面は押圧を施す。11の頸部径は、9.2cmに復元できる。頸部と体部の境界に粘土帯を貼付し、刻み目を加飾する。頸部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケを施す。12は口径15.2cm、残存高10.3cmをはかる。口頭部外面は横ナデ、内面はヘラミガキを施す。体部外面は斜方向のヘラミガキを施すが、一部にタタキおよびハケが残る。内面はハケの後に粗雑なヘラミガキを施す。13の口径は、12.0cmに復元できる。残存高は9.7cmである。口縁部は上方に立ち上がることから、直口の系統と考えられる。口縁部および体部外面にはヘラミガキが、体部内面には横方向のハケの後に縦方向の板ナデが施される。14の底部径4.6cm、残存高2.2cmをはかる。内外面ともにヘラミガキを施す。15は、櫛書きにより直線文・波状文・列点文を加飾する。16・17は、波状文などの櫛書きが加飾されている。この時期のものとしては、珍しいことから掲載した。

18~21・23は、壺である。18の口径は、15.0cmに復元できる。残存高は6.3cmである。口縁端部側面には、ナデにより沈線が施される。体部外面にタタキが、内面にはハケが施される。19の口径は、14.4cmに復元できる。口縁部はナデ、体部外面はタタキ、内面はハケを施す。20の口径は、16.0cmに復元できる。残存高は7.0cmである。受口状の口縁端部を呈する。口縁部は内外面ともにナデを、体部外面にタタキ、内面にはハケを施す。21の口径は、25.0cmに復元できる。残存高は2.8cmをはかる。口縁部内外面はナデを施す。内面下部はハケの可能性がある。23の口径は、13.8cmに復元できる。残存高は2.5cmである。口縁部はナデ、体部外面はハケを施す。

22の器種は明確にできないが、鉢の口縁部となる可能性が少なからず考えられる。口径22.4cmに復元できる。残存高は2.1cmである。口縁部は、やや受口状の形態を呈し、その側面には櫛状工具による4条の沈線が施される。口縁端部内面にはナデを、口縁部下半は、内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。器形や口縁の特徴に類例がなく、搬入品の可能性も残る。24は、鉢底部である。底部径4.5cm、残存高5.2cmをはかる。体部外面はタタキ、内面はヘラミガキを施す。25は、壺の底部または鉢と考えられる。底部径4.6cm、残存高6.0cmをはかる。外面はタタキの後にハケを、内面はハケを施す。

26・27は、高杯杯部である。26の口径は、24.0cmに復元できる。残存高は2.9cmである。外面は縦方向、内面は横方向にヘラミガキを施す。27は、口縁部が残存していないため、口径は不明であるが体部・底部境界付近で、30cm前後に復元できる。杯部内外面に横方向のヘラミガキを、底部付近は縦方向のヘラミガキを施す。

28~40は鉢である。ただし、30は小型壺の可能性もある。28の口径は、19.6cmに復元できる。器高は4.3cmをはかる。外面の調整は風化により不明である。内面は、口縁部にナデ、体部にヘラミガキを施すものの、その境界付近にハケが残る。29の口径は、15.6cmに復元できる。残存高は4.0cmである。内外面ともに風化し、調整は明確ではない。30は口径10.8cm、残存高6.2cmをはかる。口縁部は横ナデ、体部外面は粗雑なヘラミガキ、内面はハケを施す。31の口径は、7.6cmに復元できる。残存高は5.2cm



第20図 河川第38・39層出土遺物2(1:4)

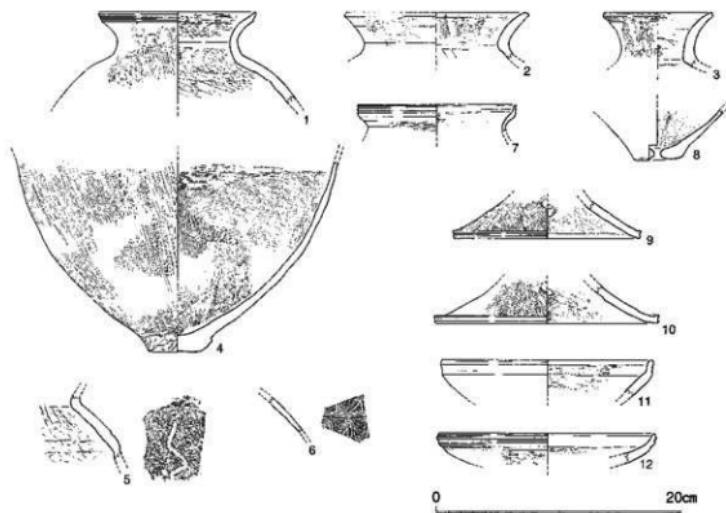
である。口縁部から体部にかけて、内外面ともにハケを施すが、外面上には一部タタキ痕が残る。32は口径13.8cmに復元できる。残存高は5.2cmである。口縁部は受口状であるが、端部を上方に大きく拡張している。口縁部側面には、ナデによる凹線が施されている。口縁部内面は板状工具で縦方向にななめ上昇、体部内外面にはヘラミガキを施す。33の口径は、10.4cmに復元できる。残存高は2.9cmである。口縁部外面には、ナデによる凹線4条を施す。内外面ともにヘラミガキを施す。34は底部径5.2cm、残存高5.8cmをはかる。体部外面はタタキを施す。また、縦方向の線条痕が数条単位で刻まれている。35は底部径4.0cm、残存高4.3cmをはかる。外面はヘラミガキ、内面にはハケを施す。36は底部径4.6cm、残存高5.6cmをはかる。底部に穿孔される。体部外面はタタキ痕が、内面にはハケが施される。37は底部径3.5cm、残存高4.5cmをはかる。底部には、直径1.5cm程度の穿孔がある。外面は風化により明確ではないものの板ナデが、内面にはハケが施される。38は底部径5.2cm、残存高4.0cmをはかる。脚部内外面は押圧を、底部内面には板ナデを施す。39は底部径4.3cm、残存高3.0cmをはかる。底部外周を押圧により拡張し、脚部を形成する。外面は粗雑なナデ、底部内面はハケを施す。40の脚部径は、4.0cmに復元できる。残存高は3.7cmである。脚部は、底部外周を押圧により拡張して形成する。杯部内外面は、ともにヘラミガキを施す。

土層42~44出土遺物 1・3は広口壺、2は壺の口縁部となる可能性があるものの、器種は特定にくい。1は壺体部下半部である。5・6は壺体部片である。1の口径は、12.6cmに復元できる。残存高は7.6cmである。口縁端部は上方にやや拡張され、側面にはナデにより2条の凹線が施される。外面は、頸部から体部にかけてヘラミガキを施し、口縁部内面はヘラミガキ、頸部はハケ、体部は押圧および板ナデを施す。2の口径は、14.6cmに復元できる。残存高は3.9cmである。内外面ともにナデを施すが、内面にはハケの痕跡が残る。3の口径は8.8cmに復元できる。残存高は4.3cmである。口縁端部にはナデによる沈線が1条施される。外面はヘラミガキ、内面はナデおよびハケを施す。4は底部径4.0cm、残存高15.6cmをはかる。体部外面はタタキの後にヘラミガキを、内面はハケを施す。5の外面に意匠不明の線刻が施されている。6には、波状文・直線文が交互に加飾されている。

7の壺は、口径12.8cmに復元できる。口縁端部は上方につまみ上げられるように拡張され、受口状を呈する。体部内外面ともにハケを施す。

8の鉢は底部径4.2cm、残存高4.3cmをはかる。底部中央付近に穿孔がある。外面は風化により不明、内面にはハケを施す。

9・10は高杯裾部、11は高杯杯部と考えるが、鉢の可能性も残る。12は高杯杯部である。9の裾部



第21図 河川第42~44層出土遺物 (1:4)

径は15.2cmに復元できる。残存高は3.1cmである。10の裾部径は18.2cmに復元できる。残存高は3.2cmである。ともに外面はヘラミガキ、内面はハケを施す。11の口径は17.1cmに復元できる。残存高は3.0cmである。口縁部付近はナデ、内面はヘラミガキを施す。体部外面は風化しており、調整は不明である。12の口径は17.6cmに復元できる。残存高は2.5cmである。口縁部外面に2条の凹線を施す。体部以下は、内外面ともにヘラミガキを施す。

以上の遺物をみると、遺物は弥生時代終末期のものを中心とするが、第16図7（第33層出土）や第19図23（第38・39層出土）のように、古墳時代前期に下る遺物もある。河川から出土した遺物は、集落からの廃棄によることが考えられる。一方、東岸の集落（第10次・第18次調査区）については、これまで古墳時代初頭に南方の微高地に移動する可能性を考えていた。しかし、河川出土遺物により、東岸の集落は古墳時代前期にかけて継続していることが明らかになったことから、移動の時期については修正する余地が生じる。将来、第10・18次調査区の遺物が整理されたならば、河川と集落の時期軸は検証されるであろう。

なお、遺物の中には、第15図1（土坑1・第44層）、第16図2（河川第26層）・同18（河川第37層）、第19・20図3・22・32（河川38・39層）のように、搬入品あるいはその可能性が考えられるものがある。搬入品は、周辺の調査区でも出土しており、東岸域に展開した集落の性格を反映したと言える。

ところで、旧河川は当調査区の北東方向から流下し、調査区付近で、南西方向から南方向へ方向を変える。また、第3次調査でも、旧河川が確認されていることから、何時期かの流路変更是あるものの、著しく変更することはなかったと考えられる。一方、河川は幅25mと、ある程度の規模を有しているが、周辺における同規模の河川は、当遺跡東方を南北に貫流する天竺川以外に見あたらない。「文治五年田畠取帳」で天竺川の流路を復元すると、南六条一里一坪から十坪まで南西方向に流下し、十坪で南に向きを変えることがわかる。天竺川の流下方向を十坪の地点からそのまま延長すると、当調査区で検出した河川にはほつながる。このような天竺川の規模および流路方向の変遷をみると、今回検出した旧河川が弥生時代終末期前後の天竺川旧河道になる可能性が考えられる。

3.まとめ

以上、今回の調査では、堅穴住居の可能性が考えられる土坑や若干の柱穴、そして天竺川旧河道の可能性が考えられる河川を検出した。調査面積が限定されているため、各造構の全体像は明確にできなかったが、河川東岸域の集落、そして河川そのものを考える上で、大きな成果となった。ここでは、既往の調査成果をふまえつつ、周辺の遺跡との関係などから、旧天竺川の両岸に展開した弥生終末期集落の性格について検討する。

天竺川旧河道の周辺 先に述べたとおり、弥生終末期における天竺川旧河道は千里丘陵に水源を發し、丘陵裾野から南西方向に流れ、穂積遺跡の集落内をとおって南方へ至る。その南方には、現穂積村囲い堤・野出～島田の堤に挟まれた「鯉ヶ淵」と呼ばれる遊水池があった。

「鯉ヶ淵」の東端は野田、西端は島田、上津島付近であり、東西に長いことがその特徴と言える。また、「鯉ヶ淵」の東方で神崎川は南に屈曲する。「鯉ヶ淵」の南北幅は、現神崎川の川幅と大きく変わらない。一方、西端とする島田から西方については明確ではないが、猪名川が流れており、この付近で合流したと考えても不思議ではない。さらに、「鯉ヶ淵」北方における確認調査では、河道あるいは沼沢などにみる特徴的な堆積が確認され、「鯉ヶ淵」の起源となる大規模な河川あるいは沼沢の存在が想定されている。これらの状況をあわせて考えると、安威川旧河道の可能性は十分考えられる。また、こうした平野部の中央付近に、不自然なほど大規模な遊水池が存在する要因を他に説明できない。

豊中南部の遺跡 ついで豊中南部における、この時期の集落をみると猪名川下流域と天竺川水系に集中する傾向がみられる。具体的に猪名川下流域では、利倉北遺跡、利倉南遺跡、上津島川床遺跡、上津島遺跡、上津島南遺跡、島田遺跡、庄内遺跡が挙げられる。また、天竺川水系をみると、服部遺跡、小曾根遺跡、豊島北遺跡が展開している。これらの集落遺跡の消長をみると、その多くは、弥生終末期にはじまるものであり、集落の出現が弥生前期に遡り、その後継続する遺跡は小曾根遺跡以外にない。穂積遺跡においても弥生前期の遺物が第14・15次調査区で出土していることから、弥生前期集落の存在は否定できないものの、未だ中期の遺物は確認されていない。また、中期から後期にかけての集落遺跡も小曾根遺跡以外なく、猪名川下流域において、終末期集落の形成母胎となるような遺跡は未だ確認されていない。この現象は、豊中南部の平野が陸化する過程に連動したものと理解されるものであるが、終末期における一斉的な集落の出現には、もう少し別の要因も検討する必要がある。

ところで、先に示した猪名川下流域の集落遺跡について、その特徴をみると、集落が出現したあとには平安時代後期まで継続的に発展し、断絶期がない。特に、上津島遺跡・上津島南遺跡・島田遺跡（以後、三遺跡の総称として、上津島遺跡群と呼ぶ。）については、島田遺跡第6次調査において7世紀の倉庫が検出されるなど、古墳時代になると急激に発展する。そして、倉庫や宮衙風配置を呈する建物群（上津島南遺跡第1次調査）からも港湾集落としての性格が造形的にも明確になっていく。

穂積遺跡の性格 この問題については、第22次調査の報告においても検討したところである。そのときは、第18次調査区で出土した逆鉢式銅鏡未製品や、第22次調査区で出土した鉢ズレした銅鏡、あるいは第27次調査区のフイゴ羽口片から、当集落東部（旧天竺川東岸）が銅鏡生産にかかる集落であることを指摘した。一方、今回の調査でも述べたとおり、遺物には他地域からの搬入品あるいはその可能性があるものが散見する。公表されている資料としては、当調査区で出土した岡山方面の壺口縁部などや、第27次調査区で出土した青木式の器台または壺と考えられる口縁部が挙げられる。このほかの調査区でも、精査すれば搬入品が多數含まれている可能性は非常に高い。その一方で、服部遺跡第1次調査で岡山県からの搬入品が出土しているように、搬入品が出土することは特に穂積遺跡に限定されるものではない。ただし、その出土量の多少には若干の差があることが予見でき、また水差し状の異形土器が存在する点で異なる。猪名川下流域の集落との相違については、遺物が十分に整理されていないため、比較できない。しかし、利倉南遺跡のように日本海側の遺物が出土しており、搬入

品の出土量は穗積遺跡と大きく変わらない可能性が考えられる。

以上のように、穗積遺跡の状況をみると、銅鐵生産を行う集落であること、また搬入品の存在から、水系を越えた地域間の交流あるいは交易活動と密に関連する可能性が考えられる。では、このような集落が、なぜ弥生終末期に出現し、展開したのであろうか。

地域間交易の展開と豊中南部 先に指摘したとおり、豊中南部の集落は弥生終末期に成立するものが多く、その立地は概ね猪名川下流域と天竺川水系に集中する。また、この時期に出現する集落のうち、特に「鯉ヶ淵」・猪名川合流部付近に展開する上津島遺跡群は、その後港湾集落としての性格を明確にする。このことは、旧安威川・猪名川合流部が、この時期から交易あるいは交流の場になつたことを示すものであり、搬入品の存在はその傍証となり得るものと言えよう。そして、猪名川下流域における集落の成立のもう一つの要因が、平野の陸化に求められることを念頭におくと、これらの遺跡が立地する安威川・猪名川合流点とその河口との距離は、それほど長くなかったと考えられる。すなわち、合流点に展開する諸遺跡は、そのまま大阪湾岸を中心とする海上交通にも関わる集落であったとも見なし得る。豊中南部の集落遺跡において、岡山方面からの搬入品が出土することや、一部に徳島方面と指摘される土器が出土している（穗積遺跡第18次調査）ことは、上津島遺跡群を介した海上交易または交流の存在を示唆する。

それでは、こうした猪名川下流域の諸集落の動向と、穗積遺跡はどのように関連するのだろうか。先に示したように、穗積遺跡の弥生終末期集落は旧天竺川の両岸に展開する。それは言うまでもなく河川と密に関連する集落構造であり、河川の存在を前提に集落が展開したことを示すものと言える。先に述べたように、旧天竺川は旧安威川である「鯉ヶ淵」へ流れ込む可能性が高く、その下流には先の上津島遺跡群など、猪名川下流域の集落が展開している。つまり、穗積遺跡は旧天竺川という小河川を介して、猪名川下流域の集落と密接な関連を持つことができる集落であったと言える。

その穗積遺跡において、銅鐵が生産されたことは、単に銅鐵の需要に即した生産に要因を求めるだけではなく、海上・河川交通上に展開した人の交流と物資の交易活動とあいまって成立したと考えるべきであろう。弥生撿点集落の解体後、独占されていた铸造技術も拡散したのではなかろうか。そうした技術所有者が、素材と製品の運搬が保証された新たな交流・交易活動の場に集住はじめたとしても不思議ではあるまい。猪名川下流域にそうした環境が用意された時、穗積遺跡において銅鐵生産を生業の一つとする弥生終末期集落が成立するとすれば、大阪湾岸を中心とする海上交通と交流・交易にかかる歴史的な画期も見いだせるものと言えよう。

以上、当調査区における出土遺物の成果をもとに、過去の調査事例を加えて、穗積遺跡における弥生終末期集落の成立の意義について検討した。こうした検討が可能となったのも、これまで各地で行われた発掘調査による資料の蓄積によるものである。それぞれの調査において蓄積される資料の多くは、確かに断片的なものかもしれない。しかし、それら断片的な資料に対して総括的な検討を行うことで、それぞれの資料は活用され、そして日本史的次元での成果を生み出す基盤となり得るものと確信する。

ゆえに、今後も周辺における建築・開発時において、遺跡の特性を念頭において慎重な対応を期す必要があることを付言したい。

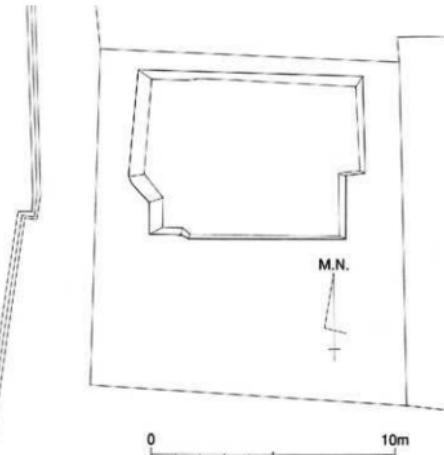
第V章 穂積遺跡第34次調査

1. 調査の経緯

当該調査地は、豊中市服部西町2丁目837の一部に所在する。平成17年4月27日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて、平成17年5月12日に確認調査を行ったところ、地表下約83cmで弥生土器・土師器片を含む遺物包含層を、地表下88cmで遺構面をそれぞれ検出した。

申請地では個人住宅の建設が予定されていたが、それに伴う地盤改良深度が遺構の破壊を免れない程度にまで及ぶことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。

本調査は平成17年6月6日から平成17年6月30日にかけて実施し、調査面積は建築対象面積である55.4m²であった。なお今回は、廃土置き場のスペースの都合上、場内反転による調査を実施している。

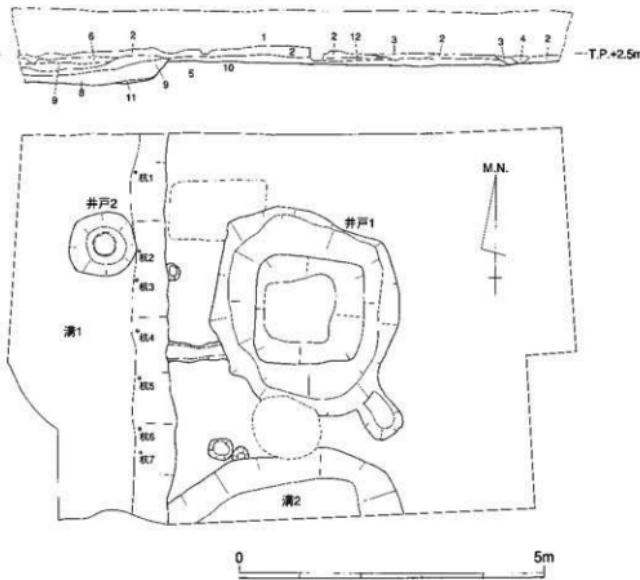


第22図 調査範囲図（1：200）



第23図 調査地位置図（1：5000）

2. 調査の成果



1. 現代の盛土。基本層第1層。
2. オリーブ黒色(10Y3/1)中粒砂～粗粒砂。凹凸作上。基本層第2層。
3. オリーブ黒色(5YR3/1)粗粒砂。2層上の軟泥土。
4. オリーブ黒色(5YR3/2)粗粒砂。2層上の軟泥土。
5. 淡色粗粒砂(7.5YR4/1)。同色のシルトブロック(直徑~2cm)を若干含む。弥生土器、土師器、瓦片片を少量含む。基本層第3層。
6. オリーブ黒色(7.5YR4/1)粗粒砂。同色のシルトブロック(直徑~4cm)を含む。
7. オリーブ黒色(7.5YR3/1)粗粒砂。同色のシルトブロック(直徑~5cm)を多く含む。
8. 暗オリーブ灰(2.5Y3/1)中粒砂～粗粒砂。灰色(5Y4/1)シルトブロック(直徑~2cm)を若干含む。
9. オリーブ黒色(10YR7/1)中粒砂～粗粒砂。灰色(5Y4/1)シルトブロック(直徑~1cm)を若干含む。
10. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂。土師器、弥生土器片が混入混入。今回の最終遺構検出面。基本層第4層。油水が苦しい。
11. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂～中粒砂。
12. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂～粗粒砂。同色のシルトブロック(直徑~1cm)を若干含む。

第24図 調査区平面・断面図 (1 : 80)

2. 調査の成果

(1) 基本層序

今回の調査地における基本層序は概ね4層からなる。第1層は現代の盛土である。第2層（オリーブ黒色中粒砂～粗粒砂）は同色のシルトブロックを若干包含し、近代以降の瓦片・陶磁器片が多数含まれる。近代以降の耕作土であろう。第3層（オリーブ黒色粗粒砂）は同色のシルトブロックを多数包含し、やや粘性を帯びる。弥生土器、土師器、瓦片片などの遺物包含層である。第4層（オリーブ黒色粗粒砂～中粒砂）は、今回の調査における最終遺構検出面である。非常にしまりの弱い砂質土であり、湧水も激しい。層中には少量ではあるが直徑1cm程度のシルトブロック、ならびに植物遺体が含まれる。また少數ながら弥生土器、土師器碎片など弥生時代～古代までの遺物が万遍なく混ざっていることから、第4層は奈良時代～平安時代頃に、洪水等自然の営力によって一気に形成された可能性が考えられる。

次節以降では、第4層上面において検出した遺構・遺物についてその概要を述べていく。

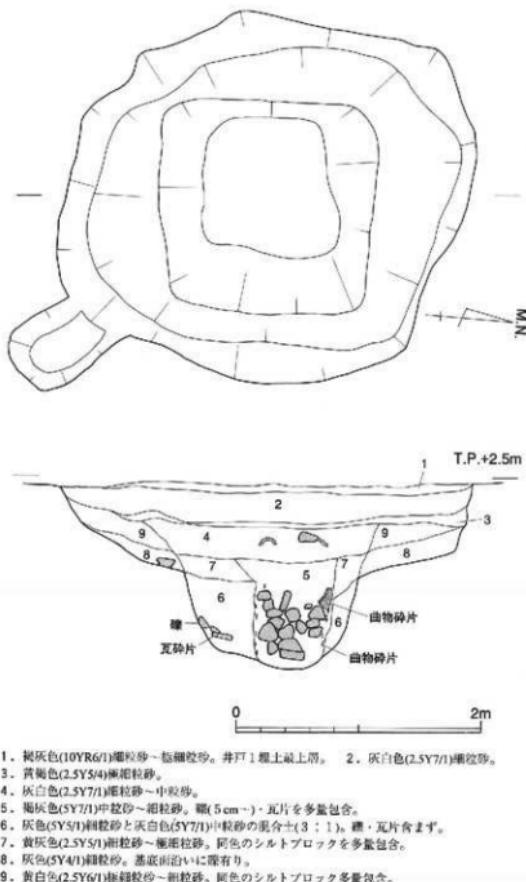
(2) 検出した遺構

井戸1 調査区のほぼ中央で検出した素掘りの井戸である。一辺3.0~3.5m程度の隅丸方形の平面形を呈する。深度は約1.6mをはかり、途中に段を有する。井戸1南東部の造り出し部は幅および深度ともに0.5m程度をはかるものであり、井戸掘削時の足場であった可能性も否定できない。井戸1検出面からおよそ0.9mのところで、井筒用に掘えたとみられる曲物の一部を確認した。残存状況が非常に悪く正確な規模は不明であったが、埋土の観察から直徑約0.7m、高さ0.9m以上の井筒であったことが推定可能である。

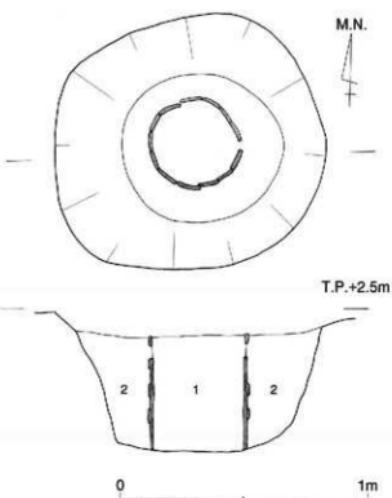
埋土は掘り方埋土と井筒埋土に大別され、いずれも基盤層ブロックを多く含む。井筒直上付近では、直徑約1m、厚さ0.5m程度の範囲で拳大の礫の集積が、井筒を覆ったような状態で確認された。こうした礫の集積は井筒の範囲にはば限定されている。以上の所見から井戸の埋め戻しでは、一旦井筒を埋めた段階で礫を集中的に投棄し、その後掘り方全体を埋め戻すといった過程が考えられる。なお、これらの礫の一部には被熱の痕跡とともに煤の付着がみとめられた。

遺物は井筒内を中心に遺物収納箱にして4箱分出土しているが、大半は平瓦片であり、上下層から万遍なく出土している。なかには煤が付着したものもみられる。瓦片は多数出土しているにもかかわらず、瓦当部分は一切出土していない。その他に瓦質の羽釜、陶器片なども若干出土している。なお、弥生土器、古墳~奈良時代頃の須恵器・土師器片なども少量みられたが、いずれも混入であろう。井戸1は、平瓦や瓦質羽釜片の特徴などから16世紀以降の埋没が考えられる。

井戸2 滝1の基底面で検出した素掘りの井戸である。検出幅約1m、深度0.5m程



第25図 井戸1平面・断面図（1:40）



第26図 井戸2平面・断面図 (1:20)

を有し、ほぼ平坦な基底面を形成する。調査区内での基底面はほぼ標高2m前後で一定であったため、溝1の流路の方向は不明である。

埋土は上下2層に大別され、上層は(オリーブ黒色)シルトに種々のシルトブロック土を含んだ粘性の強い埋土である。一方、下層は(オリーブ黒色)極細粒砂(～細粒砂)にシルトブロックをわずかに含むものであり、第5層(溝1検出面)と類似した。溝1東肩下端ライン沿いでは0.5～1m程度の間隔で木杭(杭1～7)の痕跡がみとめられた。これらの木杭はいずれも溝の基底面付近のみでの残存であったため、これら木杭本来の形態およびその機能については不明である。ただし、今回溝1がしまりの弱い砂質土壤に掘削されていることを考慮すると、溝肩部の崩落を防ぐための護岸施設に伴う木杭であった可能性も考えられる。

出土遺物は埋土上下層から出土しているが、いずれも少量かつ碎片のため固形化し得ることができなかった。埋土上層では、弥生土器、須恵器、土師器、陶器碎片など弥生時代～中世にかけての遺物とともに、近世以降の所産である陶磁器片や近世瓦片も含まれる。一方埋土下層では、碎片ではあるが土師器、瓦質土器など、概ね中世後期段階の遺物が目立つ。

以上の所見から、溝1は溝2を破壊して掘削されていること、ならびに埋土下層出土遺物の特徴から少なくとも15世紀以降の掘削時期が推察され、当初屋敷内の区画溝などとして機能していたものが、その後機能停止とともに徐々に溝肩部の崩落とともに自然埋没が進み、近世以降になって一気に埋め戻されたものであろう。

溝2 調査区南端部において検出した東西方向に走る溝である。ただし西側は溝1によって消滅しており、東側も南側へ屈曲する可能性も否定できないなど、その形態については不明点が多い。

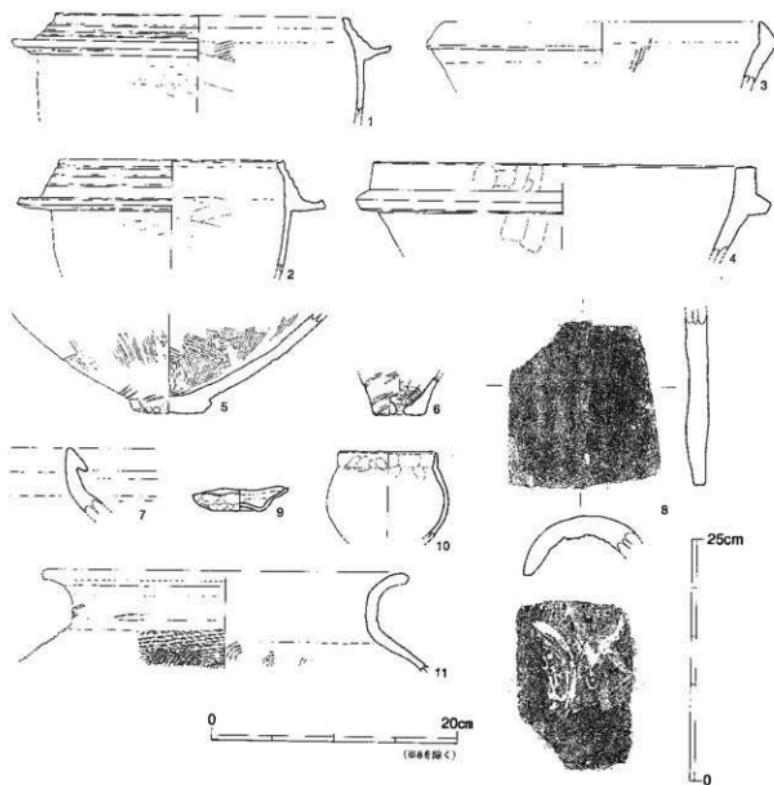
埋土は上下2層に分かれ、いずれもオリーブ黒色細粒砂～中粒砂を基調としたものであるが、上層

度と、すでに溝1掘削の際に大きく削平を受けており、基底面付近のみの残存状態であった。基底面付近では幅7～9cm、長さ33～36cm、厚さ0.7～1cmの長方形の板13枚を樹皮状の縫で少なくとも4段環状に巻き付けて組まれた井筒が据えてあり、その井筒の直径は約0.6mをかる。これらの板はほぼ同一の規格かつ端部も同一の調整痕がみとめられるなど、もともとは何らかの製材であったものが転用されている可能性が考えられる。

埋土の特徴は掘り方、井筒内ともに大差はなくオリーブ黒色粗粒砂(～中粒砂)の単一層で構成され、層中には基盤層ブロックが若干含まれる。

出土遺物には少数ながら瓦片、弥生土器、土師器などがみられたがいずれも碎片であり、かつ後二者は混入の可能性が高いため詳細な掘削時期は不明である。ただし、溝1との新旧関係から推定するならば、井戸2は少なくとも15～16世紀以前の掘削および利用が考えられる。

溝1 調査区西部で検出した南北方向に走る溝である。検出幅は2.5m以上であり、深度は約0.4m、幅1.9m以上の規模



第27図 出土遺物（その1）

は若干同色のシルトブロックの混入度合いが高くしまりが強い。下層は自然堆積による堆積が推定される。遺物は主に下層から出土しており、主な遺物として平瓦片、瓦質羽釜片、土師器小皿、須恵器片などが挙げられる。下層出土の土師器小皿（第27図9）はいわゆる「へそ皿」と呼ばれるものであり、これら遺物の特徴から、溝2が14世紀後半～15世紀代にかけて埋没したことが考えられる。

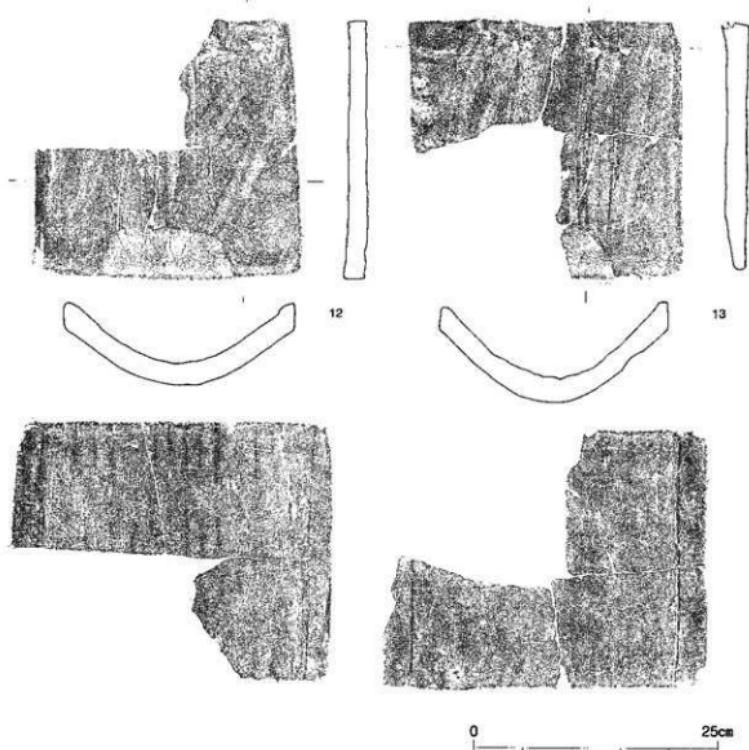
（3）出土遺物

今回の調査では遺物収納箱にして6箱分の遺物が出土しているが、以下では特に出土量が豊富であった井戸1出土遺物を中心として、図化し得たものを取り上げる（第27図～第28図）。

1、3～8、12、13は井戸1出土遺物である。ここで出土遺物について、便宜的に井筒検出面（第25図6層と7層の層理面）を境にして上下層に区分すると、1、5～7、12は堆土上層出土、3、4、8、13は埋土下層出土であり、このうち8、13は非筒（曲物）内出土という内訳である。

井戸1上層出土遺物 1は瓦質羽釜の口縁部～鋸部分であり、やや内傾する口縁部の復元直徑は

2. 調査の成果



第28図 出土遺物（その2）

23.6cmをはかる。鍔より上位は横ナデ、下位は横方向のケズリによる調整である。いわゆる「和泉型」と呼ばれる型式に相当しようか。5・6はそれぞれ弥生時代後期頃の壺形土器・壺形土器底部片であり、残存高はそれぞれ8.2cm、3.0cmをはかる。ともにいわゆる凸レンズ状の底部を形成しており、5の内外面にはそれぞれハケ調整、タタキの後に縦方向のヘラミガキがなされ、6の内外面には右上がりのタタキがみとめられる。なお6の底部中央には直径1cm程度の焼成前穿孔が施される。7は胸器大甕の口縁部であろう。碎片ゆえに直徑の復元には至っていない。口縁端部は下方に延びる形態を呈する。

井戸1下層出土遺物 3の陶器擂鉢片は口縁部の形態からすると丹波焼であろうか。4は滑石製の鍋であろう。復元口縁部直徑27cm、残存高7.0cmをはかる。口縁部直下には削り出しによる断面台形の鍔がめぐる。外面では鍔以下に煤が付着している。12～13世紀頃の所産と考えられる（中世土器研究会編 1995）。

8は丸瓦、12・13は半瓦である。8・12は曲物内、13は井筒を覆った集積内からの出土である。8の凹面には細かい布目の圧痕とループ状の吊り紐痕がみとめられる。12・13いずれも凸面はナデによ

る調整である。凹面もナデ調整が施される。なお、狹端部には削り込みがみとめられる。なお12・13にはともに煤がみとめられるが、その状態からみて破片になった後の付着とみられる。これらの瓦は13世紀以降の特徴を有するものとみられる。

溝2出土遺物 2は瓦質羽笠の口縁部片であり、復元直径は18.2cmをはかる。形態的には1とほぼ同様の特徴を有する。9の土師器小皿はあげ底状を呈するいわゆる「へそ皿」と呼ばれるものである。口縁部直径は7.5~7.8cm、器高は1.4~1.7cmをはかり、内外面いずれも淡黄色(2.5Y 8/3)を呈する。15世紀代の所産とみられる(中世土器研究会編 1995)。

その他の遺物 10・11は最終遺構面出土の遺物である。10は土師器小形丸底碗である。短く直立する口縁部の直径ならびに残存高は7cm程度をはかる。内外面は指オサエの後に粗いナデが施されているため、凹凸が顕著である。11は復元口縁部直径29.0cmをはかる須恵器大甌の口縁部~肩部である。口縁部の形態は、先端が欠損しているために不明である。頸部から肩部にかけて粗い平行タタキを施すものである。

これらの出土遺物からは、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代~平安時代・中世・近世と幅広い時期にわたっており、弥生時代後期以降付近に当該時期の何らかの遺構が所在した可能性が考えられる。しかしながら、今回の主要な遺構の年代は中世後期以降(15~16世紀以降)と考えられよう。

3.まとめ

今回の調査では主に中世後期段階の遺構を検出した。なかでも溝1は、その規模・掘削深度からみて屋敷地の区画溝、あるいは稲積遺跡第12次調査検出の溝2(検出幅5.2m以上、深さ1.2m※溝2は北條1991・宇野2005を参考)と同様、付近一帯の基幹水路としての役割を担った可能性が考えられる。しかしながら出土遺物に恵まれず、溝の詳細な掘削~埋没時期は明らかにし得なかった点は今後の課題として残っている。

当該調査地はかつての稲積村の一角に相当する。近世の稲積村では、「囲い堤」を築いたことが知られており、稲積遺跡第21次調査で検出された先述の「囲い堤」を推定させる堤状遺構は、断片的な資料ではあるが少なくとも室町以降の築造であったことが確認されている(清水 1998)。ここで今回検出された溝1について、「囲い堤」の帰属時期と大局的に対比すると、ちょうど稲積村「囲い堤」の築造~成立段階頃に該当してこよう。仮に溝1が「囲い堤」成立以降の所産とするならば、「囲い堤」内における区画溝、水路の一例としての把握も可能であるが、いずれにせよ溝1は近世稲積村が成立していく過程のなかで、その規模からしても重要な役割を担っていたことは言うまでもない。

出土遺物については井戸1が興味深い。主に瓦と礫によって占められていたが、多数の瓦が出土したにもかかわらず完形品はなくかつ瓦当部分が一切出土していないことは、これらの瓦片が実際に屋根に葺かれていたのか疑問である。これらの瓦は、大量の礫とともに出土していることを勘案すると、井戸1に投棄される直前段階には屋根に整然と葺かれていたものではなく、板葺きなどの屋根を補強するためのいわばおもりとして使用されていたことが考えられないだろうか。さらにそれらの一部に煤がみとめられることは、かつて火災に遭った建物で使用されていた可能性を示唆するものではないだろうか。

今回の調査を通して浮き彫りになった溝1の掘削年代をはじめとするいくつかの課題は、今後周辺の調査成果あるいは同様の遺構の検出事例の蓄積を通してその責を果たしていきたい。

【参考文献】

- 清水筋 1998 「稲積遺跡第21次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要(平成9年度)』
- 豊中市教育委員会
- 北條ゆうこ 1992 「豊中稲積遺跡における中・近世土器」『究底』 埋蔵文化財研究会
- 宇野隆大 2005 「第2節 遺跡の説明 第6章 錄合・室町時代 稲積遺跡」『新修豊中市史 考古』

3. まとめ

豊中市史編さん委員会

清水篠 1996 「地盤調査第16次調査」『豊中市埋蔵文化財年報4』 豊中市教育委員会
中世土器研究会編 1995 「概観 中世の土器・陶磁器」 真陽社

第VI章 曾根遺跡第10次調査

1. 調査の経緯

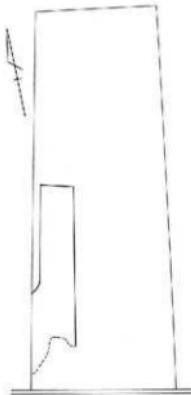
当調査区は曾根西町3丁目21-9・10の各一部に所在する。個人住宅新築に伴い、平成17年（2005年）6月17日に埋蔵文化財発掘の届け出が提出されたことをうけて、確認調査を行った。その結果、地表下0.4～0.5mのところに柱穴などの遺構が検出された。

敷地は現況で前面道路から約1mほど高く、通路部分については前面道路との高低差をなくすために切り土を要することから、同部分における遺構面の損壊は避けられなくなってしまった。このため、通路部分のうち切り土を要する範囲について、7月4日～7月15日にかけて発掘調査を行った。

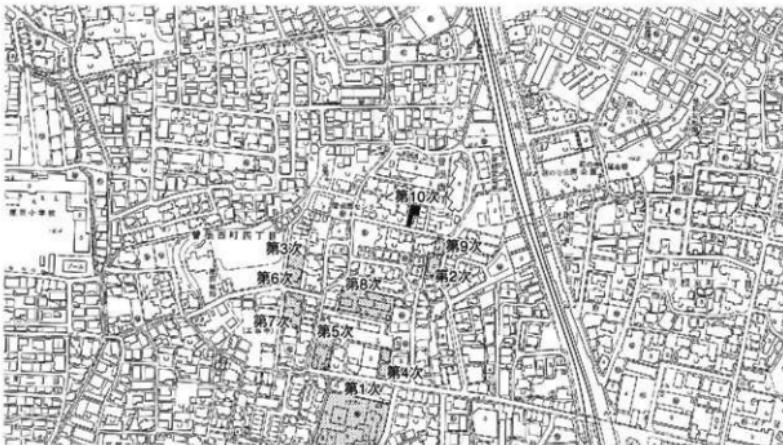
2. 調査の成果

（1）基本層序

調査区では、敷地地表下0.4～0.5m（現道路面から+0.6m）のところで段丘堆積層を確認した。また、段丘堆積層の直上には厚さ15cm程度の耕作土と床土が堆積するものの、既存の住宅基礎の掘削などもあって、その残存状況は良くなかった。また、包含層なども過去の耕地開発による削平を受けたためか、残存していなかった。よって、当調査区では、造成土直下で遺構面を検出したと言える。



第29図 調査範囲図
(1 : 約310)



第30図 調査地位置図 (1 : 5000)

(2) 檜出した遺構と出土遺物

調査では、柱穴や土坑などの遺構を検出したが、出土した遺物は細片の上、風化しているものが多く、時期がわかるものは、溝1から出土した遺物だけに限られる。

以下、主要な造構の詳細を述べることにする。

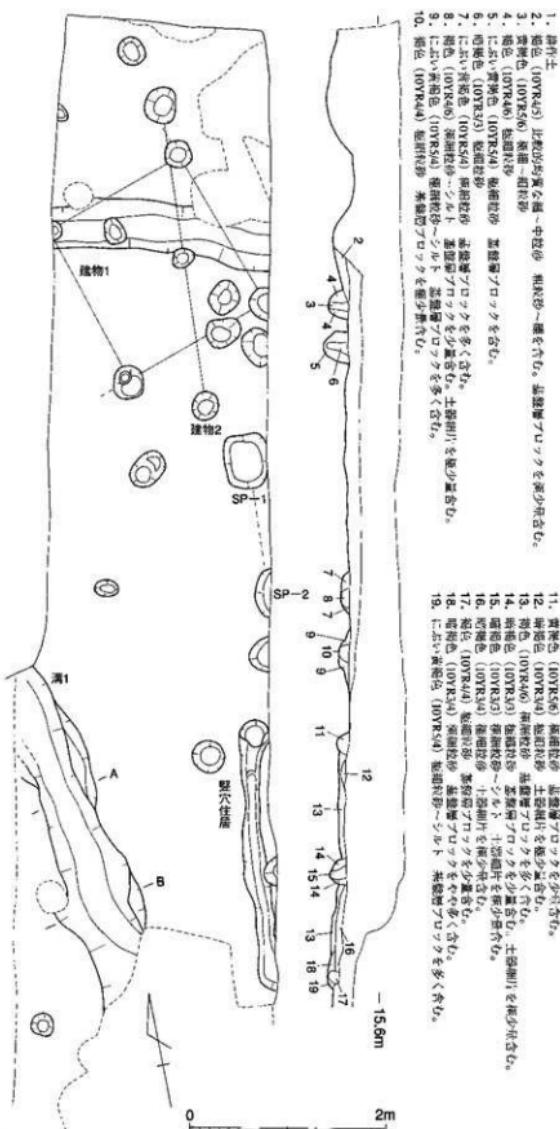
建物1 調査区北部で検出した柱間1間(1.8m)×1間(1.6m)以上の建物となる。柱穴は検出面上で直径30cmの平面凹形状を呈し、柱痕から0.15m前後の柱が推定される。

建物の時期は、出土した遺物が極細片となることから明確にはできないが、周辺の状況から弥生時代終末期の所産と可能性が考えられる。

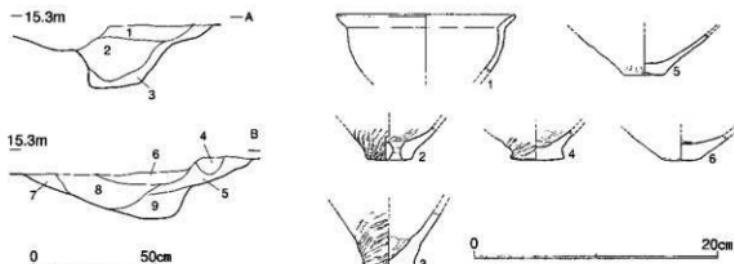
建物2 調査区北部で検出した南北2間(3.1m)以上の掘立柱建物と考えられる。ほぼ南北に主軸を取る。柱穴は直径0.3~0.4m、柱は柱痕から15cm前後と考えられる。遺物は出土していないため、時期は明確ではないが、建物1と同じく弥生時代終末期の可能性が考えられる。

柱穴列 調査区中部で検出した、平面隅丸長方形の柱穴（SP-1・2）からなる。SP-1・2の長軸長は55cm、深さ10cm程度をはかる。柱痕から、使用された柱は15cm前後と考えられる。

遺物に須恵器細片がわずかに含まれることから、古



第31図 調査区平面・断面図（1:50）



1. 棕褐色 (10YR4/4) 橫縫粒砂～シルト 上部細片を含む。
2. 棕褐色 (10YR4/4) 橫縫粒砂～シルト 基盤層ブロックをやや多く含む。土器片を含む。
3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 橫縫粒砂
4. 魚丸
5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 橫縫粒砂
6. 棕褐色 (10YR4/4) 橫縫粒砂 土器細片を少量含む。
7. 棕褐色 (10YR3/3) 橫縫粒砂 土器細片を極少含む。
8. 棕褐色 (10YR4/4) 橫縫粒砂 十割片を多く含む。焼土・基盤層ブロック・板を多く含む。
9. にぶい青褐色 (10YR5/4) 橫縫粒砂～シルト 基盤層ブロックを極少含む。

第32図 溝1断面図 (1:20)

とまったく土器が出土したが、完形品はなかった。溝1と類似する溝は、これまでの調査でも確認されており、雨水等の排水を目的に掘削されたものと考えられる。しかし、建物や住居との関係は明確ではないものもあるため、区画等の機能を目的としたものは、判断しにくい。

1から3は、鉢である。1は、口径14.6cmに復元できる。残存高は4.8cmをはかる。内外面ともに風化し、調整は不明である。2は、底部径3.6cm、残存高2.8cm以上をはかる。底部に直径1cm程度の穿孔がある。外面はタキ痕が残り、内面はハケを施す。3は、底部径4.0cm、残存高5.0cm以上をはかる。外面にタキ痕を残す。内面は風化し、調整等は明確ではない。4は壺の底部と考えられるが、確定しにくい。底部径4.2cm、残存高2.6cm以上をはかる。5・6は壺底部と考えられる。5は底部径3.3cm、残存高3.3cm以上、6は底部径2.8cm、残存高2.1cm以上をはかる。ともに風化が著しく、調整は明確ではない。以上の出土遺物から、溝1の時期は弥生時代終末期といえる。

3.まとめ

今回の調査では、多数の柱穴が検出されたが、調査区が狭小であるため、建物1・2以外には復元できなかった。また、竪穴住居なども確認されたが、検出部分がきわめて限定されていたため、その詳細は明確にできなかった。

しかし、今回の調査で弥生終末期の集落の一角が確認されたことで、近隣の第4・9次調査地と第2・3・5次調査地が同一の集落として理解できることになった。また、周辺における調査の進展と資料の蓄積をもって、あらためて分析することで、当調査の成果を大きく活かせることになるだろう。

第Ⅷ章 本町遺跡第32次調査

1. 調査の経緯

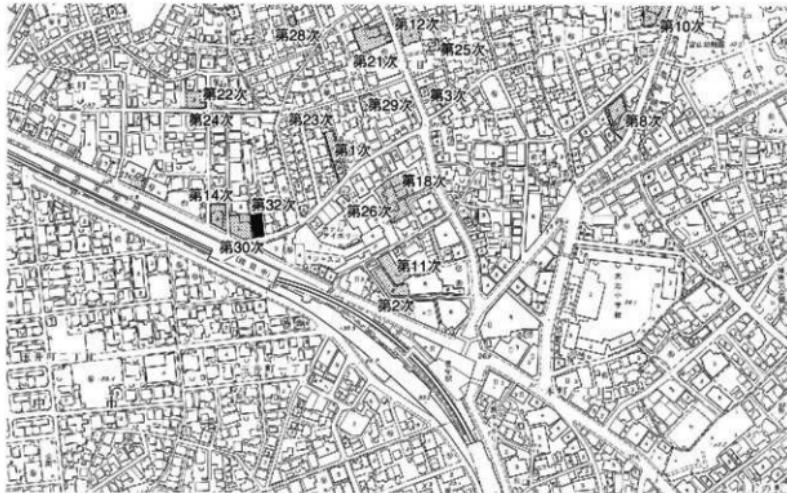
平成17年6月15日に、本町2丁目3・4における店舗付き共同住宅の建設にかかる埋蔵文化財発掘の届け出が提出され、これを受けて7月14日に確認調査を行った。この結果、地表下1.1mのところで遺構面を検出したが、計画中の建物は地上5階建のため、計画を変更する余地がないことから、発掘調査による記録保存の必要が生じた。また当建築計画は、個人事業主による事業であり、審査の結果、調査費用の一部について補助を行うことになった。以上の経緯により、8月12日～9月22日にかけて、発掘調査を行った。

2. 調査の成果

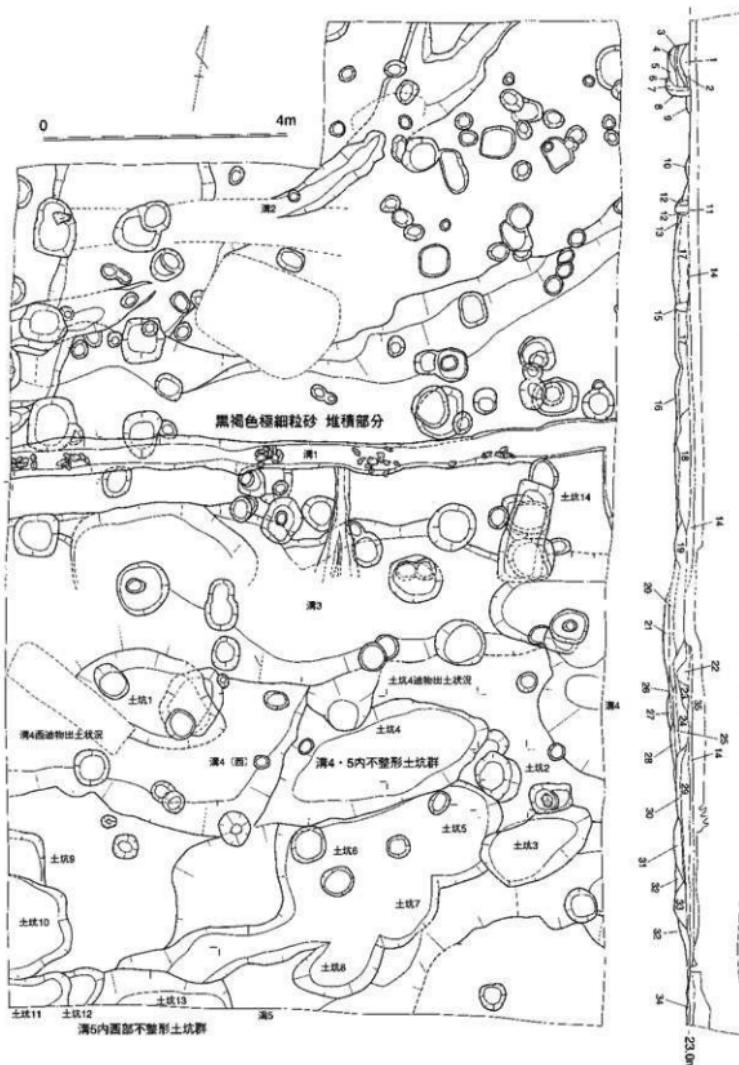
(1) 基本層序

第34図 調査範囲図（1：400）

当調査区北部および南部では、耕作土直下において段丘洪積層（基盤層）を検出したが、中央付近は約30cmほど低く、この部分に褐色細粒砂層と黒褐色極細粒砂層が堆積する。このうち、褐色細粒砂



第35図 調査位置図（1：5000）



第36図 調査区平面・断面図 (1 : 80)

東壁面土色 (1~11)

1. 基盤層ブロックに黒色 (10YR2/1) 硫化鉄跡-シルトを少量含む。
2. 基盤層ブロックに黒色 (10YR2/1) 硫化鉄跡-シルトを含む。
3. 基盤層ブロックに黒色 (10YR2/1) 沈殿鉄跡-シルトを少量含む。
4. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 硫化鉄跡 十字縞片、炭を微量含む。
5. にじみ黄褐色 (10YR4/3) 硫化鉄跡 土壌鉄跡、炭を微量含む。苔類層 ブロックを少量含む。

6. 黄色 ((10YR2/1) 硫化鉄跡-シルト 基盤層ブロックを少量含む。

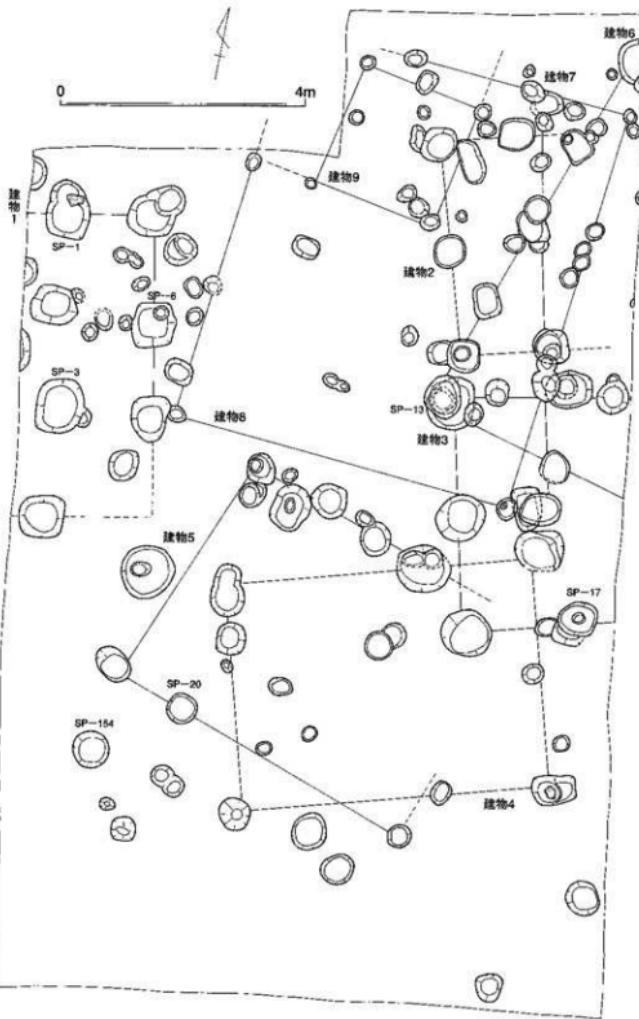
7. 亜色 (10YR2/1) 硫化鉄跡-シルト 基盤層ブロックを少量含む。

8. 亜色 (10YR2/1) 硫化鉄跡-シルト 基盤層ブロックを少量含む。

9. 黄褐色 (10YR4/2) 基盤層以外は黒色 (10YR2/1) 硫化鉄跡-シルト 基盤層ブロックを含む。

10. 黄褐色 (10YR3/2) 硫化鉄跡 シルト含む。基盤層が土壌化したものか。

11. 亜色 (10YR2/1) 硫化鉄跡 シルト含む。十字縞片を微量含む。



第37図 建物1～8 平面図 (1:80)

層は黒褐色板細粒砂層堆積後の浅い落ち込みに堆積したものと考えられ、その分布範囲は調査区内部に限定される。同層からは、8世紀代と考えられる須恵器杯Bの細片等が出土しており、後述する溝4の最終埋没時期と一致する。一方、黒褐色板細粒砂層は、自然地形状の落ち込みに自然堆積したものと考えられる。同層からは、弥生土器の可能性がある土器細片が極少量出土した。また、調査区南

部一帯では遺構が密集する状態で検出されたこともあるが、黒褐色極細粒砂層の堆積が確認できるのは北半部に限られる。

低地部における遺構は、褐色細粒砂層および黒褐色極細粒砂層の上面から掘削されているものが認められるとおり、各層の上面から断続的に掘削されている。黒褐色極細粒砂層掘削後に基盤層上面でも遺構を確認したが、これらの遺構は上層からの掘り残しになる可能性が残る。また、これら堆積土上面の遺構と南部・北部の基盤層上面で検出した遺構の対応関係が明確ではないことから、各層上面で検出した遺構を同一平面図上に示した。

なお、当調査区では、柱穴をはじめ多数の遺構が検出されたが、これらは古墳時代・奈良時代～平安時代の2時期に大きく区分することができる。以下、各時期の遺構・遺物について、述べることにする。

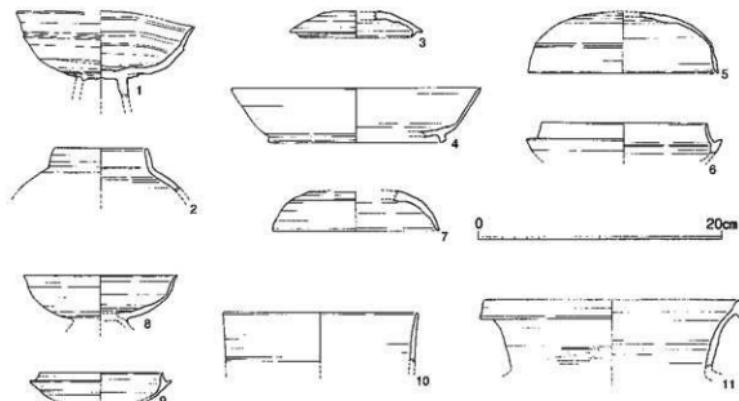
(2) 古墳時代の遺構と遺物

建物1 黒褐色極細粒砂層上面で検出した、縦柱の可能性がある掘立柱建物である。建物の主軸は、N-10°-Wである。南北3間(5.0m)、東西1間(1.5m)以上、南北列における柱芯間の間隔は1.7～1.8mをはかる。柱穴は平面隅丸長方形を呈し、一辺0.7～0.9mをはかる。使用された柱は、その痕跡から20cm程度と考えられる。柱穴のうち、南東角の一つは基盤上面でも確認できなかったことから、もともと掘削されていなかったと考えられる。また、北辺の柱穴は重複しており、柱の付け替えによる補修も想定できる。

建物1出土遺物 第38図1、2はSP-1、3～6はSP-3、7はSP-7から出土した。

1は須恵器高杯は、焼け亞みが著しいものの口径13.6cmに推定できる。残存高7.2cmで、杯部高は5.6cmをはかる。口縁端部には沈線などはみられず、やや外反気味に開く。脚部には、3方向のすかしがある。2は須恵器短頸壺である。残存高3.6cmをはかり、口径7.6cmに復元できる。内外面ともに回転ナデを施す。

3の須恵器蓋は、残存高2.2cm、口径11.0cmをはかる。天井部付近が回転ヘラケズリとなる以外は、回転ナデを施す。4の須恵器杯Bは、器高4.5cmをはかり、口径は20.8cmに復元できる。体部内外面は回転ナデ、底部周辺は高台貼り付け時に横ナデが施される。5の須恵器杯蓋は、口径15.6cmに復元できる。残存高は5.0cmをはかり、器高5.2cm前後になると想われる。口縁端部に不明瞭な段が巡らされる。6の須恵器杯身は、口径13.6cm、受部径16.2cmに復元できる。残存高2.5cmをはかる。口縁



第38図 建物出土遺物 (1:4)

部端部は丸く、段などはみられない。

7の須恵器杯蓋は、残存高3.3cmをはかり、口径13.5cmに復元できる。天井部の回転ヘラケズリは、口縁部付近におよぶ。

これらの遺物をみると、概ねT K-47～T K-10の幅に収まることから、建物1は6世紀初頭に建築され、中頃までに廃絶した可能性が考えられる。4は、上面に堆積する包含層から混入したものと考えられる。

建物2 黒褐色極細粒砂層下で検出した、掘立柱建物の一部である。東半部の柱穴が検出できないため、建物ではない可能性もある。しかし、後述する建物4などと同じく、一部の柱穴について後世の削平により消滅したか、あるいはもとから掘削されていなかったことも想定できる。よって、ここでは建物として取り扱った。

建物2は東西1間（1.4m）以上、南北2間（3.5m）、南北の柱芯間の間隔は1.75mをはかる。柱穴はやや円形に近い形状を呈し、直径0.5mをはかる。使用された柱は、その痕跡から20cm程度と考えられる。

建物3 黒褐色極細粒砂層上面で検出した南北2間（3.8m）、東西1間（1.8m以上）の掘立柱建物である。建物の主軸を略東西と考えた場合、N-70°-Eである。南北の柱芯間の間隔は1.8～2.0mで、柱穴は直径0.7m程度の円形状の平面形を呈する。使用された柱は、痕跡から25cm前後と考えられる。東柱はみられないが、倉庫状の建物になる可能性がある。

建物3出土遺物 第38図8はS P-17、9はS P-13から出土した。8の須恵器高杯は、残存高は3.8cmをはかり、口径12.6cmに復元できる。底部外間に一部回転ヘラケズリが残るもの、それ以外は回転ナデを施す。9の須恵器杯身は、残存高2.2cmをはかり、口径10.2cm、受部径11.8cmに復元できる。9から、建物3は7世紀前半代の所産と考えられる。

建物4 極細粒砂層上面から掘削された可能性がある東西5.2m、南北4.0mの掘立柱建物である。建物2と同じく柱穴が完全にそろったものではなく、復元には若干検討の余地を残す。建物の主軸は、N-75°-Eである。柱穴は直径0.8mをはかり、円形状の平面形を呈する。使用された柱は、その痕跡から20cm前後と考えられる。

建物5 溝4・5上面で検出した東西5.3m、南北4.0mの掘立柱建物である。柱の多くは、溝4・5掘削時に削平したものと考えられるが、確認した柱穴から東西4間、南北2間になる可能性が考えられる。柱穴は直径0.6mの半円形状を呈する。建物の主軸は、N-67°-Wである。

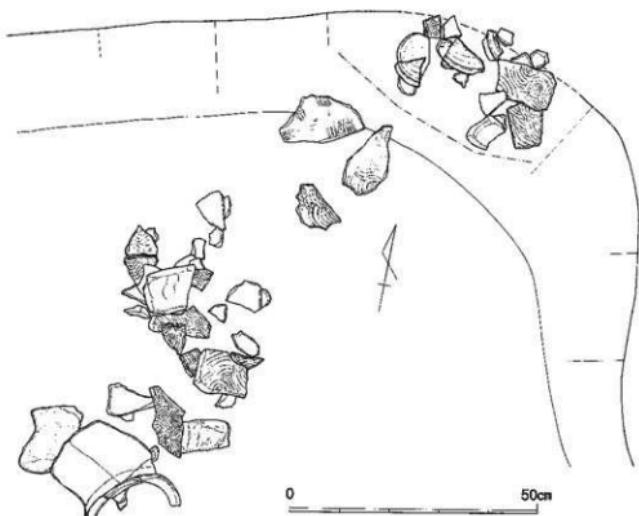
建物5出土遺物 第37図10はS P-20から出土した。器種は不明であるが、椀などの可能性が考えられる。復元径16.0cm、残存高は4.2cmをはかる。下部に沈線1条が確認できる。内外面ともに回転ナデを施す。遺物の時期は明確ではないが、6世紀代の所産となる可能性が考えられる。

建物6 黒褐色極細粒砂層上面で検出した、南北4間（6.5m）、東西1間（2.0m）以上の側柱建物である。柱穴は1辺0.6m前後の隅丸方形を呈し、柱芯間の間隔は1.5m前後をはかる。使用された柱は、痕跡から15cm前後である。建物の主軸は、N-6°-Eである。

建物7（柱穴列） 南北3間（6.7m）以上の側柱建物の可能性が考えられる柱穴列である。柱穴は南端のものが1辺0.6mの半圓丸方形となる以外は、長軸長0.5mの平面格円形状を呈する。柱芯間の間隔は1.8m前後、柱はその痕跡から直径15cm前後と考えられる。建物の主軸は、N-10°-Wである。

そのほかの柱穴出土遺物 このほか、多数の柱穴から遺物が出土しているものの、細片にとどまるため、同化できたものはSP154から出土した第38図11だけに限られた。11の須恵器壺は、残存高は5.5cmをはかり、口径21.2cmに復元できる。口縁端部は、上下に拡張され、側面を形成する。内外面ともに回転ナデを、顎部外面下半にはカキメが施される。

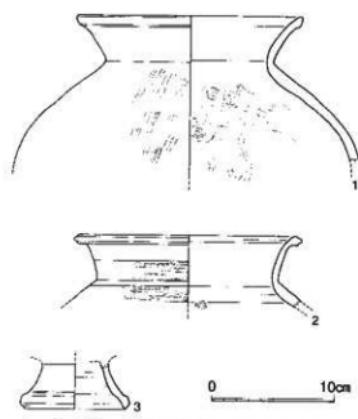
以上、それぞれの建物について述べた。調査区で検出した建物で時期が判明したのは、建物1、建物3、建物5である。また、建物1と4、2と3、5と6は、主軸方向がほぼ同じであり、同時期に展開した可能性が考えられる。建物1と建物5の前後関係は明確にはできないが、建物1が先行する可能性が高いものと判断する。これらのことから、当調査区における建物群は、6世紀前半に建物1



第39図 土坑1 遺物出土状況（1：10）

と4が、その後建物5・6へ、そして7世紀前半に建物2と3へ変遷することが考えられる。ただし、須恵器杯Bが遺物包含層から出土していることから、当調査区周辺において集落の一角をなす建物群は、溝1が掘削される8世紀まで継続した可能性が考えられる。

土坑1 溝4 西部上面から掘削された不整楕円形状の平面を呈する土坑である。南北1.45m、東西2.5m、深さ0.2m以上をはかる。埋土は3層程度に区分できるが、人為的な堆積状況を示すものではない。土坑東側からは、須恵器大型片などが若干まとまった状況で出土した。



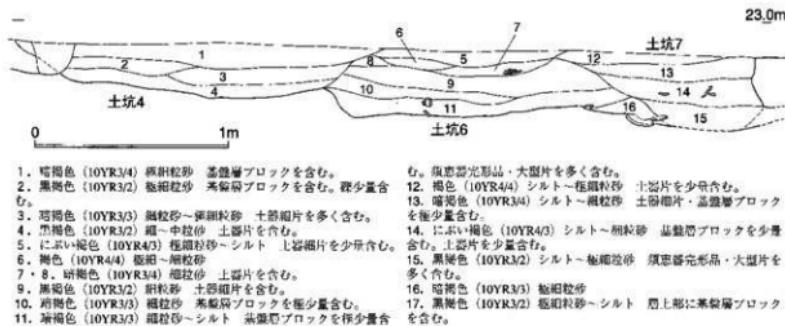
第40図 土坑1 出土遺物（1：4）

土坑1出土遺物 土坑1から出土した遺物は、第40図に掲載した。

1・2は、須恵器壺である。1は残存高11.9cmをはかり、口径18.4cmに復元できる。風化により内外面の調整は明確ではないものの、体部外面にタタキ痕、内面にアテ具痕が確認できる。2は、残存高5.9cmをはかり、口径18.6cmに復元できる。口縁端部下部は強いナデにより、凹線状にくぼむ。内外面ともに回転ナデを、頸部外面下半にはカキメが施される。3の須恵器高杯は、脚部高3.8cmをはかり、幅部径は8.0cmに復元できる。残存部にスカシは認められなかった。内外面は、とともに回転ナデを施す。

土坑1の時期は、明確にできないものの、3の高杯脚部から6世紀後半代の所産と考えたい。

溝4・5内不整形土坑群 溝4・5上面あるいは基底面上で検出した、土坑2～8からなる土坑群である。溝4・5上面で検出できなかったものが多く、溝4・5



第41図 溝4・5・6内不整形土坑群断面図 (1:25)

の埋没過程で掘削された可能性も考えられる。土坑は密接するように掘削されていたが、断面形状や埋土に粘土探査坑のような特徴は認められなかった。以下、各土坑について述べる。

土坑2 南北0.8m、東西0.75mのほぼ円形の平面を有する土坑で、深さ0.2mをはかる。埋土に大きな特徴はみられず、自然堆積の可能性が考えられる。最下層からほぼ完形に近い甕や壺などの須恵器大型片がまとまって出土した。

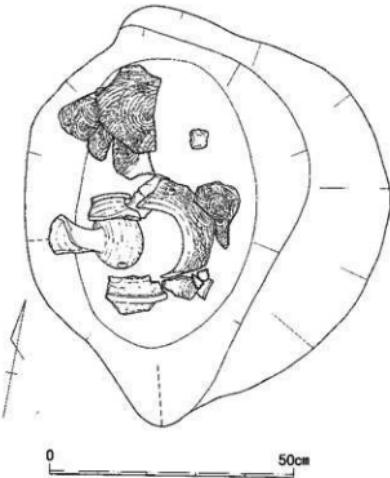
土坑2出土遺物 第43図1・2が土坑2から出土した遺物である。

1は須恵器甕である。体部径9.9cm、残存高13.2cmをはかる。頸部から体部上半にかけての内面は回転ナデ、体部外面下半は回転ヘラケズリを施す。2の須恵器甕は、残存高は7.4cmをはかり、口径18.3cmに復元できる。口縁部内外面は回転ナデ、体部外面はタタキの後にカキメを施し、内面にはアテ具痕を残す。土坑2の時期は明確にできないが、6世紀後半代の所産と考えておきたい。

土坑3 南北0.95m、東西1.9mの平頂椎円形状を呈する土坑で、深さは0.2mをはかる。土坑はほぼ垂直に掘削され、新生探査坑のように抉り込む部分がある。埋土は黒褐色極細粒砂で、自然堆積と考えられることから、粘土探査坑の可能性はないと考える。また、南側は倒木痕の影響で、埋土が基盤層内に貯入している。上層からは須恵器甕・壺の完形品が、また下層からは須恵器大型片が出土した。

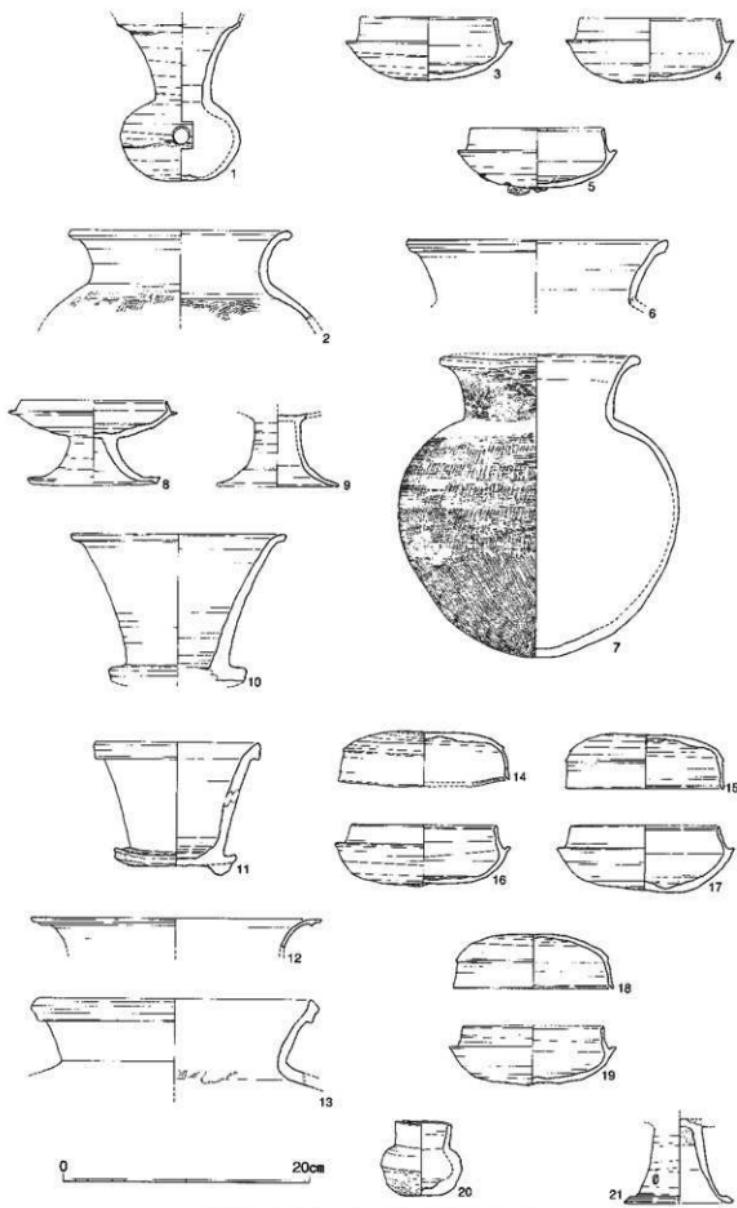
土坑3出土遺物 第43図3～7が、土坑3から出土した遺物である。3～5は、須恵器甕身である。3は、口径11.2cm、受部径13.7cm、器高5.2cmをはかる。口縁端部上面から刻み込むように沈線を巡らせる。体部外面の回転ヘラケズリは、上半まで施される。4は、口径11.4cm、受部径13.7cm、器高5.0～5.3cmをはかる。5は口径10.8cm、受部径13.0cm、器高5.0cmをはかる。口縁端部には、明瞭な段が巡らされる。外面の回転ヘラケズリは、下半部にとどまる。

6、7は須恵器甕である。6は残存高4.8cm以上をはかり、口径21.4cmに復元できる。風化により、内外面の調査は明確ではない。7は器高



第42図 土坑2遺物出土状況 (1:10)

2. 調査の成果



第43図 土坑2~4・6出土遺物 (1:4)

25.1cm、体部径33.6cmをはかる。口径は15.3cmに復元できるが、焼け歪みが著しい。口縁端部は肥厚し、玉縁状を呈する。口縁部外面から頸部内面にかけては、回転ナデ、頸部外面はカキメ、体部上半はナデ、中部はタタキのちカキメを施す。体部外面下半部はタタキ痕が残り、内面にはアテ具痕が残るが、完形品のため図示できなかった。

土坑3は3~5から、6世紀初頭の所産と考えられる。

土坑4 南北1.6m、東西3.8mの平面梢円形状を呈する土坑で、深さ0.3mをはかる。最下層に砂・礫・須恵器細片を含み、溝4・5と類似する。土坑東側から、須恵器鉢などの大型片がまとまって出土した。出土した遺物の特徴から、土坑4は6世紀後半の所産と考えられる。

土坑4出土遺物 第43図8~13が、土坑4から出土した遺物である。

8、9は、須恵器高杯である。8は器高7.0cm前後、裾部径10.6cmをはかる。口径は、11.8cmに復元できる。杯底部に脚部を貼付する。脚部に穿孔はみられない。9は脚部高6.0cmをはかり、裾部径10.0cmに復元できる。内外面ともに回転ナデを施す。残存部にはスカシはない。

10、11は、須恵器鉢である。10は残存高12.0cmをはかり、口径17.8cm、底部径11.4cmに復元できる。口縁部は外方へ屈曲する。体部内外面ともに、回転ナデを施す。11は底部径10.1cm、器高10.2cmをはかる。口径は、13.7cmに復元できる。体部内外面ともに回転ナデを施す。底面の調整は自然軸、焼成時の付着物などのために、明確ではない。口縁部は外方へ屈曲し、端部はナデにより側面を形成する。

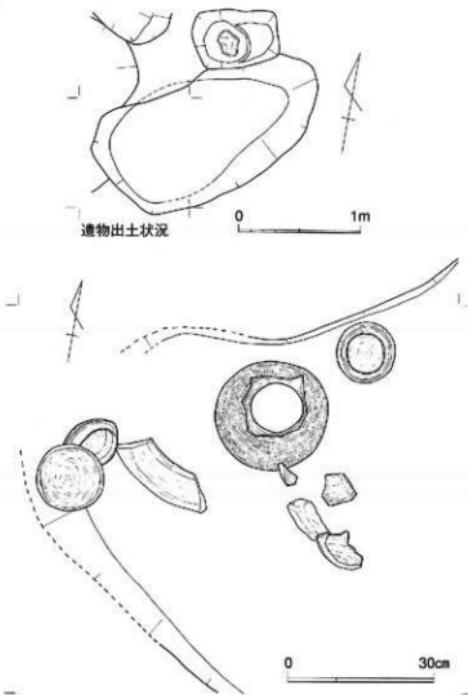
12、13は須恵器壺である。12は残存高2.5cmをはかり、口径23.8cmに復元できる。口縁部はほぼ水平近くになるように開口し、下部に断面三角形状を呈する突帶を貼付する。他の遺物に比べて、時期的に古いことから混入品と考えられる。13は残存高7.1cmをはかり、口径22.2cmに復元できる。口縁部の側面は拡張され、強いナデで凹線状の沈線も施すが、この部分に自然軸がたまっている。内外面ともに回転ナデと考えられるが、自然軸が付着し、やや明確ではない。

土坑5 南北1.7m、東西1.2m以上の平面円形状を呈する土坑で、深さ30cmをはかる。埋土中に須恵器片が含まれるもの、大型片などがまとまって出土することはなかった。

土坑6 南北1.1m以上、東西1.9m以上の平面梢円形状を呈する土坑で、深さ0.35mをはかる。土坑下層から基底部直上にかけて、完形の須恵器などがまとまって出土した。

土坑6出土遺物 第43図14~21・第47図19が、土坑6から出土した遺物である。

14・15・18、第47図19は、須恵器杯壺である。14は口径14.0cm、器高4.5cmをはかる。焼け歪みが著しい。口縁端部は丸みを帯びるが、段状の沈線は明瞭である。天井部の回転ヘラケズリは口縁部付近





第45図 土坑4 遺物出土状況 (1:10)

によぶ。15は、口径12.8cm、器高4.5cmをはかる。口縁端部は丸味を帯び、段状に施された沈線は不明瞭である。第47図19は口径12.6cm、器高5.4cmをはかる。天井部には回転ヘラケズリを施すが、口縁部付近に一部及ぶ。口縁端部は段状になり、その直上は肥厚する。

16・17・19は、須恵器杯身である。16は口径11.8cm、器高4.9cmをはかる。口縁端部は、段状の沈線を巡らせる。底部の回転ヘラケズリは、体部上半付近まで及ぶ。17は口径12.0cm、受部径14.6cm、器高5.0～5.5cmをはかる。口縁端部には段状の沈線が巡らされる。体部下半は回転ヘラケズリ、内面および体部上半から口縁部にかけて、回転ナデを施す。19は口径11.7cm、受部径13.8cm、器高4.9cmをはかる。口縁端部は明瞭な沈線が巡らされる。

20の須恵器小型短頸壺は、器高6.1cm、口径4.6cmをはかる。口縁端部には、上方から刻み込まれるように、沈線が巡らされる。体部外面上半から内面は回転ナデ、体部外面下半は手持ちヘラケズリを施す。21の須恵器高杯は、柄部径9.0cm、脚部高6.3cmをはかる。下部の3方向に円形のスカシがある。内外面ともに、回転ナデを施す。

土坑6から出土した遺物には、やや時期幅が認められるものの、6世紀前半の所産と言える。

土坑7 南北1.0m以上、東西1.3m以上の平面楕円形状を呈する土坑で、深さ0.4mをはかる。土坑下層から基底部直上にかけて、完形の須恵器などがまとめて出土した。

土坑7出土遺物 第47図1～7が、土坑7から出土した遺物である。

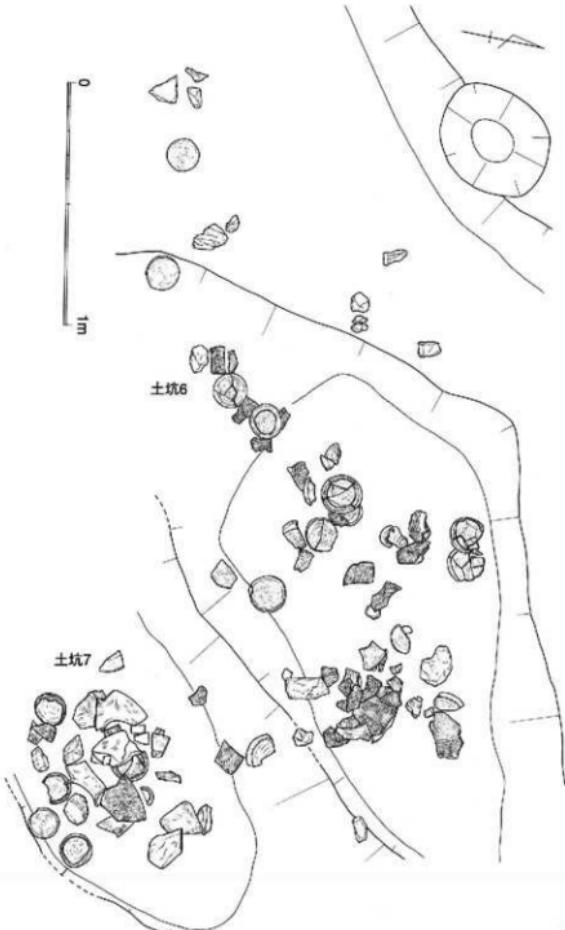
1の須恵器杯蓋は、口径12.4cm、器高4.5cmをはかる。天井部には回転ヘラケズリ、口縁部から内面にかけては、回転ナデを施す。口縁端部には刻み込むように沈線が巡らされるため、やや外反する。

2・3は須恵器杯身である。2は口径10.7cm、受部径13.0cm、器高4.9cmをはかる。端部は不明瞭な段が巡らされて、丸味を帯びる。3は口径9.8cm、受部径12.9cm、器高5.8cmをはかる。器形は全体的に歪んでいる。底部外面の回転ヘラケズリは上半まで及ぶ。口縁端部の段は一部不明瞭となり、端部全体が丸味を帯びる。

4の須恵器高杯は、残存高5.1cmをはかり、口径12.4cmに復元できる。底部には脚部の剥離痕があり、その痕跡から3方向ほど長方形のスカシが想定できる。杯部底部外面は回転ヘラケズリを施すが、体部下半にとどまる。口縁端部には、段状の沈線が巡らされる。5の須恵器器台は、残存高6.7cm以上、幅部径35.6cmに復元される。外面にはカキメを施した後、波状文で加飾する。胴部には、三角形と考えられるスカシの痕跡が残る。また、胴部と柄部の境界には、2条の凹線が巡らされている。6の須恵器甕は、残存高9.7cmをはかり、口径17.0cmに復元できる。口縁端部は拡張され、玉縁状を呈する。頸部から体部外面にかけてはカキメを施すものの、タタキ痕が残る。内面は横ナデを施す。体部には、アテ具痕がわずかに残る。7の須恵器小型短頸壺は、器高4.6cm、口径5.8cmをはかる。口縁端部には、段状の沈線が2条ほど巡らされる。内面および体部外面上半にかけては回転ナデを、体部外面下半は手持ちヘラケズリを施す。

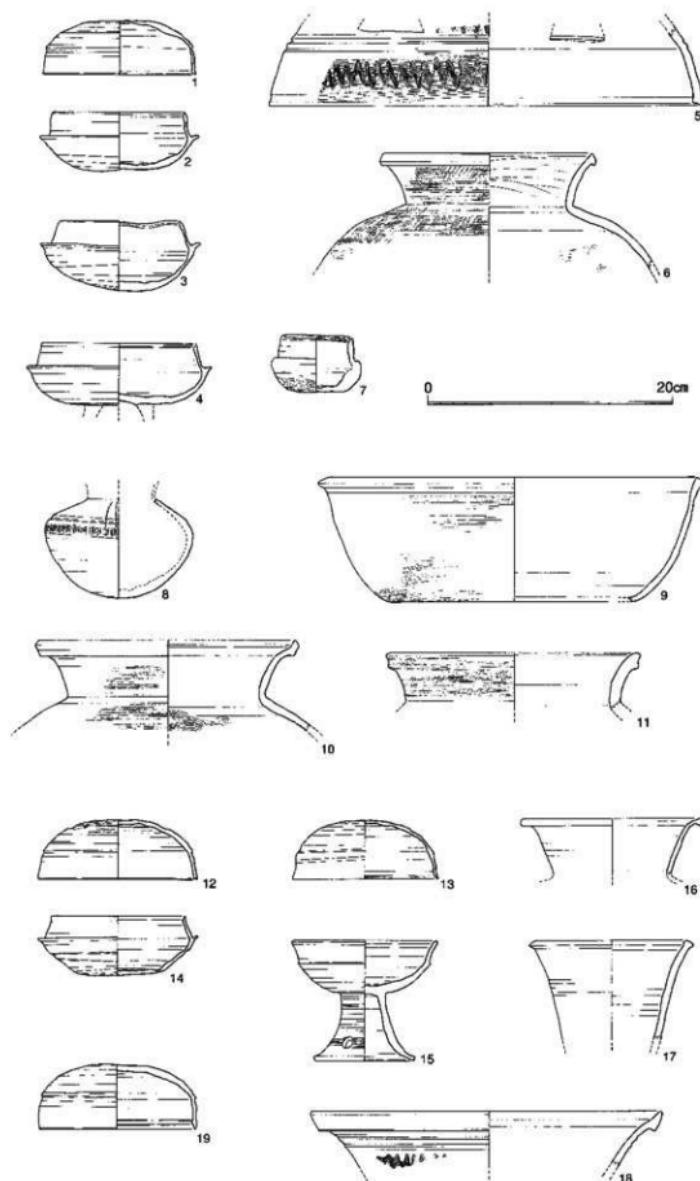
土坑7は、遺物にやや時期幅が認められるものの、6世紀前半の所産と言える。

土坑8 南北1.0m以上、東西1.6m以上の平面椭円形状を呈する土坑で、深さ0.2mをはかる。埋土中に須恵器片が含まれるもの、大型片などがまとまって出土することはなかった。



第46図 土坑6・7遺物出土状況（1：20）

2. 調査の成果



第47図 土坑6～8、溝4・5内不整形土坑出土遺物（1：4）

土坑8出土遺物 第47図8～11が、土坑8から出土した遺物である。

8の須恵器壺は、体部径12.1cm、残存高8.4cmをはかる。一見して龜にみえるが、注口がないことから龜とした。体部中位に櫛書き状の列点文を施す。外面は著しく摩耗しており、調整などは不明である。底部内面に付着物が見える。

9の須恵器盤は、器高10.2cmをはかり、口径は31.8cmに復元できる。口縁部は外方は拡張され、断面三角形状を呈する。口縁部内外面は回転ナデ、体部外面はカキメ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。内面は風化が著しく、調整は不明である。

10・11は須恵器甕である。10は残存高7.5cmをはかり、口径20.8cmに復元できる。口縁部は上方へ屈曲するように抵弧する。口縁部から頸部内面は回転ナデ、頸部以下外面はカキメを施す。体部内面には、アテ具痕が残る。11は残存高4.7cmをはかり、口径20.8cmに復元できる。口縁部は外方へ屈曲し、端部は強いナデにより、凹線上にくぼむ。外面は自然釉により、調整などは明確ではないが外面上にカキメを施したものと考えられる。

土坑8の時期は明確にしがたいが、8から6世紀前半代の可能性が考えられる。

溝4・5内不整形土坑群と考えた各土坑は、概ね6世紀代にまとまるが、同じ時期の所産にはならない。よって、これらの土坑は短期間に集中して作られたものではなく、建物群の展開などに即して継続的に作られた可能性が考えられる。

溝4・5内不整形土坑群出土遺物 溝4・5掘削途中に、大量の遺物が出土したが、これらの多くは不整形土坑に伴う可能性が高いものと判断した。それらは、遺構の帰属関係が明確ではないものの、完形品も多いことから、第47図に若干の遺物を掲載した。

12・13は須恵器杯蓋である。12は器高4.9cmをはかり、口径13.0cmに復元できる。天井部周辺は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデを施す。口縁端部には、明瞭な沈線が巡らされる。13は口径11.7cm、器高4.9cmをはかる。天井部は回転ヘラケズリを、それ以外は回転ナデを施す。口縁部端には段状の沈線を施すが、不明瞭になっている。

14の須恵器杯身は、口径10.6～10.9cm、器高4.7～4.9cmをはかる。底部外面は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデを施す。口縁端部には不明瞭な段状の沈線が巡らされる。

15の須恵器高杯は、口径11.4cm、器高9.9cmをはかる。脚部には、3方向に円形のスカシがある。脚部外面はカキメ、内面は回転ナデ、杯部外面下半は回転ヘラケズリ、体部上半から内面および脚部接合部付近は回転ナデを施す。

16・18は須恵器壺である。16は残存高4.7cmをはかり、口径13.0cmに復元できる。内外面ともに回転ナデを施す。口縁端部は肥厚し、玉締状を呈する。18は残存高4.7cmをはかり、口径28.8cmに復元できる。口縁端部は、肥厚し、断面三角形状を呈する。頸部外面は強いナデにより沈線と断面三角形状の突帯を2条施す。その下には、櫛書きによる波状文が加飾される。

17の須恵器鉢は、残存高8.2cmをはかり、口径12.4cmに復元できる。口縁端部は拡張され、断面玉締状の形状を呈する。内外面とも回転ナデを施す。

これらの遺物は、遺構の帰属関係が明確ではないが、土坑群の時期幅と概ね一致するものと言える。

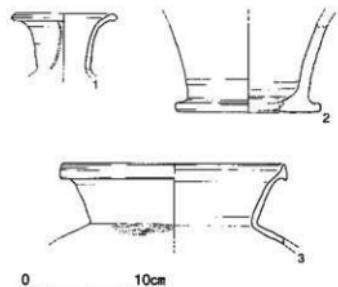
溝5西部不整形土坑群 調査区南西端部で検出した、土坑9～13からなる土坑群である。検出部分は限定されているものの、複数の土坑が重複する状況で検出されたことから、溝4・5内不整形土坑群と同じ性格の土坑になる可能性が高いと判断した。ただし、これらの土坑からは、遺物がまとまつた状態で出土していない。

土坑9 検出部分で南北0.9m、東西0.4m、深さ0.1m前後をはかる。平面形状は明確ではない。埋土中から若干の須恵器片が出土した。

土坑10 南北1.7m、東西0.8m以上、深さ0.25mをはかる。検出部分から方形または長方形の土坑となる可能性が考えられるが、判然としない。下層から土師器・須恵器の大型片などが出土した。

土坑9・10出土遺物 土坑9と土坑10は、検出段階で同じ遺構と考えて掘削したため、遺物の帰属関係は明確ではない。このため、第48図にあわせて掲載した。

2. 調査の成果



第48図 土坑9・10出土遺物 (1 : 4)

1の須恵器長頸壺は、残存高は4.6cmをはかり、口径8.6cmに復元できる。外面ともに回転ナデを施す。頸部外面に、ヘラ書きがみられるが、記号になるものかは明確ではない。

2の須恵器鉢は、残存高は7.5cmをはかり、底部径は12.0cmに復元できる。体部は内外面ともに回転ナデを、底部側面にも回転ナデを施す。底部は、著しく歪んでいる。底部外面の調整は、使用時の摩耗で不明である。

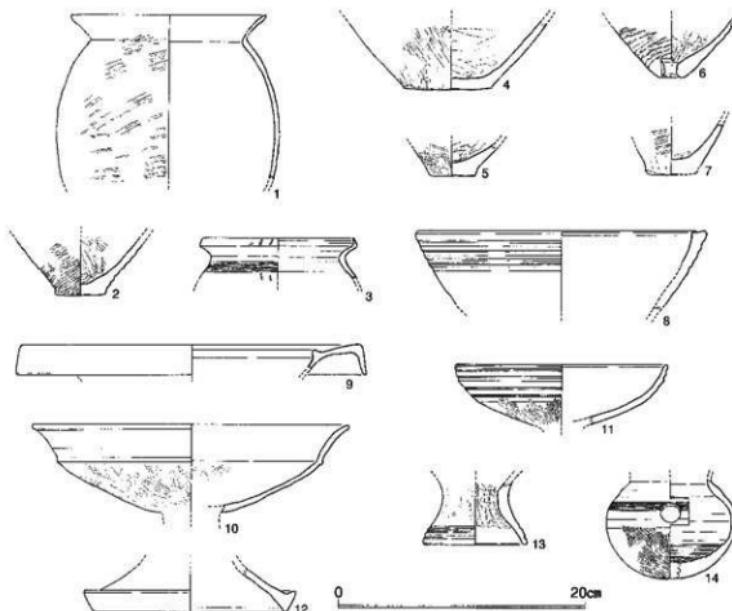
3の須恵器壺は、残存高6.7cmをはかり、口径18.0cmに復元できる。口縁端部は上下に拡張され、側面を形成する。体部外面にカキメを、口縁部外面、体部外面に回転ナデを施す。

土坑9・10から出土した遺物に時期を決定できるもの

はないが、少なくとも6世紀代とは言える。

土坑11・12 どちらも検出部分が限定されており、それぞれの規模・形状は明確ではない。埋土は黒褐色細粒砂からなる。遺物は須恵器・土師器の細片が出土しただけにとどまる。

土坑13 検出部分において南北0.6m、東西2.3m、深さ0.2mをはかる。形状等については、検出範囲が限定されているため、明確ではない。埋土に基礎層ブロックを多く含み、人為的に埋め戻されたものと言えるが、粘土採掘坑とは明らかに異なる。遺物は、須恵器・土師器の細片が出土しただけにとどまる。



第49図 溝3出土遺物 (1 : 4)

溝5西部不整形土坑群の時期は、出土遺物が少ないため、明確にできない。しかし、溝5埋没以前の遺構であることは明確であるから、概ね6世紀代と考えられる。よって、溝4・5内不整形土坑群とはほぼ同時期の所産と言える。

溝2 調査区北部を南西に向かって、弧状に掘削された溝である。幅0.5m、深さ0.1mをはかり、U字状の断面形を呈する。南側では両岸の土砂が流出し、掘方が落ち込み状に不明瞭なものになっている。遺物等は細片にとどまることから、時期は決定できないが、中世に下るものとは考えにくい。

溝3 黒褐色極細粒砂層上面から掘削された幅2.5m前後、深さ0.3m前後の溝である。数回にわたって、掘り返された可能性が考えられ、溝の基底部は平坦ではない。上～中層は多量の弥生土器を含む黒褐色極細粒砂層であった。このため、黒褐色極細粒砂層上面では検出できず、掘削後に遺構であることを確定した。また、最下層埋土には砾・中～粗粒砂を多く含むことから、機能時に流水があった可能性が考えられる。上～中層から出土した弥生土器は、中期～終末期にかけての時期幅があり、須恵器も混在することから、何らかの造成で出土したもののが溝に廃棄された可能性も考えられる。しかし、遺物の中には完形に近いものも含まれていることから、二次堆積の要因は特定できない。なお、溝3を境に、南側に不整形土坑が、また北側では建物が多く検出されている。このことから、ある時期の建物群に伴う区画溝になる可能性がある。

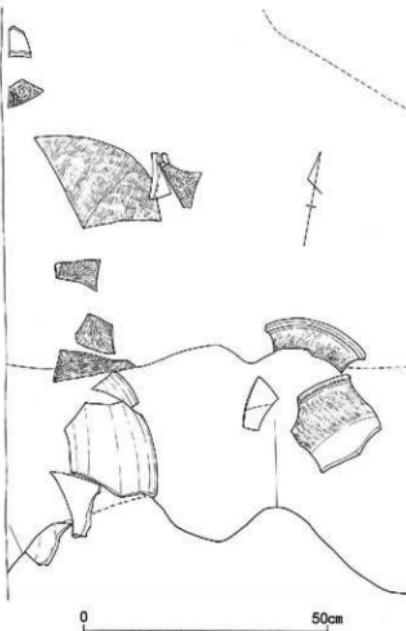
溝3出土遺物 溝3からは、第49図に掲載する遺物などが出土したが、このほか多量の弥生土器が出土している。しかし、その多くは保存状態が悪く、固化できたものはごく少数にとどまった。

1～3は弥生土器壺である。1は残存高13.5cmをはかり、口径16.0cmをはかる。体部外面にタタキ痕が残る以外、風化により調整は不明である。2は底部径4.0cm、残存高4.9cmをはかる。体部外面にはタタキ、内面には粗雑なハケを施す。3は残存高3.4cmをはかり、口径12.2cmに復元できる。口縁端部は、やや内傾気味に立ち上がり、側面には刻目文を加飾する。また、体部上半には、模書による5条の沈線と、その直下に列点文を加飾する。内外面ともに、風化が著しく調整は明確ではない。なお、3は近江系と言える。

4・5は弥生土器壺である。4は底部径6.6cm、残存高5.7cmをはかる。体部外面には板ナデおよびケズリ状のハケを、内面には横方向のナデを施す。5は残存高2.7cm、底部径3.7cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面は風化により調整などは明確ではない。底部径からみて、小型の部類に属すると考えられる。

6～8は弥生土器鉢である。6は残存高4.8cm、底部径2.4cmをはかる。底部に直径1cmほどのスカシがある。体部外面にはタタキ痕が、内面にはハケが施される。7は底部径4.2cm、残存高4.3cmをはかる。外面にタタキ痕がわずかに残る。8は残存高6.7cmをはかり、口径23.6cmに復元される。口縁部には、4条の凹線が施されるものの、風化が著しく、内外面の調整は不明である。

9～12は、弥生土器高杯である。9は残存



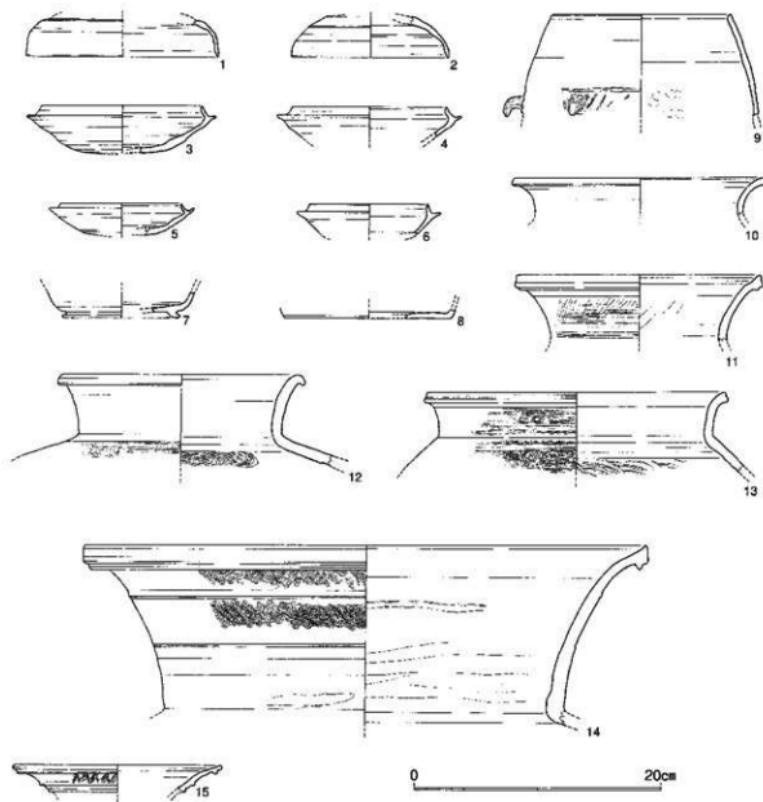
第50図 溝4西遺物出土状況 (1:10)

2. 調査の成果

高2.5cmをはかり、口径27.6cmに復元できる。口縁部は垂下し、側面を形成する。内外面ともに風化し、調整は不明である。10は杯部高7.2cmをはかり、口径25.6cmに復元できる。内外面ともに風化が著しく調整は明確ではないが、底部外面はハケ、内面はハケのちナデを施す。11は残存高5.0cmをはかり、口径17.2cmに復元できる。口縁部には4条の幅広い凹線が、体部にはヘラミガキが施される。内面は、風化しているため、調整は不明である。12は残存高3.7cm、裾部径17.5cmをはかる。裾部は肥厚し、その端部は上方に拡張され、側面を形成する。

13は脚部であるが、器種は不明である。脚部高5.2cmをはかり、裾部径8.3cmに復元できる。裾部に凹線3条を施す。14の須恵器甌は、体部径10.6cm、残存高8.2cmをはかる。体部外面下半はタタキ、上半は回転ナデ、内面は回転ナデを施す。体部中位に注口と、カキメ状の沈線5条前後が施される。

溝3から出土した弥生土器は、中期から終末期にかけてのものが混在する。図化したものは、IV様式以降のものになるが、このほかにもIII様式に遡る遺物も、若干出土している。なお、溝3の時期は、14から6世紀代と考えられる。



第51図 溝4・溝4西出土遺物（1：4）

溝4・5 溝4・5は重複し、また複数回にわたって掘り返されていることから、その規模などについても確定しにくい。埋没最終段階にあって、下層部分に砂礫層が認められることから、降雨時は流路として機能した可能性が考えられる。溝内に多数の不整形土坑が掘削されていることから、宅地の一部を取り込まれていたことは確実である。なお、ともに下層から、須恵器細片などが多数出土したほか、溝4の西側からは須恵器大型壺の口頭部が出土した。

溝4・5出土遺物 第51図に溝4・5から出土した遺物を掲載した。検出面上および掘削中において、これらの溝を識別できなかったが、遺物からみて大きな時期差はないものと判断する。

1・2は須恵器杯蓋である。1は残存高3.2cmをはかる。口径が15.8cmに復元できるが、疑問を残す。2は残存高3.4cmをはかり、口径12.8cmに復元できる。ともに、天井部付近に回転ヘラケズリを施す以外は、回転ナデである。

3～6は、須恵器杯身である。3は器高3.9cmをはかり、口径は13.2cmに復元できる。外縁のヘラケズリは、体部下半部にとどまる。4は残存高2.6cmをはかり、口径12.6cmに復元できる。5は残存高は2.6cmをはかり、口径9.8cmに復元できる。6は残存高2.5cmをはかり、口径9.6cmに復元できる。

7の須恵器杯Bは、残存高2.2cmをはかり、高台径9.6cmをはかる。高台は底部内に貼り付けられ、断面撥状の形態を呈する。8の須恵器杯Aは、残存高0.8cmをはかり、底部径は13.6cmに復元できる。底部内面は回転ナデ、外縁は回転ヘラケズリを施す。

9の須恵器椀は、残存高8.5cmをはかり、口径14.6cmに復元できる。体部中位付近に、把手がつき、その部分に2条の沈線と列点文が施される。内外面はともに回転ナデを施すが、体部内面には押圧痕が残る。

10～13は、須恵器壺である。10は残存高2.9cmをはかり、口径21.1cmに復元できる。内外面ともに回転ナデを施す。11は残存高5.5cmをはかり、口径19.8cmに復元できる。頭部外縁はカキメを施すが、タタキ痕がわずかに残る。12は残存高7.5cmをはかり、口径20.2cmに復元できる。口縁部の内面には回転ナデを、体部外縁はカキメを施す。体部内面には、アテ具痕が残る。口縁端部は下方に屈曲する。13は残存高6.6cmをはかり、口径24.2cmに復元できる。口縁端部はやや上方に屈曲し、端部側面には強いナデにより凹線が巡らされる。外縁はカキメ、頭部内面は回転ナデを施すが、体部内面はアテ具痕を残す。

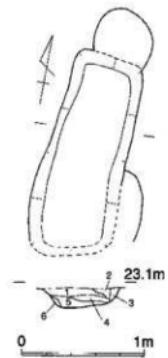
溝4・5から出土した遺物は、時期幅があるものの、下層は7世紀前半、上層は7世紀後半に収まるものと考えられる。

溝4西出土遺物 14・15は、須恵器壺である。14は残存高14.8cmをはかり、口径45.6cmに復元でき、人型の部類に属する。口縁端部はやや上方に拡張され、断面三角形状を呈し、端部下部には尖帯が貼付される。頭部外縁には、波状文と沈線をそれぞれ2条施す。内面は板ナデを施す。15は残存高3.3cmをはかり、口径16.8cmに復元できる。口縁端部直下から頭部にかけて、断面三角形状の突帶を3条貼付し、その間に波状文を描く。15は混入品と考えられる。

溝4西は7世紀以前と考えられ、溝4の掘削時期はそれ以前となる可能性が考えられる。

(2) 奈良・平安時代の遺構と遺物

建物8 南北3間(6.7m)、東西3間(5.6m)をはかる掘立柱建物である。南辺の柱穴や東柱は検出できなかったが、総柱の可能性が高い。柱穴は直径20cm前後の平面円形状を呈し、柱は痕跡から15cm前後と考えられる。柱芯の間隔は南北2.2m前後、東西2.0m前後をはかる。建物の主軸は、N-6°-Eである。出土した遺物は細片にとどまり、建物の時期を示すものはないが、建物の規模から平安時代以降の所産となる可能性が考えられる。

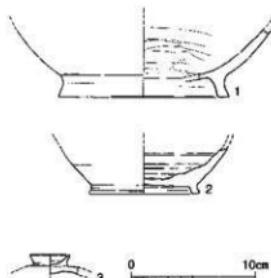


土壤14号

1. 黒色 (10YR4/6) 基底・純粘基盤層ブロックを多く含む。
2. 黄褐色 (10YR3/3) 基底・純粘基盤層ブロックを多く含む。
3. 淡色 (10YR4/4) 基底・純粘基盤層ブロックを少々含む。
4. 褐褐色 (10YR3/4) 基底・純粘基盤層ブロックを含む。上部細層を多く含む。
5. 黄褐色 (10YR2/2) シルト・細粘土層・基盤層ブロック・土塊層を混在する。
6. 黑褐色 (10YR3/3) 純粘基盤層ブロックを少々含む。

52号 土壌14平面・断面図 (1:40)

3.まとめ



第53図 溝1・土坑14出土遺物
(1:4)

3は須恵器蓋杯のつまみである。直径3.0cm、残存高1.7cmをはかる。つまみ上面はくぼんでいる。6世紀代の所産になる可能性が考えられる。しかし、土坑14は溝3上面から掘削されていることから、3は混入品と考えられる。

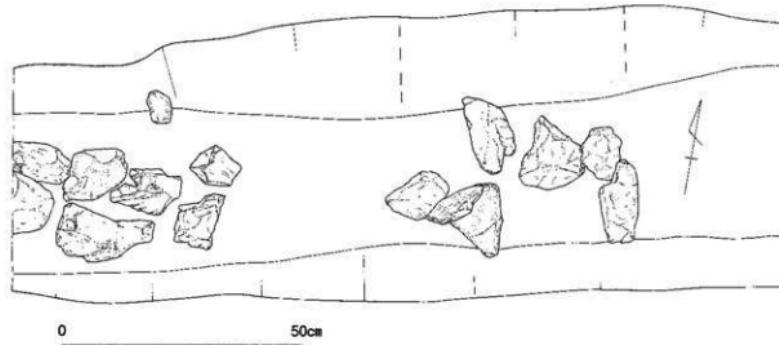
溝1 幅0.4m前後、深さ0.1~0.15mをはかる水路状の溝である。調査区東端で、南側に支線となる溝が派生する。溝内の5カ所から、ある程度間隔をおいて5~15cm大の自然石が10個前後まとめて出土した。溝埋土に人為的な埋め戻しの状況は認められなかったが、機能廃絶段階で、何らかの投棄行為が行われた可能性が考えられる。

溝1出土遺物 第53図1・2は、須恵器蓋である。1は残存高6.8cmをはかり、高台径13.8cmに復元できる。外面は回転ナデ、体部内面は不定方向のナデを施す。2は残存高4.0cmをはかり、高台径9.0cmに復元できる。貼付高台は、やや外側に開く形状を呈する。高台・体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリを施す。これらの遺物から、溝1は8世紀前半の所産と言える。

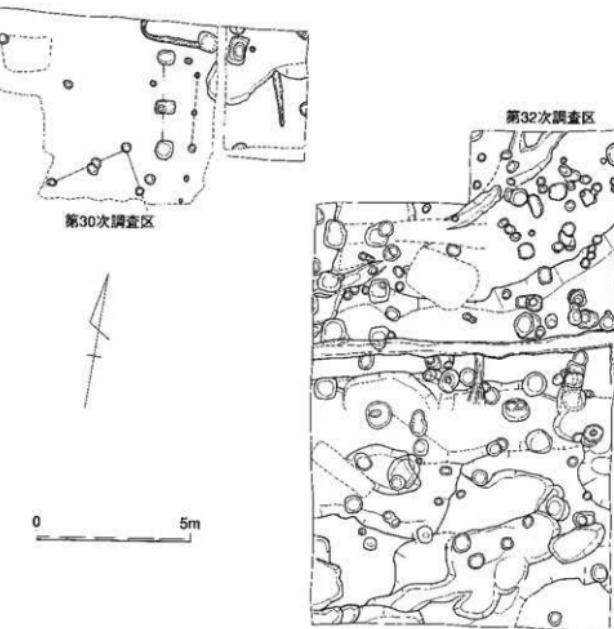
3.まとめ

当調査区からは、当初の予想をはるかに上回る造構を検出したが、これらは、古墳時代、奈良時代と平安時代の3時期に区分できる。以下、各時期の様相について述べる。

古墳時代 多数の柱穴から、この時期の建物6棟が復元できた。これらの建物は、その主軸方向と



第54図 溝1内壁出土状況〈部分〉(1:10)



第55図 第30・32次調査区平面図（1：160）

柱穴から出土した遺物から3時期の変遷が推定でき、調査区一帯が6世紀から7世紀にかけて、宅地として機能したことが判明した。

建物群は、落ち込み状の自然地形が埋没する過程で展開はじめた。そして、まだ埋没していないところを利用し、区画溝と考えられる溝3などを掘削したことが考えられる。また、溝3を境に不整形土坑群の掘削が行われるとおり、宅地内での空間利用のあり方が異なる。このような不整形土坑や区画溝を掘削して宅地を区分する方は、本町遺跡第18次調査などでも確認されている。こうした区画溝が個別の宅地の周囲に巡らされたものであるのか、今のところ完全に宅地全体を調査した事例がないため不明である。しかし、6世紀後半以降に本町遺跡の集落が、区画溝で区分された街区によって形成されていた可能性が考えられる。

ところで、先に挙げた第18次調査区は、当調査区北東200m付近に位置することから、この時期の集落がそれ以上の規模になることは言うまでもない。一方、隣接する新免遺跡では、6世紀後半以降の遺物が激減し、第57次調査区で確認した大別建物もこの時期に廃絶する。このことから、遺跡の中心が第29次調査区の居館の周辺へ移行した可能性がある。当遺跡で確認された建物群が、居館が機能する7世紀代にかけて存続することは、集落における街区の形成とあわせて、興味深い問題を提起する。

近い将来、居館・寺院・集落・墓地の構成から、須恵器生産にかかる古代集散地遺跡の実態が解明されることを期待したい。

奈良時代 溝1が水路として機能した段階で、周辺は耕地に変化すると考えられる。ただ、この時期も居館は機能しており、また第20次調査区でも建物群が展開していることから、集落の縮小に伴い、調査区周辺が耕地化したと言える。桜井谷窯跡も、この時期に操業する須恵器窯が激減すると言われ

3.まとめ

ており、集落と桜井谷窯跡群の推移は呼応しているかのようにみえる。なお、溝1は、溝3と並行しており、溝3で示された土地境界が、そのまま溝1に踏襲された可能性がある。

また、溝1廃絶後の状況については、新免遺跡第11次調査区の状況から散在的に建物群が展開した可能性を示すだけであるが、これまでまとまった遺構などは確認されていないことから、流動的な状況が予想される。

平安時代 今回、確認した建物8・9からなる建物群は、その存続期間は明確ではないものの、建物の規模などから、概ね11～12世紀代になる可能性が考えられる。この時期に、集落の一角をなす建物群が出現した可能性がある。今のところ、中世新免村に関連する集落関係遺構は、遺跡南端部で行われた第10次調査の例以外になく、その状況は明確とは言えないが、散村的な集落が11～12世紀頃から形成しあじめる可能性が考えられるようになった点に、大きな成果となった。

以上、3時期の状況について、その成果の概略を示した。本町遺跡における発掘調査も30次を越え、遺跡の特質も次第に明らかにされつつある。特に、第29次調査において、6世紀後半～8世紀の豪族居館が確認されたことで、本町遺跡が須恵器の集散地としての機能だけではなく、豪族居館と中心に展開する拠点的な集落であることが推定できるようになり、その重要性はより明確なものとなっている。しかし、その集落の全容を考えるには、なお周辺における発掘調査成果の蓄積が必要とされる。よって、今後とも周辺における開発では、遺跡の保全など慎重を期す必要があることを提言したい。

第VII章 野畠春日町古墳群第1次調査

1. 調査の経緯

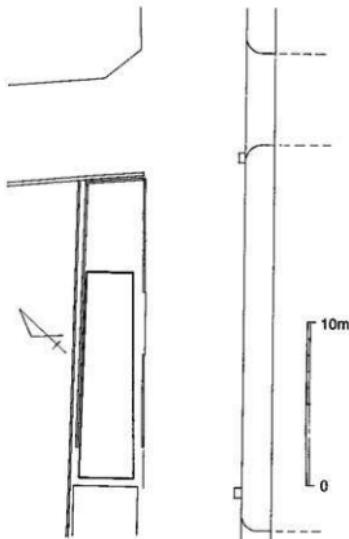
当調査区は、豊中市春日町4丁目17-3に所在する。平成17年8月14日、個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。それに基づき平成17年8月5日に確認調査を行なったところ、地表下25cmの段丘層上面にてビット1個を検出した。建物の基礎は地表下65cmの掘削が予定されており、遺構の損壊が免れないことから、協議の結果、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成17年8月29日～9月16日まで、50m²を対象に実施した。

2. 調査の成果

(1) 基本層序

調査区は全域にわたり、既存建物の解体に伴う厚さ10～15cmの擾乱土で覆われていた。その下には若干の須恵器片を含むにぶい赤褐色粘質土が10～20cmの厚さで堆積していた。地山は中位段丘層上部を構成する明赤褐色～黄褐色粘土である。



第56図 調査範囲図 (1 : 300)



第57図 調査位置図 (1 : 5000)

(2) 検出した遺構と遺物

遺構とみられるものとして、土坑状の落ち込み2ヶ所とピット4ヶ所がある。以下に特徴を記す。

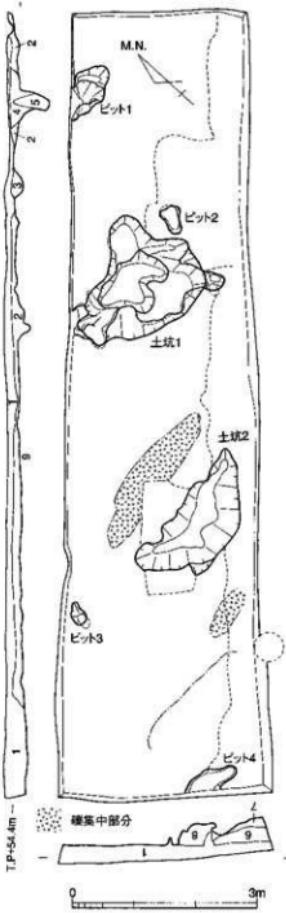
土坑1 南北1.9m、東西2.35mの不定形な平面形を呈する。深さは中央付近の最も深いところで82cmを測るが、底部に段差や凹凸が多いいため部分によって大きく異なる。覆土は混じりけの少ない暗褐色～黒褐色の粘土～シルトで、検出面での輪郭は漸移的で地山との境界は明瞭ではなかった。覆土と地山各部分との境界も全体として不明瞭で、側面がオーバーハングする部分や、部分的にピット状に食い込んでいく部分などが散見された。覆土は安定的な水平堆積を示さず、土層ラインが上部から下部に向かって垂直に下る部分や、隣り合う層位の下部に潜り込むような部分などを見られ、全体に乱れた状況を示す。また土器片の出土した8層などは、掘削途中での観察によれば、幅約20cmで溝状に東西方向に続く状況が認められた。側面の形状は、南側側面の肩部が急な角度で一旦落ち込み、下部が緩く傾斜するのに対し、北側側面は第59図の波線で表わしているように、さらに外側に向かって覆土が潜り込んでいくような状況が観察された。よって北側側面では地山を検出していない。

なお、土坑北側のピット2や東側に隣接する直径30cmのピットは、いずれも黒褐色シルトを覆土とし、土坑1と同様、地山との境界は不明瞭であった。よって土坑1と本来一体のものであった可能性が高い。

出土遺物は第59図の8層から土器の細片(1cm角)2点が出土した。色調は淡い橙色で、1mm以下の砂粒を含む。風化のため器面の調整等は不明で、時期は判然としない。

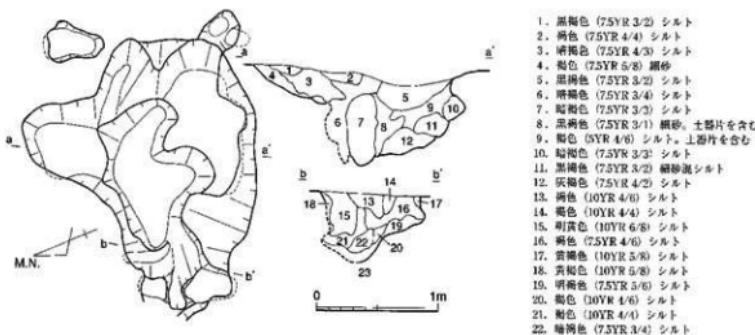
土坑2 南北の幅1m、東西の長さ2.45mの平面三日月状を呈し、深さは最大で72cmを測る。土坑1と同様、上面での輪郭はさほど明瞭ではなかった。覆土はにぶい黄褐色～黒褐色の粘質シルトを主体とし、掘削底部の地山との境界も漸移的であった。覆土の状況を第60図bラインで見ると、土坑1と同様、非常に乱れた状況を示している。比較的安定した褐色粘質シルト層の中央部分を、他の層とは明瞭に区別される黒褐色粘質シルトがピット状に上部から大きくなり込んでいくような状況が観察された。また他の土層を上下から巻き込むような部分も見られた。側面の地山との境界は、土坑1と同様、南側側面は比較的明瞭で、地山が一定の傾斜で下るのに対し、北側側面は極めて不明瞭で、明確に地山を検出することはできなかった。

遺物は12層付近より同一個体のものと見られる土器細片(1~3cm角)3点が出土した。うち1点は、幅1mmのヘラによる沈線が7mm間隔に施されており、確實ではないが、



1. 表土
2. にぶい赤褐色 (SYR 4/3) 粘質土。燒窓器を含む。
3. 黒褐色 (7.5YR 4/6) 粘粒性
4. 塗覆土 (7.5YR 3/3) 硬泥質砂泥シルト
5. 黑褐色 (7.5YR 2/2) シルト
6. 黃褐色 (7.5YR 4/2) 粘泥質粘土
7. にぶい黃褐色 (10YR 5/5) 砂質土
8. 黄褐色 (7.5YR 4/4) 粘質土
9. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土

第58図 調査区平面・断面図 (1:80)



第59図 土坑1平面・断面図 (1:40)

弥生前期の壺頸部～体部の破片である可能性も考えられる。色調は淡い橙色で、クサリ縞を含む直径1mm以下の砂粒を多く含む。

地山の変化部分について 調査区の地山は、中位段丘層を構成する明赤褐色～黄褐色粘土を主体とするが、部分的にぼい黄色に変化していたり、堅く縮まる部分などが観察された。また土坑2の北側では、約40cmを隔てて縛の集中部分が見られた。これは長さ2.6m、幅60cmの範囲に広がり、土坑2の長さとほぼ等しく、方位も東西で共通している。さらに土坑2の南側にも同方位をとる縛の集中箇所があり、さらにその南側にも同方位で土質の異なる部分が観察された。とくに土坑2と北側の縛集中部分は、規模も等しく同一方位をとることから、本来一体のものであった可能性が高く、土坑2北側側面の覆土を振り進めれば、この縛集中部分に達するものとも考えられた。なお縛集中部分と土坑2との間は、土質、色調ともに他の地山と異なるところがなく、覆土の一部とは考えがたい。

ピット 直径30～90cmのピットを4基検出した。いずれもまとまりある形状を示さず、底部に段差が生じたり、斜め方向あるいは水平方向に覆土が食い込んでいくなどの特徴が見られる。覆土は土坑と同様、混じりけのない褐色～黒褐色の新質シルトを主体とし、出土遺物は皆無であった。このうちピット1とピット4はほぼ東西の方位をとり、土坑の方位と共通する。

3.まとめ

今回検出した土坑及びピットの特徴をまとめると次のようになる。

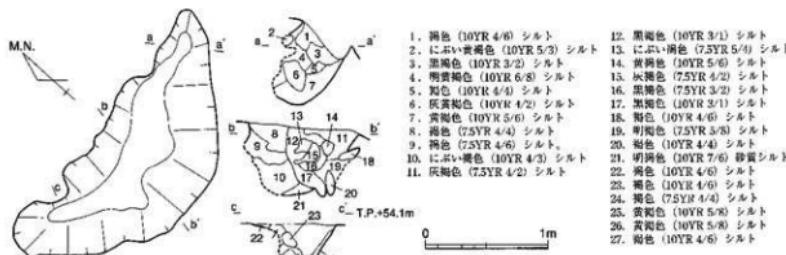
1. 覆土は、黄褐色～黒褐色の粘土～シルトを主体とし、混じりけのないクロボク様の土質を示す。とくに土坑の覆土は、安定した水平堆積を示さず、非常に乱れた状況を示す。
2. 地山との境界は、概して漸移的で明瞭ではない。とくに土坑の北側は、検出面での輪郭は比較的容易に確認できるものの、下部で覆土が大きく潜り込んでいくような状況が観察された。またピットも含め、段差やピット状に食い込む部分などが散見された。

3. ピット、土坑とともに東西方位をとる点で共通する。

4. 明確な共伴遺物は皆無であった。

以上の特徴から、今回検出した遺構と見られるものの大半は、おそらく樹木の根による浸食（生物擾乱）もしくは風倒木の痕跡である可能性が高いと判断する。土坑2北側の縛集中部分についても、本来土坑2と一緒にものであったと見られ、樹木の倒壊などに伴って根元の下部層位が北側の地山表層部にのみ移動した結果によるものと考えたい。また土坑やピット、縛集中部分、土質の変化部分のいずれもが、ほぼ東西の同一方位をとる点については、段丘層の層向（形成過程）や堆積環境などの

3. まとめ



第60図 土坑2平面・断面図 (1:40)

自然営為の影響によるものとも考えられ、いずれも人為の所産でないことを傍証するものといえる。したがって今回の調査区においては、人為にかかる遺構は皆無であると判断する。

ところで、以上のような特徴を有する不定形土坑については、これまでにも本町遺跡や新免遺跡などで検出されており、いずれも豊中台地を形成する段丘上に立地する遺跡である。また当調査地点から100~150m東南に位置する野畠春日町遺跡1次、2次、3次調査地点でも、不定形土坑の集中が見られる(註)。とくに第1次調査報告書では、7基の土坑を縄文中期~弥生前期の墓と判断しているが、脂肪酸分析の結果は、必ずしも分析の対象となった全ての土坑が墓であるという確実な根拠を提示するものではない。今回の調査区で検出された土坑と同様、植物の根による搅乱、もしくは風倒木痕が少なからず含まれている可能性が高いのではないかろうか。ただし一部の遺機で明確に縄文土器が共伴していることから、検出された土坑の全てを生物搅乱の痕跡と見るのは早計であろう。遺構の性格、就中墓の当否については、今後周辺部の詳細な調査に委ねられるべきものと判断する。

なお、これら不定形土坑の時期を考える上で、極く少量ながら遺物が出土している点は重要である。いずれも細片のため確実ではないが、上に述べたごとく弥生前期のものと見れば、縄文以来の森林を暴風など自然営為の後、整理、開発した弥生人の活動の一端を垣間見ることも可能である。千里川中流域における森林開発のプロセスを明らかにする上で、今後とも周辺部の調査には注意を払う必要があろう。

(註) 山元 建他「野畠春日町遺跡-第1次調査報告書-」 野畠春日町遺跡発掘調査団 1987年3月

山元 建他「野畠春日町遺跡-第2次調査報告書-」 野畠春日町遺跡発掘調査団 1988年3月

第IX章 確認調査の成果

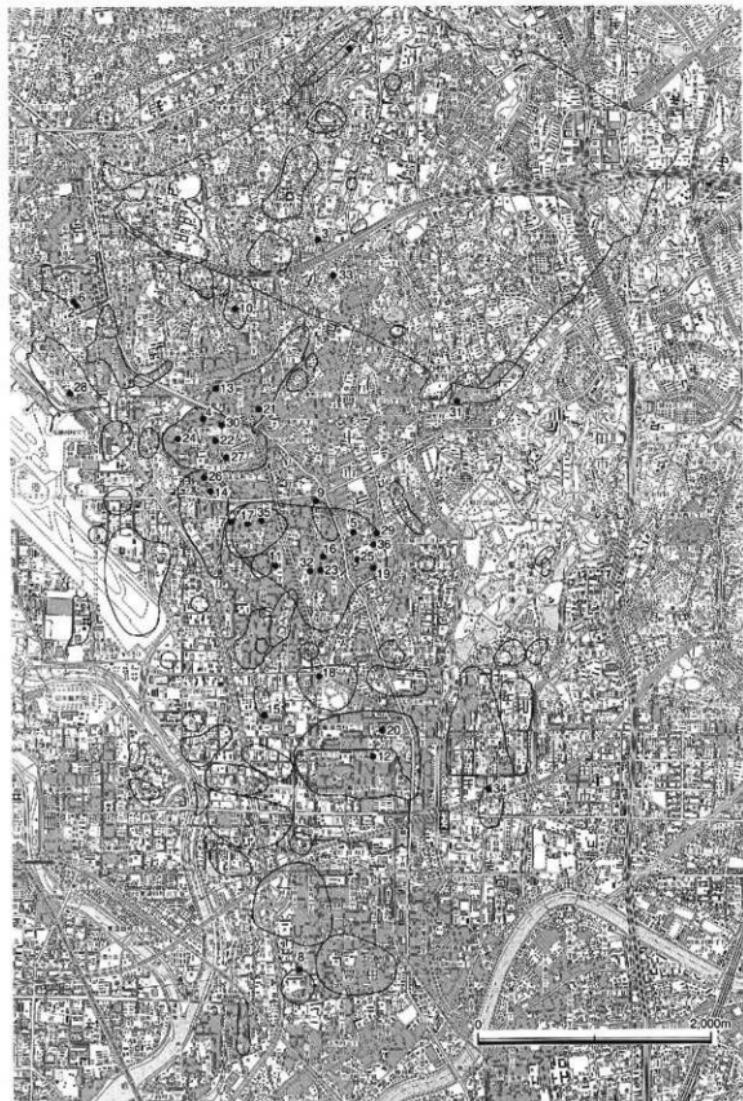
確認調査の概要

昨年度1月～3月および今年度4月～12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は、36件を数え、昨年度8件、今年度28件という内訳である。このうち、8件の調査で遺構等が確認され、うち1件については協議の結果、地積跡第34次調査として本格的な発掘調査を行なうこととなった。残り7件については、建物の基礎掘削深度が遺構検出面に及ばなかったことなどから、本格的な発掘調査には至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第61図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第1表 確認調査一覧表

番号	地名	所在地	測量点	調査前 調査後	露頭の 有無	測量後の地盤	担当者	備考
1	大波堤古墳群	水島町4丁目19の一部	20050113	個人住宅建設	53.95	無	若工・海内	
2	浪池古墳群	浪池北町4丁目13の一部	20050120	個人住宅建設	53.82	有	春工・福岡	基礎深度浅
3	松井谷塚跡	町の町6丁目54	20050127	個人住宅建設	33.71	未確認	春工・清水	
4	新免遺跡	玉井町2丁目23の一部	20050207	個人住宅建設	107.15	有	若立公良・幸工・津内	對照必要
5	坂本古墳群	中坂町5丁目16-3	20050224	個人住宅建設	98.22	無	若工・清水	
6	安池古墳群	安池北町2丁目13-4	20050303	個人住宅建設	58.75	未確認	幸工・海内	
7	西町古墳群	西町北2丁目66-27	20050317	個人住宅建設	71.00	未確認	春工・津内	
8	角江遺跡	庄内町4丁目54-2の一部	20050324	個人住宅建設	110.91	未確認	若工・津内	
9	岡町遺跡	中坂町2丁目10-5	20050407	個人住宅建設	26.73	無	若工・津内	
10	柴原古墳群	月隈山2丁目12B-12	20050414	個人住宅建設	127.34	未確認	春工・海内	
11	福塚古墳群	岡町南2丁目13B-13	20050514	個人住宅建設	84.05	有	若立会後・福重・工事	福岡実況
12	難波遺跡	福原西町2丁目48の一部	20050522	個人住宅建設	55.48	有	本課業・福原(34才)・福田	
13	木町遺跡	木町2丁目43-2他	20050532	個人住宅建設	69.46	未確認	幸工・津内	
14	山ノ上遺跡	立石町2丁目97-15	20050536	個人住宅建設	70.07	有	若立会後・若工・津内	計画変更
15	曾根原山遺跡	曾根原1丁目172-6	20050538	個人住宅建設	71.21	未確認	若工・津内	
16	福澤古墳群	中坂町4丁目16B-12	20050602	個人住宅建設	107.64	無	春工・津内	
17	岡町古墳群	西町北2丁目30	20050608	個人住宅建設	70.18	無	若工・津内	
18	東島北遺跡	竹原町4丁目89-18	20050610	個人住宅建設	50.23	未確認	幸工・津内	
19	福塚古墳群	福塚町2丁目8-9	20050616	個人住宅建設	53.70	未確認	若工・津内	
20	難波遺跡	難波町1丁目21B-6	20050714	個人住宅建設	36.45	無	春工・福岡	
21	木町遺跡	木町3丁目37-1	20050714	個人住宅建設	61.39	有	春工・福岡	基礎深度浅
22	新免遺跡	平野町2丁目121	20050805	個人住宅建設	82.31	未確認	春工・福岡	
23	板原古墳群	南堀町1丁目93-3	20050808	個人住宅建設	81.98	未確認	幸工・福岡	
24	難波遺跡	平野町3丁目32	20050915	個人住宅建設	68.70	可能性なし	再立会後・若工・津内	福岡深層浅
25	板原古墳群	南堀町2丁目19-4、20-3	20050902	個人住宅建設	83.22	無	若工・清水	
26	山ノ上遺跡	立石町1丁目80-1	20050909	個人住宅建設	56.31	有	若立会後・福重・工事	福岡・基礎深度浅
27	新免遺跡	幸町2丁目120	20050929	個人住宅建設	321.65	無	春工・福岡	
28	東池西遺跡	東池西町2丁目71-1、71-38	20051013	個人住宅建設	102.24	未確認	幸工・津内	
29	福塚古墳群	福塚町1丁目65-2	20051006	個人住宅建設	77.15	無	若工・横田	
30	新免遺跡	玉井町1丁目236-1、236-3の各一部	20051009	個人住宅建設	64.34	有	若立会後・福重・工事	福岡実況
31	福野古墳群	福野町4丁目6の一部	20051027	個人住宅建設	184.69	無	春工・津内	
32	福塚古墳群	中坂町1丁目3-1	20051107	個人住宅建設	126.59	無	春工・津内	
33	板井谷塚跡	「難波」1丁目199-8	20051104	個人住宅建設	83.99	無	幸工・津内	
34	小畠根高遺跡	小畠根1丁目518-9の一部	20051110	個人住宅建設	46.91	無	若工・津内	
35	岡町北遺跡	岡町北3丁目116-4	20051206	個人住宅建設	52.17	無	若工・津内	
36	福塚古墳群	福塚町3丁目92-2	20051225	個人住宅建設	50.08	無	春工・福岡	



第61図 確認調査地点位置図

2005-01 太鼓塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）1月13日

調査場所：豊中市永楽荘4丁目19の一部

調査対象面積：53.93m²

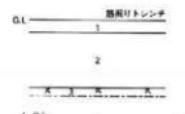
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80~85cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第62図 トレンチ掘削状況



第63図 トレンチ断面図

2005-02 蛍池北遺跡

調査日：平成17年（2005年）1月20日

調査場所：豊中市螢池北町2丁目13の一部

調査対象面積：53.82m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下90cmにおいて包含層を、地表下100cmにおいて遺構面を検出した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、着工を指示。



第64図 トレンチ掘削状況



第65図 トレンチ断面図

2005-03 桜井谷窯跡群

調査日：平成17年（2005年）1月27日

調査場所：豊中市桜の町6丁目54

調査対象面積：355.71m²

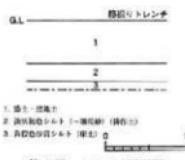
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下80cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第66図 トレンチ掘削状況



第67図 トレンチ断面図

2005-04 新免遺跡

調査日：平成17年（2005年）2月17日

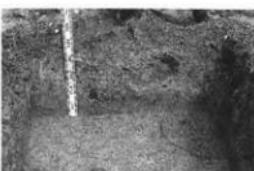
調査場所：豊中市玉井町2丁目22の一部

調査対象面積：107.15m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2において地表下61cmで基盤層を検出し、その上面から土坑・ピットを確認した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、再立会の上、着工を指示。



第68図 トレンチ掘削状況



第69図 トレンチ平面・断面図

2005-05 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）2月24日

調査場所：豊中市中桜塚3丁目136-3

調査対象面積：58.22m²

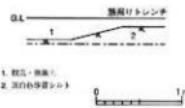
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下10~25cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第70回 トレンチ掘削状況



第71回 トレンチ断面図

2005-06 蛍池北遺跡

調査日：平成17年（2005年）3月3日

調査場所：豊中市螢池北町2丁目13-4

調査対象面積：58.73m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下60cm）内においては、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第72回 トレンチ掘削状況



第73回 トレンチ断面図

2005-07 岡町北遺跡

調査日：平成17年（2005年）3月17日

調査場所：豊中市岡町北2丁目66-27

調査対象面積：71.00m²

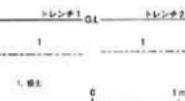
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下45cm）内においては、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第74回 トレンチ掘削状況



第75回 トレンチ断面図

2005-08 島江遺跡

調査日：平成17年（2005年）3月24日

調査場所：豊中市庄内堀町4丁目54-2の一部

調査対象面積：110.91m²

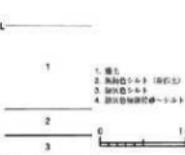
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下165cm）内においては、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第76回 トレンチ掘削状況



第77回 トレンチ断面図

2005-09 岡町遺跡

調査日：平成17年（2005年）4月7日
 調査場所：豊中市中桜塚2丁目105-3
 調査対象面積：76.73m²

調査の方法：重機により範囲内を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下32cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第78図 トレンチ掘削状況



第79図 トレンチ断面図

2005-10 柴原遺跡

調査日：平成17年（2005年）4月14日
 調査場所：豊中市刀根山2丁目132-13
 調査対象面積：127.34m²

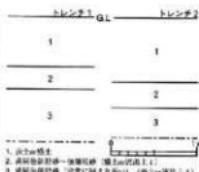
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下145cm）内においては、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第80図 トレンチ掘削状況



第81図 トレンチ断面図

2005-11 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）4月14日
 調査場所：豊中市同上南1丁目119
 調査対象面積：84.46m²

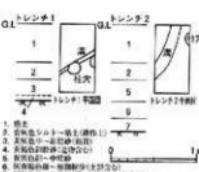
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2では地表下90cm及び地表下125cmにおいて遺構面を検出し、トレンチ2では地表下110cmにおいて包含層が検出された。

調査後の処置：基礎掘削深度の変更により、再立会の上、慎重着工を指示。



第82図 トレンチ掘削状況



第83図 トレンチ平面・断面図

2005-12 穂積遺跡

調査日：平成17年（2005年）5月12日
 調査場所：豊中市服部西町2丁目837
 調査対象面積：55.48m²

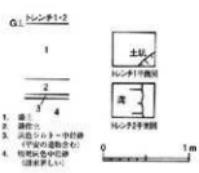
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2において地表下83cmで遺物包含層を、地表下88cmで遺構面を検出した。

調査後の処置：調査後、発掘調査を行う。
 （穗積遺跡第34次調査）



第84図 トレンチ掘削状況



第85図 トレンチ平面・断面図

2005-13 本町遺跡

調査日：平成17年（2005年）5月12日

調査場所：農中市本町2丁目143-2地

調査対象面積：69.46m²

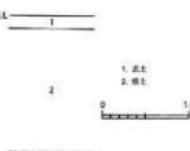
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下160cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第86図 トレンチ掘削状況



第87図 トレンチ断面図

2005-14 山ノ上遺跡

調査日：平成17年（2005年）5月26日

調査場所：農中市立花町2丁目97-13

調査対象面積：70.07m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下115cmにおいて基礎層を検出し、その上面において遺構面を確認した。トレンチ2では、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：基礎深度変更により、再立会の上、着工を指示。



第88図 トレンチ掘削状況



第89図 トレンチ平面・断面図

2005-15 曽根南遺跡

調査日：平成17年（2005年）5月26日

調査場所：農中市利倉東1丁目172-6

調査対象面積：71.21m²

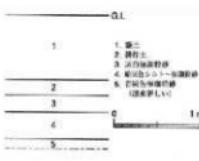
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下155cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第90図 トレンチ掘削状況



第91図 トレンチ断面図

2005-16 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）6月2日

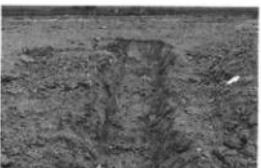
調査場所：農中市中桜塚1丁目168-1,2

調査対象面積：107.64m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下40cmにおいて基礎層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第92図 トレンチ掘削状況



第93図 トレンチ断面図

2005-17 岡町北遺跡

調査日：平成17年（2005年）6月9日
 調査場所：豊中市岡町北2丁目30
 調査対象面積：70.18m²

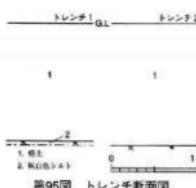
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下135cm）において基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第94図 トレンチ掘削状況



第95図 トレンチ断面図

2005-18 豊島北遺跡

調査日：平成17年（2005年）6月30日
 調査場所：豊中市曾根南町1丁目89-18
 調査対象面積：56.25m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下10cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第96図 トレンチ掘削状況



第97図 トレンチ断面図

2005-19 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）6月30日
 調査場所：豊中市南桜塚3丁目8-9
 調査対象面積：85.70m²

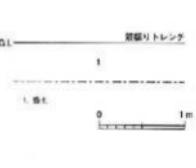
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下45cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第98図 トレンチ掘削状況



第99図 トレンチ断面図

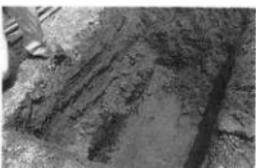
2005-20 穂積遺跡

調査日：平成17年（2005年）7月14日
 調査場所：豊中市服部豊町1丁目212-6
 調査対象面積：36.45m²

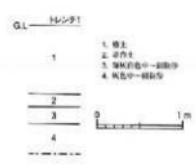
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下150cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第100図 トレンチ掘削状況



第101図 トレンチ断面図

2005-21 本町遺跡

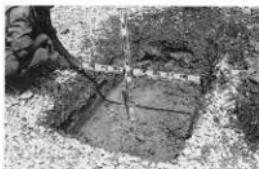
調査日：平成17年（2005年）7月14日

調査場所：豊中市本町3丁目347-1

調査対象面積：64.59m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ1・2とともに地表下45cmにおいて整地層を検出し、その上面より近世以降の遺構？を確認した。

調査後の処置：基礎深度は遺構面より浅くなることから、着工を指示。



第102図 トレンチ掘削状況



第103図 トレンチ平面・断面図

2005-22 新免遺跡

調査日：平成17年（2005年）8月4日

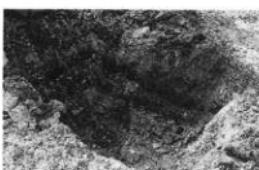
調査場所：豊中市玉井町2丁目121

調査対象面積：62.34m²

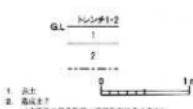
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに掘削深度（地表下50cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認済み後、着工を指示。



第104図 トレンチ掘削状況



第105図 トレンチ断面図

2005-23 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）9月8日

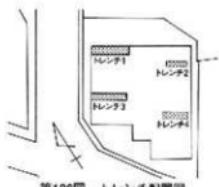
調査場所：豊中市南桜塚1丁目93-3

調査対象面積：81.98m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ4か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・3では古墳周辺の可能性がある落ちを検出した。トレンチ2・4では掘削深度（地表下50cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：基礎深度は浅いため、着工を指示。



第106図 トレンチ配置図



第107図 トレンチ断面図

2005-24 新免遺跡

調査日：平成17年（2005年）9月15日

調査場所：豊中市玉井町3丁目32

調査対象面積：68.70m²

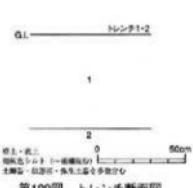
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに地表下55cmで遺物包含層を検出したが、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：基礎掘削は壁内に収まるため、再立会の上、着工を指示。



第108図 トレンチ掘削状況



第109図 トレンチ断面図

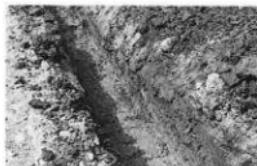
2005-25 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）9月22日
調査場所：豊中市南桜塚2丁目19-4, 20-3
調査対象面積：83.22m²

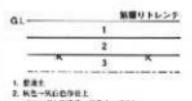
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下40cmにおいて基礎層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第110図 トレンチ掘削状況



第111図 トレンチ断面図

2005-26 山ノ上遺跡

調査日：平成17年（2005年）9月29日
調査場所：豊中市立花町1丁目80-1
調査対象面積：56.31m²

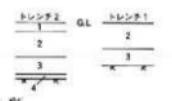
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下50~60cmにおいて遺構面を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：基礎掘削が遺構面上に及ぶ可能性があることから、再立会の上、慎重工事を指示。



第112図 トレンチ掘削状況



第113図 トレンチ断面図

2005-27 新免遺跡

調査日：平成17年（2005年）9月29日
調査場所：豊中市末広町1丁目120
調査対象面積：211.45m²

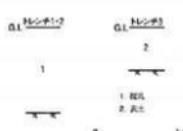
調査の方法：重機によりトレンチ3か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2では地表下100cm、トレンチ3では地表下50cmにおいて基礎層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第114図 トレンチ掘削状況



第115図 トレンチ断面図

2005-28 蛍池西遺跡

調査日：平成17年（2005年）10月13日
調査場所：豊中市螢池西町2丁目71-1, 38
調査対象面積：102.54m²

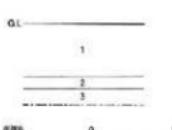
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下88cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第116図 トレンチ掘削状況



第117図 トレンチ断面図

2005-29 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）10月20日

調査場所：豊中市南桜塚3丁目65-2

調査対象面積：77.13m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第118図 トレンチ掘削状況



第119図 トレンチ断面図

2005-30 新免遺跡

調査日：平成17年（2005年）10月20日

調査場所：豊中市玉井町1丁目

236-1,3の各一部

調査対象面積：68.34m²

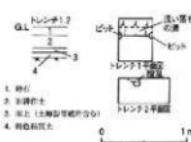
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに地表下36cmにおいて基盤層を検出し、トレンチ1から柱穴2基、トレンチ2から柱穴1基を確認した。

調査後の処置：基盤深度の変更により、再立会の上、慎重工事を指示。



第120図 トレンチ掘削状況



第121図 トレンチ平面・断面図

2005-31 熊野田遺跡

調査日：平成17年（2005年）10月27日

調査場所：豊中市熊野町4丁目6の一部

調査対象面積：185.50m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに掘削深度（地表下110cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第122図 トレンチ掘削状況



第123図 トレンチ断面図

2005-32 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）10月27日

調査場所：豊中市中桜塚1丁目349-1

調査対象面積：126.59m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所、坪掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに地表下80cmで基盤層を検出したが、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第124図 トレンチ掘削状況



第125図 トレンチ断面図

2005-33 桜井谷窯跡群

調査日：平成17年（2005年）11月4日
調査場所：豊中市上野西3丁目190-8
調査対象面積：81.50m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下25cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第126図 トレンチ掘削状況



第127図 トレンチ断面図

2005-34 小曾根南遺跡

調査日：平成17年（2005年）11月10日
調査場所：豊中市小曾根1丁目518-9の一部
調査対象面積：46.91m²

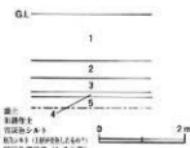
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下220cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第128図 トレンチ掘削状況



第129図 トレンチ断面図

2005-35 岡町北遺跡

調査日：平成17年（2005年）12月8日
調査場所：豊中市岡町北3丁目119-4
調査対象面積：52.17m²

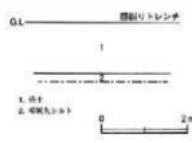
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下120cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第130図 トレンチ掘削状況



第131図 トレンチ断面図

2005-36 桜塚古墳群

調査日：平成17年（2005年）12月26日
調査場所：豊中市南桜塚3丁目92-2
調査対象面積：59.08m²

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下100cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

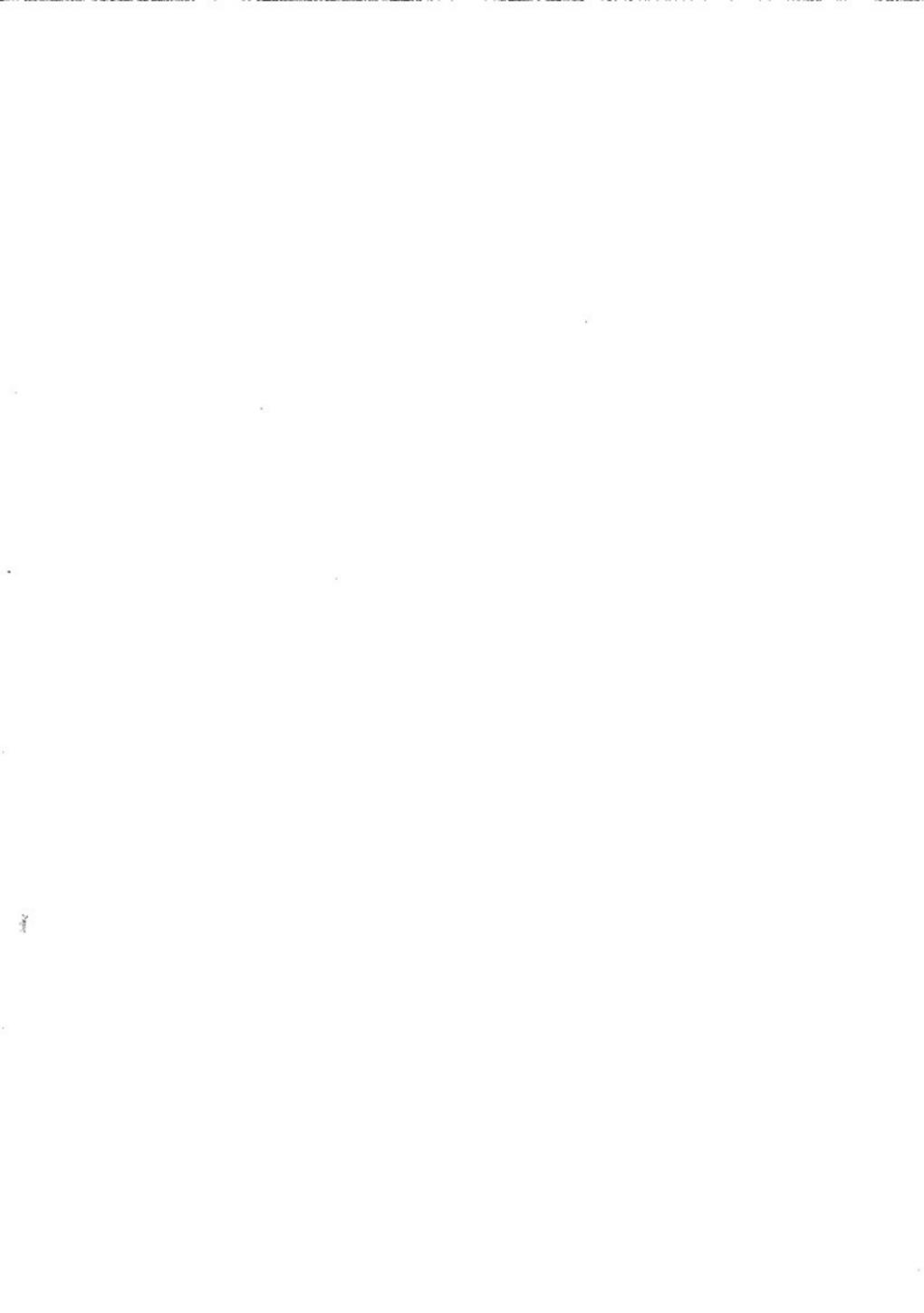
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第132図 トレンチ掘削状況



第133図 トレンチ断面図



図版

図版1 桜塚古墳群第8次調査



(1) 調査区全景（東から）



(2) 溝1掘削状況（北から）

図版2 稲積遺跡第32次調査

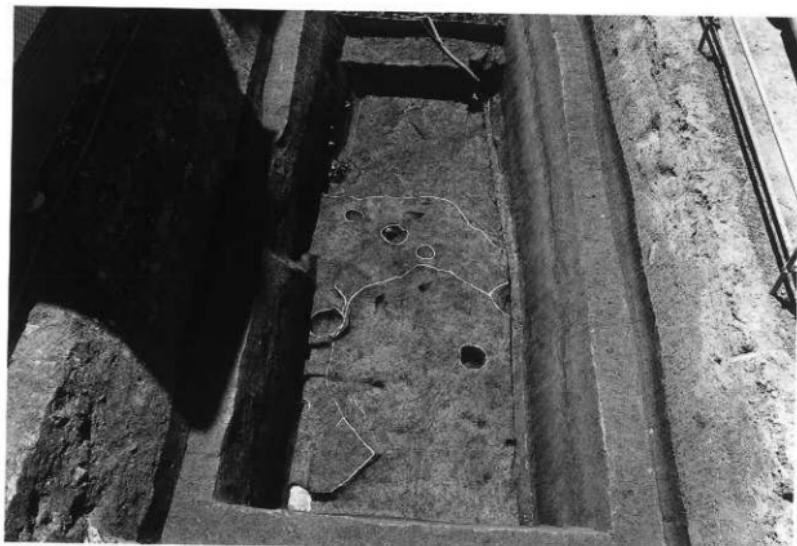


(1) 調査区全景（西から）



(2) 落ち込み状遺構遺物出土状況

図版3 穂積遺跡第33次調査



(1) 1区全景



(2) 2区全景

図版4 穂積遺跡第33次調査

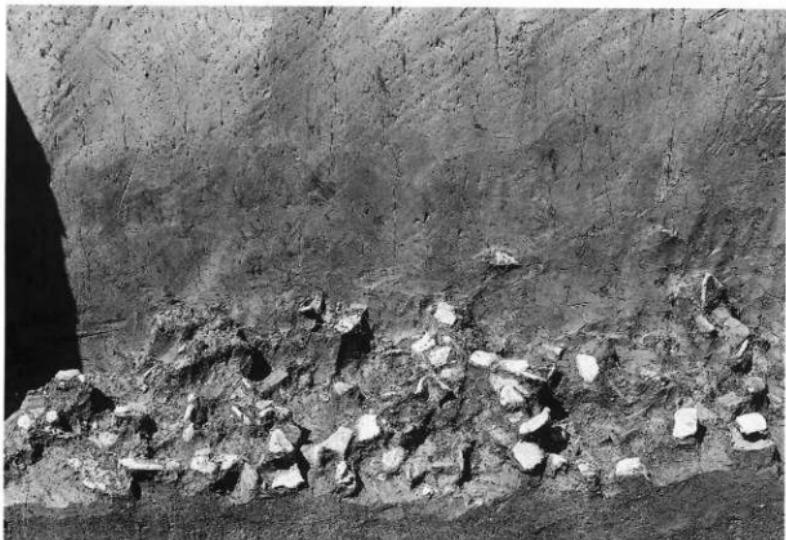


(1) 3区全景



(2) 基本土層（3区南壁面）

図版 5 穂積遺跡第33次調査



(1) 1区土坑1上層遺物出土状況



(2) 河川東岸遺物出土状況

図版6 穂積遺跡第33次調査 出土遺物



(1) 第16図11



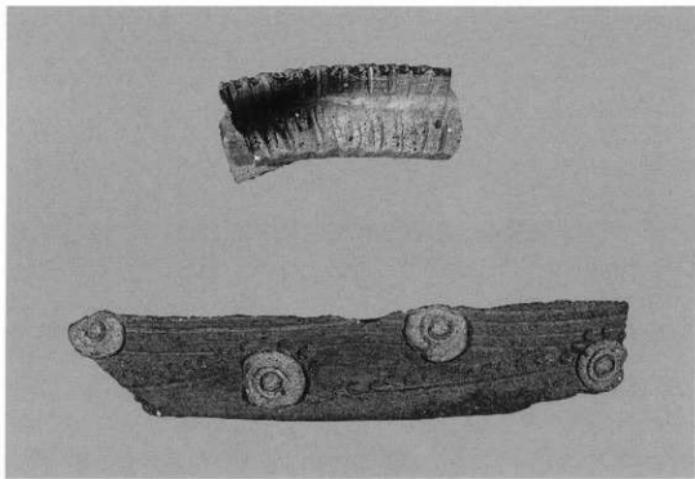
(3) 第16図12



(2) 第16図14

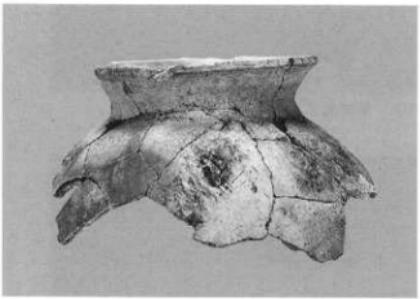
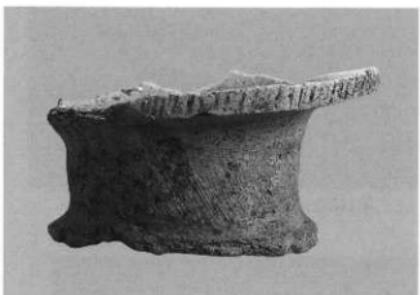
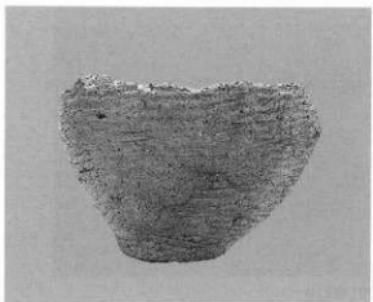


(4) 第19図2

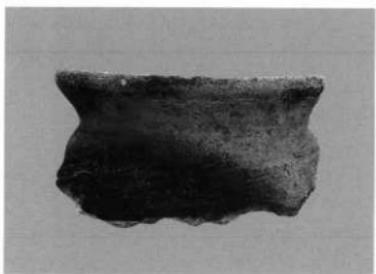


(5) 上：第16図18 下：第15図1

図版7 穂積遺跡第33次調査 出土遺物



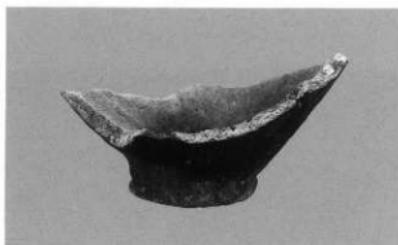
図版8 穂積遺跡第33次調査 出土遺物



(1) 第19図19



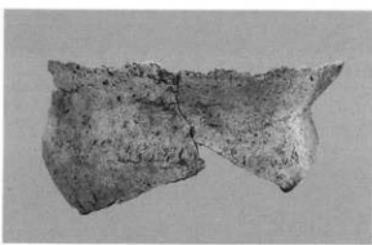
(5) 第19図20



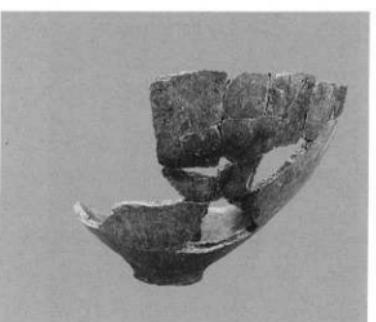
(2) 第19図25



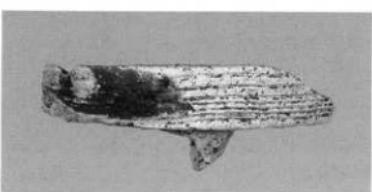
(6) 第20図34



(3) 第20図30



(7) 第21図4



(4) 第16図2

図版9 穂積遺跡第34次調査

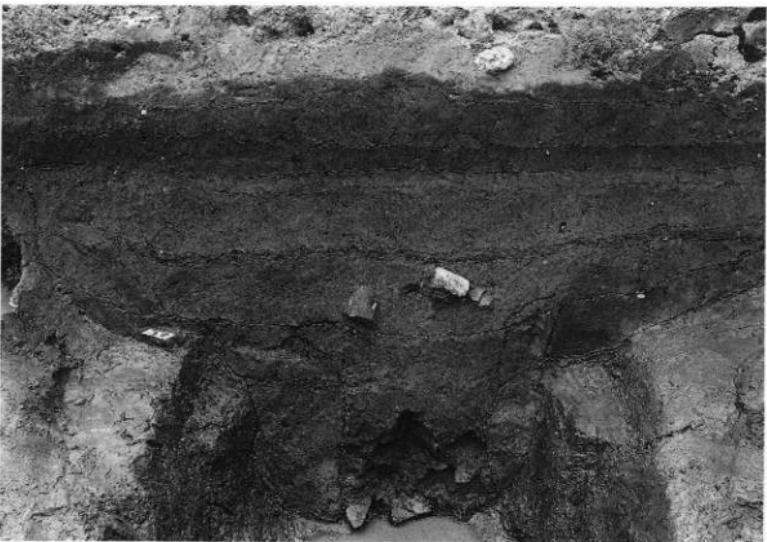


(1) 調査区全景（東半部 東から）



(2) 井戸1 碓群検出状況（東から）

図版10 穂積遺跡第34次調査



(1) 井戸1断面（東から）



(2) 調査区全景（西半部 南から）